喜撰法師

我家は浦賀の近所しかも濱あぶないとこと人がいふなり

小野小町

顔の色はかはりにけりな異な面と亞米利加人を眺めせしまに

蟬丸

これやこのゆくもかへるもからばなししりもしなひでおふかたの口

僧正遍昭

亞米利加が雲の通路のり來たら此築島でまてととめん

參議篁

芝の濱築島かせぎに漕ぎ行くと人にはつげよ品の女郎かい

陽成院

つくかねの六つよりいでゝ御臺場の土俵重ねて島となりぬる

光孝天皇

君が爲はるの用意に島をつき我が受負の益となりつゝ

中納言行平

たちわかれ田舍へ行くも金工面名主に借りて又た還りこん

在原業平

千早ふる神の利益か亞米利加でからくれないといゝかへるとは

藤原敏行朝臣

すみなれぬ岸に寄つたら亞米利加を一と打にして心地よからん

素性法師

はる來ると云ひしばかりに秋冬の御臺場築て待ち出る哉

文屋康秀

吹からに神風吹て破船せば亞米利加船は嵐といふらん

菅家

このたびはなにもとりあへず鎧鍛冶、革の具足も紙でまにまで

三條右大臣

なにしおふ大阪陣のまゝなれば錆びたるつるぎ研ぐ由もがな

源宗于朝臣

江戸田舍の淋しさ

江戸田舍今ぞ淋しさまさりけりとう人さはぐゆうべとおもへば

凡河内躬恒

心あてにおらばやきたれ毛唐人細川勢は日本の花

紀友則

濱かたの光のどけき大筒の音におそれて魚の散るらん

伊勢

なにはかた短きあしの亞米利加も船でこの世をすぐしてよとや

大江千里

舟みれば日々に物こそ騒がしき我身ばかりの固めにあらねど

貞信公

御殿山みねの御固め越前家今亞米利加の來るをまたなん

中納言兼輔

相模原湧き出るほど日本勢亞米利加船は恐れあるらん

春道列樹

山濱の風に靡きて旗じるし流れもあへぬ端午なりけり

品川臺場の効

當時品川に十一の臺場を急造したのは、所謂る盜を見て繩を綯ふの類であつたが、然も當時の都人士の心を安著せしむる政策としては、多少の効能無しとは限らなかつた。「細川勢は日本の花」とあるは、當時本牧を固めたる肥後熊本の細川藩が、取締り行屆き、米人が端艇にて上陸せんとしたるを制止したるなどの評判を云ふ。

【七七】擬作百人一首（二）

清正の武威

紀貫之
人はいさ心も猛き清正の武威の譽れは他に聞へける

文屋朝康
大筒に風の吹しく時なれば貫きとほり異船ちりけり

右近
わすられぬわが子がために出す母は亞米利加の首をおしくも有哉

平兼盛
しのぶれど色は淺黑ひげ長く毛唐人めと人のいふらん

壬生忠見
戀すてふ我は固めに立別れ女房は誰と思ひ染めしか

清原元輔
變ちきな異國の船をせめるには我一番に浪こさじとは

固め番の淋しさ

中納言敦忠
相見ても後には來るな毛唐人交易なぞは思はざりけり

曾根好忠
日本へ渡るあめりか楫折れて往く先知れぬ海の道かな

恵慶法師
とう人でしげるゝ江戸も淋しさに人こそ知らぬ質はおきけれ

源重之
風をいたみ岩うつ波の上きせん碎けてよひと思ふころ哉

藤原義孝
君がため惜からざりし命なり亞米利加うたんと思ふころ哉

右大將道綱母
長き夜に獨りねるのは固め番いかに淋しきものとかはしる

儀同三司　母

わすれじの行末までも固くとめ今日を限りの亞米利加の船

大納言　公任

大筒は絶えず久しく稽古つみ名高き人は猶きこへけり

和泉　式部

あらざらんこの世に出でし名聞に今アメリカにあふ事もがな

紫　式部

めぐりあふて見てもおろしやかわかりかねアメリカ人は足が短し

赤染衛門

獨りではねられまじものを小夜ふけて傾くまでのしんぼするかな

清少納言

夜をこめて鳥のなく迄てふはんの勝負〳〵の聲は許さじ

參議等

朝時分裸でお臺場稼ぐのも餘りてなどか錢の戀しき

俊恵法師

よもすがら御固め番でねもやらず酒呑むひまさへつれなかるらむ

藤原興風

誰れをかも知る人もなき日本で獨り死んでもアメリカなくに

式子内親王

アメリカよ絶へなば絶へねながらへば時候違いで弱りもぞする

待賢門院堀川

長からん異國の船は逗留をすれど軍さにならぬとぞ思ふ

三條院

心にもあらでアメリカわるふざけ戀しかるべき日本の米

崇德院

船はやの日本でせかるゝアメリカも願はすへに叶はんとぞ思ふ

飛脚の苦勞

周防　内侍

春の夜の夢のやうなる熊坂に取られし品は猶もおしけれ

壬生　忠岑

あわかげのつれなき飛脚急ぐには山道ほどの憂き物はなし

大中臣能宣朝臣

御垣守衛士の蠟燭大砲に晝は消へても物をこそおもへ

祐子内親王家紀伊

音に聞く高縄沖の築島で稼ぎしからだぬれもこそすれ

藤原實方朝臣

かくとだにばんやはおふれはり出しさしもとうときことゝ思へば

清原深養父

あすの夜は又もよひから自身番女房の床へ誰がやどるらん

藤原道信朝臣

賣れ行くもの

あけぬればくれの六つまで稼ぎためアメリカさわぎでもとのもくあみ

小式部内侍

アメリカへ行くのゝ海の遠ければまた船が來て臺場おかため

伊勢　大輔

古のならぬ蒙古を滅したはたまんだらがのこり有哉

入道前太政大臣

花さそふ嵐も吹かぬ困窮に賣れ行くものはよろひなりけり

大僧正行尊

諸共に憐れと思へ毛唐人舟より外にしる人はなし

西行　法師

なげいても質屋は物を値下して口説けどかさぬ我が小袖かな

能因　法師

嵐吹く三浦の沖で蒸氣船碎けば濱のたき木とぞなる

後德大寺左大臣
程すぎて高繩沖をながむればただうみなかに島ぞのこれる
殿富門院大輔
みせばやなアメリカ人のいろごともぬれにぞぬれてことはかはらじ
二條院讃岐
わが小袖質屋の藏へ置きつゞけアメリカ騷ぎでいだすまもなし
順德院
もゝとせや古きよろひはきたへよしなをあまりよきかねになりけり

世情活躍

以上一百種の中には、强ひて其數に合する爲めに作りたるものもある。されど概して一讀すれば、當時の世態人情が、宛も一幅の鳥瞰圖となりてありありと、展開せられてゐる。如何に上下擧て狼狽したる乎。如何に又た內心臆病にして空威張りしたる乎。而して如何に物入に困窮したる乎。而して如何に恃む可らざるものを空恃みしたる乎。而して如何に斯る大切の場合にも洒落氣分を漂はせた乎。

【七八】事件の經過と落首

將軍家慶の死

嘉永六年六月二十二日將軍家慶は、米艦渡來に關する心配最中に逝いた。而して七月二十二日に喪を發し八月四日芝增上寺に葬つた。斯る事件に就ても、江戸兒は左の文句を吐いてゐる。

異國から御佛前へとじやうきせん（上喜撰、蒸氣船）
而して更らに又た、
壹萬里來たアメリカがこわいとて十萬億土にぐる大將

尙ほ芝に葬つたから大金が增上寺に落ち、上野の寬永寺の方は、豫想が外れたとて、

約束の早半鐘をやめにして芝は大鐘上野じやん〳〵
半鐘がやんだ跡では大さわぎ芝は大鐘上野じやん〳〵
此れは彼理浦賀入港即下、異國船が内海へ乘込來れば、早鐘を打ち鳴す旨の布達が出て來たことを湊合して斯く云うたのだ。尙ほ水戸齊昭の登城に就ては、

水戸齊昭登城

賣藥引札
傳家隱居散　一包　價三十五文

東都　駒籠翁製

驕慢年を經て愈へず、寺院を潰し、大筒を鑄立、或は鹿狩を好み、士民をなやますに用ひて、忽ち鬱を開き、毎日又は一日をきに快よく登城し、萬事壯年の如くになすこと妙なり。
江戸築地弘め所、御殿山土取場
諸國津々浦々に御座候間、御もとより城主御かため可レ被レ下候。

取固所　品川屋沖右衛門

又た
佛方を鐵砲にする水戸つぼう四方八方公方びんばふ
當時の人心には、水戸齊昭が如何に大なる影響を與へつつあつたかゞ想やらるゝ。

布恬廷來航

一難纔かに去れば、一難來る。彼理が浦賀を去ると（六月十二日）間もなく、露使布恬廷は、軍艦四艘を率ゐて長崎に來つた。（七月十七日）
筒井づつおろしやもぢけてはねつるべ汲しねがひを水に流せり
筒井肥前守
交易の品は川路にからまでも只名をうるは徳な勘定
川路左衞門尉
筒井　川路兩人は重なる談判委員として長崎へ下つた。當時川路は勘定奉行であつた。
木ぶりよき下地かたぎのかし次郎たゝきかへしてしまふ音物

水野筑後守

水野は當時長崎奉行だ。通稱は甲子次郎、故に上の如く云うた。

ひのもとにかけて自在の鍋島は其さいぞしろ道具なりけり　鍋島肥前守

國のをさいとも丈夫に唐よりはゞて手づよさ筑前博多　黒田筑前守

白波のおしくるとても磐石の岸へもよせず大村の風　大村上總介

以上鍋島、黒田、大村の三家は、何れも長崎の守備の受持である。兎も角も長崎は遠方だから、江戸兒の注意を惹くことも、左程多くなかつたものと思はるゝ。

阿部の恐怖

古の蒙古の時とあべこべに波風たてぬ伊勢の神風

古は伊勢を恐れし唐人も今は阿部こべ伊勢が恐るゝ

當時世間の非難の的となつたのは、執政阿部伊勢守だ。然も當人に取りては頗る笑止千萬の事だ。

【七九】彼理再來の落首（一）

彼理再來

一度退帆した彼理は、嘉永七年卽ち安政元年甲寅正月十四日米艦七艘を率ゐ、本牧沖に入り來る。

衆議庵夷說評

まだ屠蘇の支度もせぬに御慶哉　亞墨

隱居ばかりは春めける顏　老將（齊昭）

井戸端の梅は此ごろ盛りにて　石對

行方隙なき遠乘りの駒　諸國

金澤へ著いたときいて目をさまし　江人
またもうるさき文の御使　彼理
親方の女嫌ひは月に雲　朔癖
吹拂はせと願ふ秋風　世の中
菊桐の幕も日護摩に黒くなり　東叡
鐘を木にして叩くおかしさ　早通
欠落をしてもゆくべきお伊勢さん　阿部
なぶられにくる丸山の客　魯西
口きゝは白髪あたまで花を持　筒井
尻に帆上る船のうらゝか　退帆

右略解

本文中隱居は云ふ迄もなく、水戸齊昭、石對は井戸對馬守(町奉行)朔癖は將軍家定、菊桐は米艦再來に付て、上野東叡山にて護摩を燒き、國家安泰の祈禱をしつゝあるを云ひ、鐘を木とは、去年六月に、米艦内海乘入の際は、早半鐘を亂敲して、之を告知することゝなつてゐたが、今回はそれを版木を拍つことに改めたのだ。金澤は云ふまでもなく武州金澤で、丸山の客は、露人を斥し、白髪頭は、談判委員筒井政憲を云ふ。彼は當時既に白頭の老人であつた。

當時の防備

尙ほ當時の防備に就ては、左の落首がある。

三浦　松平大膳大夫樣　壹萬六千人
隨一におしや三浦のおもたかくもう利の見ゆるかつ色の紋
大津　細川越中守樣　貳萬八千人
武士の名にも大津に推出て跡へはひかぬ細川の水
本牧　松平相模守樣　壹萬七千人
唐人も皆したがつて本牧になびく相模の强い陣張
羽根田、松平阿波守樣　壹萬三千人
羽根田もるぶんぶ〳〵と阿波ただしさすがに强き蜂須賀の陣
鮫州　松平隱岐守樣　五千人餘

一二三番御臺場固

一とのみにのんで鮫州の御固めとおさにおそれてなびく白波
品川　松平土佐守様　一萬三千人
品川の固の出しのよくきくは下地もうまくなれし土佐武士
一番御臺場　松平誠丸様　七千五百人
御威勢に岡を平げ川越の海を山とや築く御臺場
二番御臺場　松平肥後守様　一萬二千人
御臺場の中に奥州會津して肥後どのかため守る二番も
三番御臺場　松平下總守様　五千人餘
智仁勇かねてそなへし三番目おし（忍）のよくきく御臺場の功
高輪　松平越前守様　一萬六千人
家柄も名も高輪に勇氣なる風の福井ににげる白浪
芝浦手　松平薩摩守様　三萬五千六百人
しば〳〵に守る神風鹿兒島に勝てるしるしも〇に十分
金杉海手　松平陸奥守様　二萬九千人
金杉のかためもきたひ大丈夫色仙臺にのこる正宗
田町浦々　加賀宰相様　五萬二千人
しば〳〵に田町浦々かゞやける香もかんばしき梅の宰相

【八〇】彼理再來の落首（二）

増上寺固

増上寺　松平越後守様　五千人餘
かためなる花の作州いく津山香も世に高く増し上の寺
鐵砲洲　酒井雅樂頭様　八千人餘
てつぽう津打てかはりし世の中や花の都もうたで固める
深川　松平越中守様　六千人餘

ふんどしもしめてかたく大丈夫其手は桑名深川の智恵
　富津　立花飛驒守様　六千人
白波もふつつと留て香ばしき名も立花の香にもかくにも
　洲の崎　松平内藏頭様　壹萬六千人
洲の崎を手強くかため岡山のいしずへもよく守る藏のかみ
　異國應接　小笠原左京大夫様　七千五百人
あいさつも袴に強き小倉地のおりめもしやんと小笠原流
　同　眞田信濃守様　六千人
手丈夫で信濃眞田のしまりよくしやんと結んで返す御返事

以上人數の解

以上の人數は、當時固めの人數ではなく、何れもそれぞれ軍役の高に準ずる總數を記したものであらう。例せば島津家の人數が三萬五千六百人とあるが、その數が芝浦に屯しては、とても仰山の事となるであらう。細川の人數が大津（浦賀の隣地）に貳萬八千人も屯しては、是亦た其の宿舍にさへ當惑したであらう。即ちいざとならば、銘々列記の人數を繰り出す可き義務があると云ふ意味であらう。

林大學頭以下に關する落首

御儒者（談判委員の一人）林大學頭様
孟子文論語中庸きゝわけてかく書もはやし大學の頭
　浦賀奉行　戸田伊豆守様
大筒の音も戸田へていづなるは浦賀からじやとはやす世の中
　同　伊澤美作守様
いざ〳〵は立合ながくはつせかもペロリからまけうらが桑の勝
　大目付　井戸石見守様
何事もその井戸にいてくみしるは清き石見の身に大目付
　同　柳生播磨守様
見かけにはよらじ播磨の手強きは柳生のふりに雪折れはなし
　御目付　戸川中務少輔様

思ふこと耳にきゝつけかぎつけてよきは目付てとがはいゝつけ
　　同　　鵜殿民部少輔樣
御目付の鵜殿鷹の目よしあしもやらずのがさずとどく御威勢
　　石火矢にら山　江川太郎左衞門樣
武威〳〵の時を江川の石火矢は草木おぢてにぐる韮山
　　大　筒　齋藤嘉兵衞樣
大筒の音さへ遠くなりひゞきどつさりはなすこれぞ親玉
　　長　柄　竹垣三右衞門樣
立ならぶ長柄の鎗の篠すゝきすき間も見えずしげき竹垣
　　鐵　砲　林　部善太左衞門樣
鐵砲の音に聞えし達人とあたりまどふて人の林部
　　相州御臺場　田付四郎兵衞樣
こだまとは皆呼子鳥おちこちに田付を知らぬ山猿もなし

亞墨利加地拂疫拂

尙ほ左に掲ぐるは、「亞墨利加地拂疫拂」と題するもの。

アゝラうるさいな〳〵、毎年渡海へ御馳走に、大筒小筒で拂ましやう、鐵砲玉やあら玉の、春たちかへり君が代の、一花明たる若水を、貰に北の夷ども、どふか交易鷄を、とつけいこふと寢たる事、ためしも永き長崎の、とをのねふりや唐人が、寢言にまじるはつ夢に、紅毛船や、唐船の、浪乘初の蒸氣船、いかりをヲロシヤ、アメリカも、海路はるかに遠方より、とも入來る沖の方、浦賀表を眺むれば、空に帆をのす異國船、岡で御固殿重に、我神國のいさぎよく、大盤石の鏡もち、具足開や勝栗の勝て兜の、七五三の內、弓は囊に四海波、おさまる御代の萬歲樂、先は何事も七種の、唐土の船のわたらぬさき、ストトンとする所へ、伊勢の神風、福は內、鬼は外、海水底の逆卷浪へさらり〳〵〳〵

江戸兒空元氣

如何にも景氣よき文句であるが、當時果してそれ程の景氣があつたか頗る疑はしくある。

なんのその男ははだか百貫のよろひいらずに向ふ鉢巻
此れぞ是れ江戸兒の空ら元氣と云ふ可きものであらう。

【八一】苗物盡し

擬阿部老中書付

尙ほ阿部老中の書付に擬したる戯文がある。

伊勢守殿御渡候書付寫

此度異國船近海へ碇泊致居候處追々花盛にも可ニ相成一、氣屈之上彼より瓢箪（兵端）を開候も難レ計、左候ば、裸踊等、專一に心掛、精々賑ケ成樣可レ被レ致候。右之趣、向々へ不レ洩樣寄々可レ被レ達候。

三月　大目付酒山節句守へ

且つ又た當時の俗謠に、

俗謠

葉唄

船の車は石火（石炭）で廻る武士は鎧で目がまはる
都々一

わしが泪でふるアメリカよなかずといかりを魯西亞さんよ
佃ぶし

ふけよ神風あがれよ陸へ中のペルリの顏見たや

當時の模樣は、中々戰爭どころではなかつた。其の眞相は恐らくは

かれ太鼓ほら大筒を打やめて太平樂をとなふめでたさ

の一首で盡してゐたであらう。安政元年甲寅のなへもの盡を見れば左の通りだ。

當寅春新撰之苗

當寅春新撰之苗

苗や〳〵とんでも苗、此頃騷ぎのアメリカ船、諸役人中手出しが苗、夫成り置ては身がすま苗、長崎なんぞへ參ら苗、與力や通詞にや取合苗、國法い

ふても用ひ苗、近海迄も恐れ苗、肝魂も落付か苗、大名物入たまら苗、見えも拳こも續か苗、こはいといつても逃られ苗、寒いといつても立切れ苗、夜もとつくりねられ苗、思ひ過して氣がきかない、大筒打つても屆か苗、

梅が咲ても見てがない

アメリカちつとも恐れない、異人の打のは留らない、御上の御心配勿體苗、同じく御評議定ら苗、伊勢（阿部正弘）さん兎角おあぶ苗、隱居（水戸齊昭）の御世話は氣にいら苗、木綿の紋付水戸も苗、馬具師具足師世話し苗、出來合具足にきたいが苗、今年の火事には盤木は苗、品川御臺場未だ出來苗、出來ても築地が固ら苗、深川工風の水車船、せつかく出來ても用立苗、鐵炮打には玉が苗、九曜の勇氣も顯れない、（九曜の勇氣とは細川兵士のこと）亞米利加咄しも未だやまない、異船の見物出られ苗、異船は遠く離れない、去年の秋から氣がはれ苗、年が明ても春めか苗、梅が咲ても見てが苗、今年のはつ午賑やは苗、ゆづうの苗に仕樣が苗、吉原此節御客が苗、芝居見物いりが苗、藝人殘らず暮され苗、火事も沙汰苗、普請が苗、爲人足は喰れない、職人泣いても追付苗、佃德丸相圖が苗、丁打場には稽古が苗、質屋は貸さない請ても苗、お米が上つて下ら苗、兩替屋には錢が苗、今度の壹朱は目方が苗、芝日本橋でも肴が苗、きゑんは中々未だ出苗、札差合點で手は喰は苗、宿師がかゝつて强談きめてもかさ苗、手段に手立が苗、荻野や武衞も間に合はない（荻野流、武衞流共に和流の砲術）西洋流に火繩が苗、小身旗本具足が苗、申付而も間に合は苗、張子の具足は火があぶ苗、著類の御書付わるく苗、そこで萬事に心配苗、ヲロシヤの逗留別條苗、（露使布恬廷安政元年正月八日長崎を去つたが、やがて復た來ると聲言した）加賀の五兵衞（所謂る海外密貿易の魁首鍵屋五兵衞）はつまら苗、小田原評議おつつかない、御固め場所さへ定ら苗、だまつて居ても智惠が苗、世間一同おちつか苗、神風吹か苗、是非も苗、五年のおだまし聞入れ苗、（これは四五年の後に篤と挨拶す可しとの外人への申譯）公儀は御世話に拔目がなへ、彼是云ふのも勿體苗、隱居の大筒問に合苗、世界一統心配苗。

小田原評議

此の苗もの盡しは、全く當時の鳥瞰圖と云ふ可きものに幾かつた。

【八二】千代保久禮武士

寸鐵人を殺す

若し寸鐵人を殺すとも云ふ可き警句ありとせば、左に掲ぐるものは蓋し其類であらう。

ペロリ

思ひしよりはかが行き

本國でおもひしよりも、はかがゆき
將軍

この頃は○若役がいやになり
老中

内所ではかうゑきなるときめておき
若年寄

打拂ふなどといひしはしよてのこと
水府老公

五千俵呑だはおれも不覺なり
溜詰

小理屈をいつて見たるが、ぬかに釘
御固めの諸家

此頃の出目を今から勘定し

右略解

五千俵呑だとは、當時水戸齊昭に、手當として、毎年五千俵宛賜はつた事を云ふ。「本國で思ひしよりもはかがゆき」の一句の如きは、如何にも彼理の胸中を穿つたもの。彼理をして之を聞かしむれば、他人心あり我之を忖度すと云つたであらう。其他何れも要所、究所に中つてゐる。

幕府苦境

公家りきむアメリカこじる世の中に、何とて上は智慧なかるらん

此れは或は今少し後のことかも知れない。されど一方に公家が力味出し、他方に米國が壓迫し、幕府が板挟みとなつた苦境は、此れから追々と醸生しつゝあつた。

世相觀破のちよぼくれ

尙ほ左に掲ぐる「千代保久禮武士」も亦た當時の世相を察するの一端だ。

やれ〳〵騷動出來たよ、抑世上の噂を聞なよ。先年此方唐人さわぎで、交易〳〵其時次第ののらりくらりの返事をする故、いよ〳〵圖に乘り、蒸氣船とは茶にしたアメリカ。呑れた阿部さん、困た戸田さん、浦賀の御臺場御手薄なりとは、初手からいへ共、御爲御益と勘定奉行が自分の御勝手、諸人の不勝手。少しも構はず、上納金をも取の入らぬとやつさもつさをいつたあげくに、御免と出ぬける。棄捐は出なへの酒宴はならぬの、何の彼のとて無闇に觸出し、ぬつぺらぼうの大べらぼうの、大筒騷ぎで玉がないとは玉げた咄しだ。時に書翰はどうした譯だよ、ちんぷん漢文、御評議まち〳〵、我々ふせいがくるりと廻つて、一見したとて、どうなるものかよ。文武〳〵と今更騷いで、蜂にちんぽうさゝれた同前、痛いと言はれず、かゆい所へ屆いた手當も、御金が第一、やれ〳〵伊勢（阿部）さんどうしたものだよ、叱りちらした御隱居（水戸齊昭）なんぞを、引づり出しても、能手があるかへ、外にいく

玉がないとは玉げた咄

品川臺場の罵倒

らも御人があらうに江川、（太郎左衞門）なんぞが上書を取上、のんど首なる浦賀に構はず、鼻の先なる品川あたりへ、なまこのやうなる入札御臺場、一ッや二ッ拵へたりとてどうなるものかよ。地の利は人の和するにしかずと孟子のおぢいもいつたじやないかへ。まして甲府へ御開なぞとは言語同斷、勿體ない〳〵、咄しも出來ない、臆病侍、拜借金でも、下され金でも、面白おかしくたしなめ文句で、やつたらよかろに、越中ふんどし古切なんぞをひねくり〳〵、さがし出したるごく付文句じや、今の浮世は中中いかねい。權でおさへて德でなづけな、錢金なんぞは公儀次第で、どうでもなる事、德は本なり、財は末なり、おのれ〳〵が勝手我儘さらりとやめにし、五常を守りて、其身〳〵の業を正しく忠を盡さば、元より尊き日本神國、アメリカ、ヲロシヤの齒は立つものかよ、急度吹ぞへ神風神風。

尙ほ此外のちよぼくれ後編がある。それは餘りに長編であるから、其の冒頭だけを節錄する。

内政易例

ヤレ〳〵そうだよ、ちげねい咄しだ。夫はよけれど、時世の有様異國はさて置、自國が大變、今にも非常の事有時には、どふなる浮世じや。夫こそ百殃卽坐に起るぞ。天下の危急じや、アメリカ、ヲロシヤの類じや御座らぬ。伊勢さん、戸田さん、そこらの防ぎはどふする積じや。抑天下泰平なりやこそ、權でばつかりおさへてすもふが、事有時節に德でなづけた天下でなければ、衆和にやいかねい。衆和でなければ、軍は出來ぬぞ。そこらあたりの時節の跡先、ちつともしらずに、諸大名なんぞがりきんだ上書は、たまげた咄だ、御前への御無理は、誠に尤、何のかのとて、暑は知つても、寒いこた知らずに育たまんまのお大名了簡、何で異國の强弱なんぞは、何しに知るべい。

増して自國の騷動の氣ざしは、けがにもしるめい。

是等は決して遊戯文字とのみ一笑し去る可きではない。如何にも當時の時勢に適中したる議論と云ふ可き價値がある樣に覺ゆる。

再び苗物盡し

【八三】安政改元頃の江戸

更らに又た「苗物盡し」がある。既に前にも（參照—八一）同題のものを掲げたが、此れは内容が別である。而して復た當時の世相及び人心を卜するに足るものがある。

昔より負た事のない日本も、去年（嘉永六年）此方なさけ苗、一夜明けても春が苗、初午來ても太鼓がない、花が咲ても見てがない、奥樣方には年始がない、御役人には意地がない、是も是非ない無理もない、小田原評議で埒明ない、大名衆には金がない、武器はさつぱり用意がない、勤番侍力がない、方角火消はばん木がない、固めの飯には汁がない、汐風寒くてたまらない、見物なんぞにやゆかれない、屋敷〳〵は他行がない、アメリカ日本恐れない、亂暴しても叱れない、午蒡掘つてもかまはない、我儘させてもほうづがない、鐵砲向けたらなぜ切らない、伊勢（阿部）さん金玉下がらない、隱居（水戸齊昭）の

小遣(五千俵)まだ足らない、思つたよりも智慧がない、井戸と林(二人共に談判委員)は忠がない、筒井(長崎に於ける露使と談判委員)の大將に年がない(當時古稀の老人)品川御臺場まだ出來ない、日本橋には魚がない、から風吹いては錢湯がない、江戸にさつぱり火事がない、大屋の火の番ひまがない、風上隣町は油斷がない、鳶人足は仕事がない、ずつと職人喰はれない、料理女郎屋客がない、藝者藝子は呼手がない、中にも具足師かりがない、金銀なんぞは貸手がない、棄捐の咄しもう出來ない、書翰何ぞは分らない、交易さつぱりなせ斷らない、其内退帆噂がない、壹朱お金(當時新鑄)は目方がない、ふつても〳〵まだたりない、京都の炎上(安政元年四月六日内裏炎上)勿體ない、登りつめたる物盡し

江戸不景氣

ない物盡し、茄子の苗や胡瓜の苗、苗屋の見世の店おろし、目出度苗を植付て、豐かの年を諷ひましよ

米艦渡來し、江戸も當時は頗る不景氣を來たした樣だ。

尚ほ又た左に物盡しを掲げんに、

一　あたるものは　世上の評判　淺草の開帳(二月十八日より八十日間)

一　ありそふで無い者は　海防掛の御了簡　御家來への御貸具足

一　なさそふで有者は　櫓門方の賣物　下田の交易

一　永續しそふも無物は　學問所の出席　諸組の調練(五月十一日講武所に於て銃隊調練を始む)

永續しそうなもの

一　永續しそふな物は　武家の困窮　夷人の渡來

一　出そふで出ぬ物は　さるゑん　佃島の大船(新造の旭丸)

一　上りそふで上ぬ物は　江戸　中御用金　魯西亞の船

一　下りそふで下らぬ物は　御かし付の金　市中の諸色

一　當りそふで當らぬ物は　大筒の的　回向院開帳(三月十日より六十日間)

一　はいりそふな物は　さる御養子　おくさま(此れは當時の將軍家に就てのこと)

一　はいりそふもない物は　さるどろぼふ(三月六日平川御門内金庫四千兩紛失)二丁目の芝居

一　丈夫そふで不安心の物は　房相の御臺場　浦賀の大船（鳳凰丸）
一　あぶないものは　みじくの遠馬　淺草奥山の輕業（二月頃より輕業綱渡の上手
　　增鏡勝代奥山にて興行）
一　こまるものは　小身者の遠馬　佛具の鑄物師
一　よろこぶものは　家作の職人　大筒の鑄物師
一　つり合たものは　唐人につり鐘

西洋流調練流行

當時西洋流の調練が、流行し出したことは左の謠にてトせらる。

アメリカで（米國船渡來の結果としての意味）當時流行は西洋流、數多の御弟子が、裁付に小袴はくやら筒ぽじばん、大勢並んで筒を揃へ、先生は太鼓をさげてまじめ顔、どろろこどんとたたく拍子に、隊列前にすゝめと聲をかけられ、足を並べてすゝみます、ねらひ打て引け、右むきかへれと揃ふた手續き、見る人驚くいさましや。

此の如くにして、西洋式調練は漸次に此國に行はれ來つた。

調練嘲弄ちよぼくれ

此頃異國の坂沙汰なけれど、ちよぼくれ口調でしやべるを聞れェ。目當もれェのに、やたら虚空と調練させたり、遠馬遠足甲冑揃ひの、なんのかの迚、諸人をこまらせ、お先の見えなひ、手元のみえなひ、盲目揃ひで、人氣をそこない、どふすることだよ。抑も久しく治る世の中、馬具も具足も持ぬが人並、元よりないから一家親類、あつちで借たり、こちへ貸たり、どふやらこふやら、去年のところは、濟して置たが、大きな地震で住居は潰れる、石垣崩れる、塀垣倒れる、宿六ふくれる、珍寶はむくれる、十面九面のやりくりからくり、ゑいやらやつとで、蠣殼を取建て、夫から聞れェ減法當氣で、西洋鐵炮、ゲベルなんどを、やたらにぼん〳〵、御坊さん育を、むく〳〵もちやげて、そやしておやーて、面白おかしく、進めちらかし、世上の人氣にや、ちつとも構ず、不伏分福茶釜のお臍だ、ヤレ〳〵ヤレ〳〵チヨボクレ〳〵、知らぬ闇學知た振して、木の葉天狗のお鼻にぶらさげ、御威光冠つて、たわ言つくのを、聞てもくんれェソコラダ〳〵、チヨボクレ〳〵、合藥つゞかずお筒は不足でから手で歩いて、そこでもぶつ〳〵、こゝでもぶつ〳〵、小言を言やす。賣ばち置てはためしも出來れへ、ゲベルを拵へ、萬茂仕立の、具足をころして、胴亂なんどで、朝から晩まで、畜生の眞似して、何の事だか、痴呆が過ぎやす。夫から聞れェ、御見置なさるの、何の彼の迚、天狗仕立の、建付草鞋で、陶場あたりをすた〳〵まごつき、ごた付返して何やらもんちやく、駕籠の人には、油斷がならぬと、釘貫親子がびくん〳〵するげな、オヤ〳〵〳〵、サツサトチヨボクレ。（巷街贅說）

第十三章　安政大地震

【八四】伊豆下田の海嘯

被害地域

安政元年甲寅十一月四日には、尾張、伊勢、志摩、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏諸國は、地震、津浪にて、山崩れ地裂け、家屋は潰れ、或は流され、人畜の死傷も少くなかつた。中にも伊豆下田の津波は殊に劇しく、此時同港に碇泊中の露艦も破壞の災難に罹り、戸田にて其の代用船の新造に取り掛つたことは、既記の通りだ。（參照　日露英蘭條約締結篇　一四—四七）

下田地震ちよぼく

ヤレ〳〵皆さん聞てもくんねへ、下田港の今度の騷動は、霜月四日の四時頃より、すてきの地震で、元祿此方夢にも知らない、魂消た大津浪に、ぢ樣や婆樣はばた〳〵かけ出し、夥多の大船、山へと打あげ、市中は殘らずのつぺらぼうの野原となつて、お江戸のお方も宿なし同前、ヲロシヤの大船十か九ッ

あぶない處を、大筒どん〳〵帆柱さげ〳〵窓から數本の樅で押切、洲鰭の出ばなをぐるりと柿崎濱邊へやう〳〵漕付、先は安堵の思ひはなせども、又來る津浪を、市中の男女は屋根にて凌ぐと思つた處が、歸る浪路に沖へと押出し、波間にざんぶと親子のお別れ、死人の人數は幾萬人とも數は知らねど、下田のお寺へ死人山付、中にも不思議は、はま姫君の社に集る人數は、殘らず命を助かり、是こそ御代の御恩德〳〵。

厄拂ひ

逃たい盡し

アヽラにげたいな〳〵、逃たい盡しでいわふなら、頃は霜月四日の事よ、伊豆の下田の大地震、續いて來たは大津浪、老若男女のきらいなく、上を下へと騷動は、皆逃たいが胸一ぱい、慾のまん〳〵たる輩は、財布と衣類をひつ脊負て、是も逃たい仲間の內、親も逃たい子も逃たい、逃たい同士が打寄て、西の方から大津浪、親船どころかヲロシヤの船も、八百餘軒の家屋迄、皆一同にひつからげ、下田の海へづぶりづぶり親子拂ひましよ、逃げおそし〳〵。

東海道被害

然も被害地は、單に下田のみではなかつた。概して東海道全體に亘つたものと思はるゝ。

同上

ヤアラはげしやな〳〵、今度稀なる大地震、東海道で拂ひましよ。箱根の宿を始として、兩本陣はぶつつぶれ、三津に火事となるもあり、下田の方を眺むれば、帆をヨロシヤのひまもなし。引かぶせたる大津浪、大船小船は山の峰、松の梢に引かかり、皆難澁を駿河路や、たま〳〵命たすかりしも、沼津くはずで原がへり、もう吉原と思ひの外、又もや五日の大地震、淵は瀨となる岩淵や、蒲原〳〵と逃出し、興津ころびつ、大騒ぎ、かは由井夢中でかけ廻り、皆人々はこ鞠子や、宇津々で越ゆる宇都の山、蔦の細道や、たのみとするは、たれ岡部、ゆかりもとむる藤枝に、島田のあねさん婆さんも、金谷ちり〳〵成行て、晝もなくかよ夜鳴石、日坂さまの倒家を、見てはかけ出す掛川や、取亂したる金銀も、袋井いるゝかひもなく、見付のすつぽん龜の甲、

安政改元

鯰に恐れてかけ出す。濱松風の音にさへ、目も舞坂の荒磯や、荒井津浪に御番所も、跡白波の白須賀や、かゝる騒動ある中に、さすが尾張の熱田とて、少しもゆるがぬ宮柱、かゝる目出度御宮とて、いかなる惡魔が來るとて、此神〳〵が、かつさらい、異國の方へさらり〳〵、親子はなれましよ、さらいましよ。

而して又た當時の狂歌に曰く、

泰平の世を大變にゆりかへし上もゆら〳〵下もゆら〳〵

而して嘉永七年十一月二十七日京都にて宣下あり、十二月五日に至りて、始めて江戸幕府から安政と改元の達があつた。

あんせいを下からよめばいせんにて、殘る一字はアメリカの國

何れにしても安政は、其字の示す如く、決して安き政の御代ではなかつた。天下の多事は、安政に至りて、愈よ甚だしと云ふ可きであつた。それは後から追々と記する所があるであらう。

【八五】安政二年の大震災

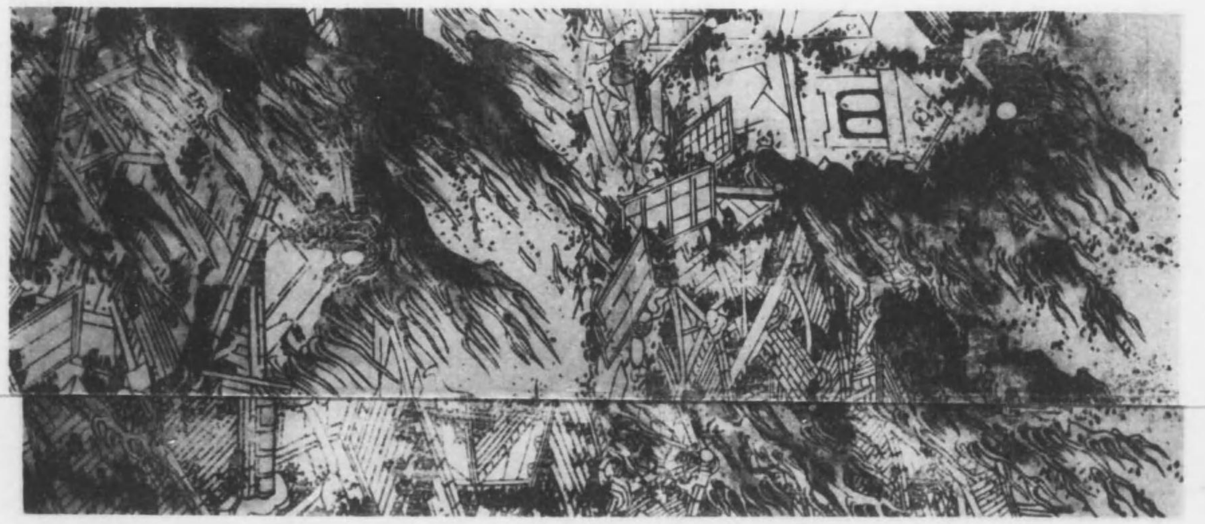
安政大震前の小震

安政二年十月二日の江戸の大地震は、當時の世相に、多大の印象を殘した。此の地震は、決して卒然俄然、所謂る寢耳に水の出來事ではなかつた。云はゞ其の前年より一再ならず、其の警告とも、豫報とも云う可きものがあつた。卽ち其の前年――安政元年――には、屢ば大小の地震があつた。就中十一月四日は、畿内、東海、東山諸國の地震があり、翌五日には南海、西海、山陽、山陰にも地震があつた。卽ち前掲下田海嘯（參照　八四）の如きも、其の著しき一例であつた。

安政元地震の江戸の被害

されど江戸の震災は、左程ではなかつた。

頃は嘉永寅の年（嘉永七年卽安政元年）十一月四日朝五ツ半時頃より大地震……江戸は品川、麻布、櫻田邊、久保町内外つよく、其外市ケ谷、牛込邊、小石川、下町は小網町邊、大川端にては、船七八艘大に損じる也。本所邊、所々、深川、砂村邊まで、ひびきつよく、晝夜三日の間、何かどと、いふことなく、



安政二年十月江戸震火之圖（錦繪に據る）

ゆら〳〵六日の夜かぎりにゆり止み、都合伊豆をはじめ、武藏、相模、駿河、甲斐五ヶ國の大ぢしんにて、古今まれなる事。〔椎のみ筆〕

とある。此れは安政二年十月二日の大地震の序開らきだ。

却説安政二年十月二日の江戸大地震は、元祿十六年以降の大地震にて、江戸全市の受けたる災害は、遙かに之に過ぎた。而して地震は必然の案内者として、火災を隨伴し來り、江戸の大半を焦土たらしめた。今ま其の概略を記せんに、

安政二年江戸地震の被害

十月二日、細雨時々降る、夜に至りて雨なく、天色朦朧たりしが、亥の二點（午後十時過ぎ）大地俄に震ふ事甚く、須臾にして大厦高牆を顚倒し、倉廩を破壞せしめ、剩その頽たる家々より火起り、熾に燃上りて、黑烟天を翳め、多くの家屋資財を燒却す。神宇梵刹は輪奐の美を失ひ、貴賤の人家は鱗差の觀を損ふ。尊卑の大患、東都の物恠、何事か加レ之、凡此災阨に罹りし儔、家族に離れて道路に逃漂、甚しきは壓に打れ炎に焦れて、生命を損ひしもの數ふるに遑あるべからす。號哭痛喚の聲、閭閻に滿つ。看るに肝消え聞に

魂奪はる。〔武江年表〕

物質的以外の損害

此の地震の物質的の損害は、計上す可き資料に乏しからぬが、それ以外の損害に至りては、實に評價に及ばぬ程のものがあつた。卽ち當時天下の名士にして、有志者の中心人物としたる藤田東湖、及び戸田忠太夫を失ひしことだ。

名士亡失

昨夜（安政二年十月二日）四つ時比、大地震、公邊御城、御屋敷の御殿向、別條無レ之候處、御長屋向、其外諸役所向皆潰れ、同役鈴木勝四郎泊にて卽死（宿直の爲め）其外諸役所向泊り御番卽死有レ之、御屋敷中死人夥敷、何共申樣無レ之大變に御座候。戸田（忠太夫）、藤田（誠之進）、同母（此れは誤傳）卽死、其外近藤次郎左衞門殿之妻、同四男並三一殿卽死、其外申上げ樣無レ之。

とは江戸屋敷表右筆より、水戸への文通の一節だ。當時水戸の小石川屋敷中にて、死人五十三人あり、而して戸田、藤田の二田も其中にあつた。兩田共に水戸齊昭の弘化元年四月遭厄以來、江戸に幽囚せられ、漸くにして水戸に還るを得、嘉永六年七月に至り、江戸に出て、再び登用せられ、大いに其力を伸さんとするに際して、其厄に罹る。此れは決して水戸一藩の不幸のみではなかつた。

藤田東湖の慘死

藤田東湖は、小石川の藩邸に在りて災に遭ひ、戸田忠太夫（蓬軒）も亦壓死せりき。此夜東湖の家に客あり、東湖玄關へ送り出て立戻り、未だ脇差も拔かざるに大地震なりければ、老母を扶け、一旦庭前に出でけるに、老母火鉢に土瓶の湯かけずに出たり、火の用心惡しと云ひてまた家に入ければ、東湖それはあぶなき事とて、老母を出さんとして、これも家に入ける處、鴨居落かかりけれども、東湖大力の人故老母を下に圍ひ、坐して兩手を突、肩に鴨居を擧ながら、片手にて老母を庭前に投出しけるに、また一震强くあり、終に東湖は壓死して、老母は免れ存命しけり。東湖時に年五十。〔藤田東湖傳〕

尙ほ芳野金陵の祭文には、

大震の至るや、母氏を堂に呼び走り出て之を索む、影聲有る無し、身を翻して躍り入り、大に叫んで前み行く。震息み搬掘すれば、兩手緊しく母氏を

抱いて而して僵るとある。何れにしても子は死し、母は助かつたのだ。

安政二年大地震の狀況

搖り初め

十月二日、朝くもり少しく雨ふる。後はれたり。夜に入定のかねをきゝつゝ、けふの日記しるさんとするかたはらに女もなり、とかくするほど、物の碎くるやうなる音のして、ゆさ〳〵とする。すは例の地震にこそと驚き、兩人ひとしくのぼりばしごをかけおりけるものか、天地も崩るゝやうに響き渡り、身も上下にあげおろしせらるゝやうなれり。去年東海道より難波諸國より、つげ來れりし地震もかゝりけんと思ふに活たるこゝちもせず。はしご三四きだは轉ぶが如くおりて、共まゝにうつぶし臥、上より女もおほひかかる。この時行燈の火もゆりけたれつらん、露ものゝあやもわかれず。いよ〳〵つよくふりて立べくもあらず。たてりとてあゆまるべくもあられば、もし家のくづれ壓死せば、父子ともこよひかぎりの命ならむとおもひなげくに、さりともわれらはあつたのみやしろなうぶ神とし、つねにうやまひねぎまつりて、萬にみたまのふゆかうぶる、あかばれのみやしろのおほんたすけもなからずやとおもふにたのもしく、聲をかぎりに一命すくはせ給へと、繰返し〳〵祈り參らすほどに、今もすこしはゆるれど立てもまろばず家も事なげなり。あら〳〵嬉しや今はべちでうもあらじ、ゆり返しといふものゝあらねばどに、はやく外のかたへ出ましと、手取々々手ひき

柱傾き鴨居歪む

つゝいづるに、日頃はゆがみそこなはれて、たやすくはあかぬくゞり戸の、さはりもなくおのづからにひらけぬたるは、はしらかたむきかもゐのゆがみ、雨戸と格子戸二重になりて、庭口にたひらに敷かれたるなり。此庭口に五六すばかりのみぞありて、ふたの板くち穴などもあきたれば、はだしにてかけ出る事なれば、踏こみて疵もつくべきに、雨戸の上をふみてあゆみしかば、そのわづらひも釘なども出ざりければ、何のさはりもなく路次口を出、小揚の組屋敷の竹垣のもとにたつ。これまで人の上は、さらに心にも耳にもかゝらず、夢のこゝちにて地震とのみ心得て、その大小如何ばかりともおもひもたどらず、そのつよくふりし間もはづかにて、たとへばたばこ二服も吸ほどとやいはまし。此時地ぬし吉作の家のおや子下女、松屋の父子三河屋惣吉などもみなともにつどひ、鼻緒屋夫婦わたやの夫婦に、手間取古道具やの久助、その餘あたりの人々もてさわぎ、嬉しおそろしといふ聲またかまびすし。後々はともかくも、まづ平安に大難をのがれしを互によろこぶ。さはあれど大地震の後は必火の災あなりといへり。心もとなしなどいふとひとしく、まづ北のかたのそらぁかくなり、西に南にひむがしにさへ火一時におこりたち、すべていとちかくはみえれど、いづこともおもひはかられず。地震のおそろしければ高くのぼりて見むともせず、火を告る鐘つくものもなし。おのれ女とともに、聊ゆびのさきをもそこなはれず、立出しを悦ぶるも、これ皆おほみかみのおほんめぐみの、いやちこなるによりてと、大地に額づきて伏拜みよろこび申、此上の無事をこひねぎつゝ、まづ御符を身につけましと、おそる〳〵家の内にかへれど、くらくして入がたければ人のともしたる挑燈かりて入見るに、つみおきし本箱みなまろびおち、もろ〳〵のしなうちあけられて狼藉たり。壁おち又ひわれて土砂みち〳〵、すべてあしふみ入るべくもあらず。あらおそろしのなゐ

火災頻發

ふりやと、身のけだちつゝはしのこなのぼるに、さきに三布布團を二階より下へなげおとしおきつるが、梯の下にふくだみゐたるよ、まろびおちつる時身の露いたまざりしも、この物のありけるなどいとなかしくおもふに、猶おほん神のみめぐなりけりと、いと〳〵尊く、砂にうづまれるはしごなのぼり、まづ守袋をとりおろし奉り、次にみはこをかき懐きおり（此さきに挑燈にともしびともして兩人たづさふ）守りは女のくびにかけさす。かくて後なゐふることなく四方の火さかんにもえ、いつきゆべくもおもはれず。人々高きにのぼり、廿所ばかりまた廿あまり三四所ともいふ。まづたしかなるは新よしはら、坂本みのわのあたり、下谷ひろ小路あたり、丸の内なほひだりにもとほくもえあがる。本所とおぼしき所にもみゆ。かくていとちかきはこまかた也。（豐田といふちやうりよりいでたるよし）すべてなゐふり家つぶれ火を出し、おほひたる木どもにもえうつりてやくるなり。半鐘なもならし人もおそる〳〵出れど、たどものゝおそろしくて、まめやかには火鎮めんともせざるなめり。このよ風いとしづかなるにぞ、すみやかにはもえ來らぬ、こまかたの火北風に南に延（かや寺もやけぬなりなどいふ。いと近ければ心もこゝろならず。これよりさき、みはこな物にもつゝまでもち出たるが、いとかしこければ、二階の戸棚なる新しきふろしきとりに行、この序に家廟の位牌とりいださむとてのぼり、戸棚の戸あけにゆくと、がば〳〵と二階の椽ふみこみ、さきのかたにて一尺ばかり下へおちいりぬ。今少しつよくふまば、我身も下へおちぬべき勢ひなれば、むねうちふたがりながらも、ふろしきはとり出て、かゝる時にもあやまちなきを拜謝したてまつりぬ。こよひは人々みな門邊に立あかし、風すこしかはらば、火もやもえこんとおもふに、たゞたのもしきものにすなる地ぬしの土藏のいとかたく造りたるが、最初にやれの瓦をみなふりおとし、はちまきおち

西方領りに驚ゆ

土藏屋根瓦落ち

こしまきもひらき、このかはらつちのおつる時あたりてぞ、わたやの北のかべもやぶれ、わがうしろのかべもあなあきすべて一ト地面の家いたくかたぶきそこなはれつる也。かゝれば藏にあるものとり出し、他にはこばんとするに、入口の三尺びさしおちたれば人入がたく、入たりとも又つぶれもせばと、たれ入んといふものもなし。藏のある故に物とり出されぬもいとくちおしき。曉に至り風少しひがしにまはり煙のこなたへおほひかゝるいとおそろし。但し火きえがたなれば、やけ來るいきほひなく、東のかはは三好町よりおうまやがしへやけぬ。西のはかや寺の門前にてきえ、翌日巳刻に火しづまりぬ。人々よろこぶ事限りなし。西のも南のも東のも夜あくる頃に皆きえ、馬道より花川戸へやけ行たるのみ。翌日もやけなごりの煙はげしきばかり、午時ごろまで立ぬ。新吉原潰れ、やがて所所火おこりたれば、死傷のものいくらとはかりなく、中にも岡本はわづか三人存命たるよし。また金久は若者たゞひとり即死のよし。かゝるはめづらしき事といへり。札木やいかなりけむ未しらず。玉やもいもうとをなくしつるよし。よるのほどより翌日も次々も、あそび等めもあてられぬさまして、まよひ來るいとおほし。

風向變ず

飛火

三日

被害

三日も天氣よし。おもふに昨夜大ゆりの後、おもひしよりは小ゆりしげからず。五六度にも及びしが、さはれ人もわれも安き心さらになくやう〳〵に人のゆきゝし、又そのつて〳〵にて、所々のつぶれたる、またやけたる人、馬の死傷など、やう〳〵さま〴〵かたるをきくに、身の毛たちおそろしく、眼しばだゝかれてかなしく、われどちの無事を悦ぶの外他なし。ちかきわたり今ぞすこしづゝ見るに、富坂町新町などいふところ、皆わがすまへるとなりながら、家のつぶれたる事十餘戸、ひさしの落たるは家並のやうなり。壁土はいづこにも〳〵山のごとし。壓死十三人とぞきく。まこと

や市ケ谷より肴屋傳藏夜べ來りて、とかく手つだひくれたりき。黒舟町のらふそく商人いせ屋幸助へ來、類燒なればまづかしこのものをはこびをはり、のち來りける也。火の心づかひなしとて、夜のうちにまたいせ幸がかりやへゆく。

餘震少々

けふも小ゆり時々なれど、おそるゝほどのはなし。されど家に入るべくもあらず。地ぬしは人やとひ、土藏のつちをはがすにのみうちかゝる。すべてするわざもなし。ともかくも家に安眠しがたければ、はじめよりたゞずみゐたりし。小揚屋敷の外垣の根に敷ならべたりし、格子戸雨戸のたぐひしやうじ何くれととりあつめ、幸助（はなをや）儀右衛門（まつや）などけふ土藏のつちかたづくる雇人もまじり、堀田原の馬場にかりやかたたて、しきむしろ布團食器のたぐひ、また火桶やうのもの、はた失てはえあらぬしなどもはこぶ。おのれも竹長持借してともに自筆の寫本類何くれとも

假居樣々

て行。女の分はこのかりやにおき、男の分はもとの垣根になかで、家の非常を守らんとなり。おのれいたく驚きし、げにやけさよりわきばらのほれの下いたみ、ここちよろしからず、さならでも力もなき翁の人々とともに何事をかすべきとて、馬場のかたへおもふき、女とゝもにやどるべく定めぬ。女といふは吉作の母（すなはち金六のつま、地ぬしなり）女みちときやう下女なつ、わが女もともなり。松屋の妻は、江戸の女のもとに、さきに行をりて來らず。三河屋（惣吉）の妻は夫とゝもに、はじめより家のうちにありてのち〳〵までも出ず。さはれこよひばかりはこゝにとまる。はなをや夫妻とわたや一家は、始終門邊の垣根にかりずみしてうごかず。此馬場より高麗やしきのうしろの矢場近きわたりの人共、心々にかりゐして夜をあかす。こゝのみにあらず、江戸中すべてかゝる事なるべし。日くれつがたより傳藏再きたりとりもち、このかりやに一夜あかし、四日のあさ市ケ谷へかへりゆきぬ。またこよひ近藏はわれどちとともにこゝに臥し、吉作も宵のほどたけ〳〵しくいひしにも似ず、夜ふけて此所にうちたをれねぶる。〔笠亭仙果著なるの日並〕

【八六】大震災の被害

火災區域

地震に伴ふ火災は、江戸市中長二里十九町餘、幅平均して二町程と聞けり〔武江年表〕とあれば、其の程度も察するに足る。

三日朝五時（午前八時）過にいたり、諸方の火やうやく鎮れり。○神社は大方破損少し。○凡此度の地震に、武家町屋寺院等に到る迄、家の全きは甚少し。倉庫は悉く壁落て、これに觸て死たる者多し。火災ある所の倉庫は悉く燒て、家財雜具は更なり、重代の名器珍寶亡び失たるもの數をしら

避難民の狀況

ず。再度の震動を恐れて、貴人は庭中に席を設けてこゝに明し給ひ、庶人は大路に疊を敷き、戸障子をもて、四方を圍ひ、しばらくここに野宿し、傾たる家はかりそめに繕いて、ここに憩ひたり。本所、深川、下谷、茅町、山谷等の地は、家毎に潰れたれば、更に大路の通路さへ成がたし。頓て壞れたる家の材木を集て、はかなき假屋をいとなみて、住居しけるが、甚しきは食糧にさへ竭て、焦土にただずみ悲泣せるもありけるとぞ。二日夜よりこのかた、地震屢ありて更に止む事なし。

町會所の救濟

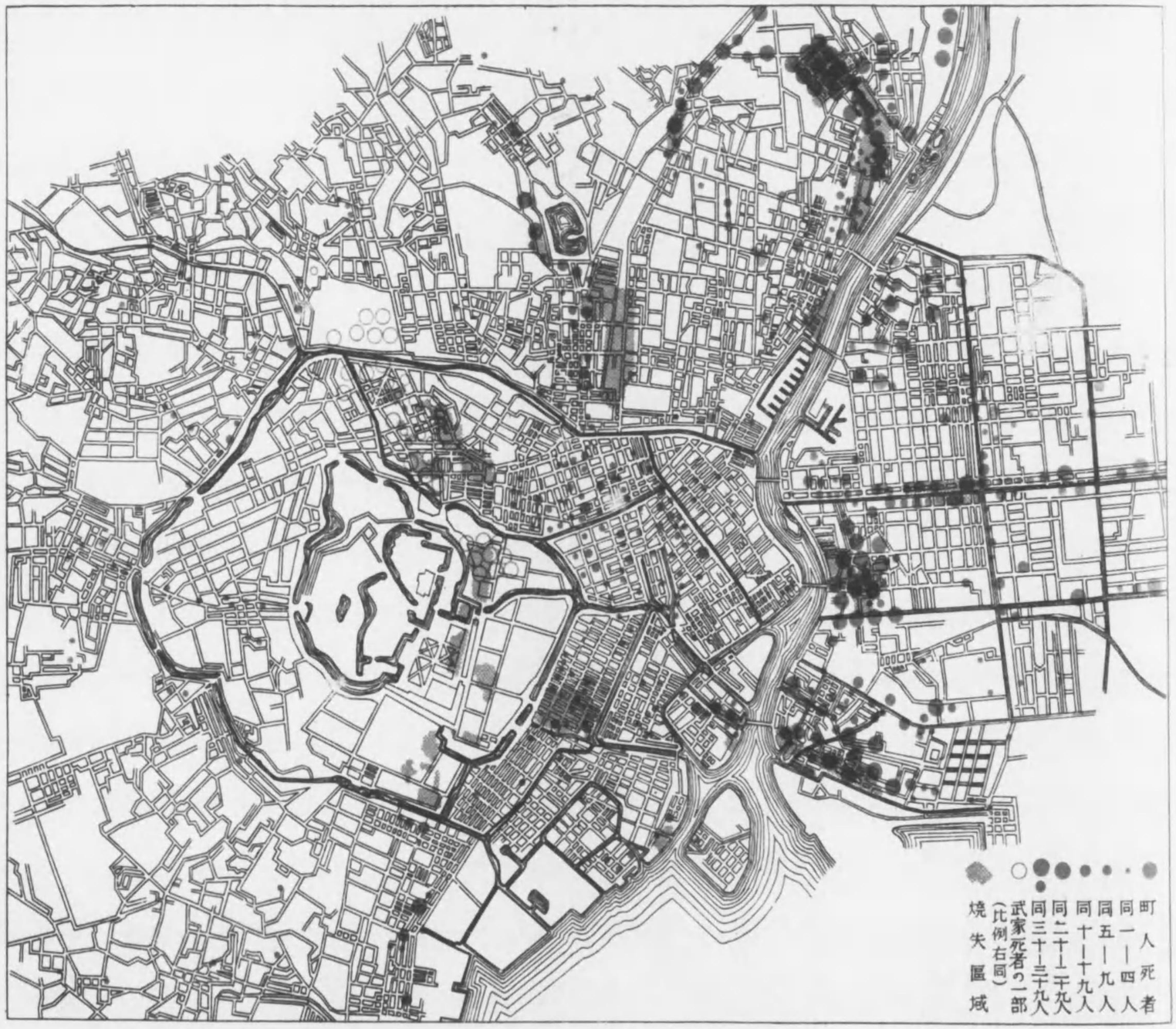
○町會所より日々野宿の貧民へ握飯を與へられ、又御救の小屋を所々に建て養はる。富人も又色々の施しを行へり。○地震の後酒肆、食店商ひ甚少し。絃歌鼓吹街に絶たり。○地震の後池の端辨才天境内の料理屋殘らず門外へうつす。○板材木作事諸職人傭夫の賃錢甚貴し、官府より嚴重の御沙汰あり。○此度の地震、近郷は更なり、近國にも及べりとぞ。〔武江年表〕

地震文學

以上は極めて概括的なれども、其の被害の大要を知るに足るものがある。尚ほ

露光量違いの為重複撮影

安政二年江戸大地震被害圖



東京市史稿挿入圖に據る

東京市淀橋区柏木

昭和二年撮影

露光量違いの為重複撮影

當時地震文學とも稱す可きもの、甚だ多かつた。「地震の事を誌して梓行せる安政見聞志、同風聞錄など題せし冊子あり、坊間に售ふ所の一枚摺、綴本、にしきゑの類、何百種といふ事を知らず」と云ふ。以て其の社會に影響を與へたることの多大であつたを卜するに足る。

吉原町娼家の僑居は、五百日の間免許ありて、十二月より春へかけて、次第に營作成り、元地の家作は、翌辰年(安政三年)より巳年(安政四年)六月迄に成就し、各徙移せり。(同上)

吉原遊郭の被害

尙ほ地震當夜、吉原遊郭の模樣は左の通りであつた。

抑此夜都下の急變、いづこも同じ轍なれど、わきて花街の忽遽はかならずしもいふべからず。未だ夜更るにあらざれば、毎家酒宴に長じ、歌舞吹彈の最中、俄に家鳴り震動して、立地に崩かかり、うつばりくぢけ柱折れ、其物音は雷霆よりも凌兢く、魂中天に飛び、慴怖周章して、二階を下んとすれば、胡梯跳りて下る事ならず、狼狽して宛轉落れば、巨材其上に墜重りて五體

郭中皆燒亡

を挫き、或は其間に挾れて自在を得ず。號べども援る人なく、呼べども應ふる人なし。瞬目の頃火起りて、焔勢其身に迫る。危くして遁れ出たるも途方を失ひ、烟に咽びて道路に倒れ、息絶たるもあるべし。家のあるじ家族に於ても猶しかり、僅に四肢を全うして脱れ出たるもあれど、資財寶貨は他へ運ぶに遑あらずして、空しく灰燼となしつ。この火五街に延蔓して、廓中殘る家なし。三千の遊君或は漂逃、或は亡たり。……惜むべし廓中悉く烏有となりぬ。燒死怪我人幾百人かありけん、さだかに知れる者なし。火中に其骸を繹出し、慘憺して腸を斷ち、なくなく家に送りし後葬儀を營む。……此夜此里に遊びし騷人嫖客、この妖孽にあひて或は横死し、或は重き疵をかうむり、……たゞ〳〵無事にして落のびたるも、衣服佩刀を失ひ、あらぬ樣して家に歸りしもありけるとぞ。まして廓中の男女、この夜の窮厄は た金銀財寶數を竭して失ぬる事、量り知るべからず、痛むべく歎くべく、叫ぞ毛穎をもて演る事を得んや。〔同上〕

變死怪我人

尙ほ「此度變死怪我人、市中の呈狀には、變死男女四千二百九十三人、怪我人二千七百五十九人とあり、寺院に葬し人數は、武家、浪人、僧尼、神職、町人、百姓合て六千六百四十一人と聞り」とあるが、如何に大數に見積るも、一萬人以下であつたらう。

【八七】震災と人心

人心に及ぼせる影響

安政二年十月二日の地震は、其の被害の程度に於ては、恐らくは大正十二年九月一日のそれに及ばなかつたであらう。一切の死傷者を計上するも、本所被服廠に於けるそれにさへ及ばなかつたから、寧ろ比較にはならないと云うた方が適當かも知れない。されど當時の人心に及ぼしたる影響は、實に深酷なるものがあつたと察せらるる。此の地震の爲めに、幕府が搖り倒されたとは云はぬ

幕府基礎また動搖

が、然も幕府其物の基礎を動搖せしむるに於て、全く無關係とのみは云ひ難きものがあらう。何れにしても外船渡來に引き續きたる出來事なれば、天下の人心は、自からそれと聯亙して、之を天災地變の大なる一に數へたことは疑ふ可くもない。

地震の御會

いましめに天地震ふや神の留守　天災
家並崩るゝ市の霜枯　地妖
火事烈し土藏も賴み甲斐なくて　房
物の直段のとほうずもなき　大損
職人はうまく酒呑月の前　利
藝子は秋の扇なりけり　欲
虫の息程の烟も立兼て　法外
なき魂飛ん闇の吉原　困窮
　　一送圍
　　女
　　命
非

御指圖に寺院潤ふ大旋餓鬼　厚
六分潰れに入て嬉しさ　惠
米金を心涼敷くれてやり　少難
惠も厚き御救の小屋　舍
箱館の事に異國の物思ひ　潔
西洋ケーベルはやる漸寒　德
梵鐘の殺器にならば露時雨　仁
綿布菰食に守柴の戸　政
善政にやりても匂ふ花の江戸　心配
　　春も靜に質素儉約　事
　　右一巡　變化
　　權謀
　　勤儉
　　鉢平
　　守空

梵鐘徵發

尙ほ安政二年十月二日地震の當日寺社奉行から、各宗觸頭を呼出し大砲小銃鑄造の材料として梵鐘入用に付、速に末寺々々へ通達し、献納の手續に及ぶ可く

申渡した。此れは京都から勅命――それも幕府から申請したる爲め――の結果だ。而してその翌年に至りては、種々の苦情にて遂ひに止んだ。

寺々へきびしい鐘(金)の御催促その言譯に自身(地震)參上

又た當時の「千代保久禮」を見よ。

地震ちよぼくれ

ヤレ〳〵水戸さん聞てもくんなよ。今度の地震もお前のおかげで、花の御江戸をやたらに儉約、紗綾と縮緬、茶屋に烟草屋留守居の寄合、決してならぬの、御寺や諸山の、釣鐘半鐘を鐵砲に鑄立る、なんのかのとて、騒ぎのひどさに、神々様にも、出雲の御國へ御立の御留守に、こんな地震が有といふのも、やつぱり神罰、ヤレ〳〵水戸さん、胸に手を當とつくり思案をしなけりやなるまい。伊勢の御神樂あげて見たらば、水戸のいふ事、誠にするゆゑ、此上成とて津浪が浮雲。町も屋敷も所によりては備中溜、潰れる死骸を堀田も、昨日今日では御口がきけまい。伊賀や和泉は高見で見物、ヤレ〳〵伊勢さん、お前の知恵では地震にやかてまい。こんな騒ぎは唐にも有まい。諸色はあがるし、屋敷はつまるし、此上儉約御觸を出したら、御江戸も田舍も、ずつと昔の武藏の原かよ、わたしもお腹がそろ〳〵へつたよ。女や子供を、さつさと御救小屋へ御はへり、なんのかのとて、いつてはみたれど、これが本間の御慈悲御なさけ、難有なみだでうるほふ人の、世直しなんどは、めでたいこんだよ。

水戸を詛ふ

本文「伊勢さん」は、阿部伊勢守、「備中溜」、「堀田」は、堀田備中守正睦が、溜間詰から、十月重ねて老中に任ぜられたこと、又た「伊賀や和泉」は松平伊賀守忠優、松平和泉守乘全、何れも同年八月老中を罷められたことを云ふ。

御隱居(水戸齊昭)もかねがつきたで寺を取

當時の不景氣も、水戸齊昭の儉約論や尙武論の爲めと認め、街頭にては、兎角怨嗟の聲を發したものもあつたことは、上記の次第により、之を察するに難くはあるまい。

齋藤拙堂地震行

【八八】地震と天譴

何れの時代にても、天變地災に際しては、概ね天譴とか、天罰とか若しくは之を有意義なる種々の問題に引き付くる例がある。乃ち安政大地震の如きも、それだ。當時の學者齋藤拙堂の如きは、地震行を作つて、左の如く歌ふた。

天柱折。地維裂。城復レ隍。陵變レ谷。禍發ニ關西一及ニ關東一。彼蒼者天何太酷。」余寓ニ江門一覯ニ此凶、歲維乙卯月孟冬。百萬人家盡傾覆。祝融佐レ虐燄上衝。」死者縱横都下徧。戴ニ鬼百車一弃ニ幽窖一。生無ニ屋廬一死無椿。一死一生誰已唁」貴賤糧食如レ臨レ軍。上下束裝如レ赴レ戰。艸屋布障庇ニ風雨一。陋如ニ陣營一。孰擇レ便」不レ似平生競ニ豪奢一。雕刻粉丹飾ニ室家一。衣必綾羅食甘脆。珠礫金塊俗相誇。」本是忘レ亂狃ニ至治一。滔々天下人如レ醉。一朝驚覺繁華夢。不ニ但地裂恐ニ天墜一。」杞人之言或省悟。何知地妖非ニ天意一。君不レ見堯水湯旱亦天殃。挽ニ回天心一致ニ休祥一。卽今只

地震是天警

要補天手。轉レ禍爲レ福豈無レ方。嗚呼轉禍爲レ福豈無レ方。

此れは全く世の中の人々が、治に狃れて亂を忘れ、豪奢、放恣を逞くし、醉生夢死の生活を事としたから、斯る妖災を天が故らに降したものだと云ふ譯だ。されば此の天警を省悟して、禍を轉じて、福とせねばならぬと云ふが、本詩の主旨である。

釋月性地震行

更らに釋月性の「地震行」を讀めば、左の如きものがある。

維歲安政乙卯冬。十月二日夜二更。武州江戸征夷府。地震延災及ニ柳營一。城復ニ于隍一陵谷變。梁木壞乎大厦傾。何者祝融來助レ虐。烟々焰張レ天天狗行。君臣父子不ニ相救一。轉輾呼號陷ニ火阬一。壓死大凡三十萬。慘ニ於白起坑ニ降兵一。君不レ見昔時周室王綱弛。蠻夷猾レ夏迫ニ東京一。天遣ニ變災一頻警戒。茁卌二年幾變呈。地震者五山崩二。聖人特筆載ニ麟經一。今也四夷交侮レ我。將軍猶未レ議ニ親征一。所以變災相繼至。山崩地震海波驚。三四年間十幾變。天之警戒太分明。燮ニ理陰陽一任レ責者。姑息和レ戎飾ニ太平一。

堂々帝國征夷府。甘與犬羊一城下盟。皇天后土諸神祇。赫斯震怒壞金城一。嗚呼退遇震災一徒壓死。寧如進戰取功名一。縱使吾軍一無大利一。一戰何傷卅萬生。聞說滿城頹屋下。碎頭斷臂散縱横。月黑天寒雨雪夜。到處啾々鬼哭聲。

月性の人物

此れは全く幕府が攘夷を斷行しないから、斯る變災を來たしたと云ふ譯だ。卽ち一篇地震行の詩は、幕府彈劾の大論文と云ふも、不可なき痛快の文字だ。月性は吉田松陰などの友人にて、海防僧の名を博し、眞宗の僧侶として、其の說教には、專ら庶民の對外敵愾心の發揮に勗めたることは、當時に隱れなき事にて、斯る詩を作りたるも、當人に取りては、寧ろ當然の事と云はねばならぬ。

松平慶永建白書

此の地震天戒說は、必らずしも民間の學者詩人などばかりでなく、越前福井の藩主松平慶永なども、左の如き建白書を差出してゐる。

今般地震に付愚衷

近年天變地妖荐臻の處、今般は既に都下に相迫、實に駭愕必天戒と奉存、恐懼戰競不レ啻奉レ存候。就ても第一可レ恐は外寇の一條に御座候處。兼て手後れに相成候武備彌增屈撓可レ致と深憂此事に御座候。依レ之此時節公邊に於かせられ候ても、大城御修覆を初、過日御觸の通り、御取締場所の外、一切御取補無レ之、兩山御廟所御破損所も、常體の御修覆に相成候ては、却て御追孝にも相成間敷と奉レ存候間、別段御名代を以被レ仰譯有レ之、當時の處、武備御整に相成候迄は、至て御假繕に被成置、此御儀すら如レ此候へば、其他治世の御格式に關り候儀は御年限を以、萬般都て御擲却、彌一途に御必戰の御處置に相成、扨諸侯伯へも嚴令相下し必戰の覺悟御奬勵に於ては、三夷（米、露、英）は御條約も相極候處、墨夷又々測量等の儀申出、此末の儀も如何成願望可レ有レ之候哉、追々萬國輻輳可レ致形勢と相成候事に候へば、其内には强て非分の儀を申立、或は亂妨に及候も難レ計、加レ之今般古今未曾有の烈震と申、殊更御不安心

時局對策第一

の儀に付、於諸侯も公邊御同様必戰の覺悟相極、家作等の儀、御年限中は、大身の面々たりとも、陣屋同様雨露を凌候迄に取補理、精々入費相省き武備一偏に相成候様、嚴敷被仰出無之候半では、指當り家作等に費用に疲弊いたし、再武備御引立の切は有御坐間敷奉存候事。

此の如く徳川將軍の御家門の中からまで、斯く意見書を提出する程であつたから、此の地震が如何に人心に深甚の影響を與へたかは、之を察するに難くあるまい。

【八九】地震と政局

堀田正睦老中再任

地震が如何なる程度まで、阿部正弘の首坐であつた幕閣に影響したかは、明白でないが、然も安政二年十月九日、佐倉城主堀田正睦は老中に再任し、阿部に代りて、其の首坐を占めた。堀田は天保十二年三月老中となり、同十四年閏九月罷め、爾來溜間詰として、閑地にある十餘年、今や再任して、然も阿部の上に坐するに至つたのは、是れ外交の難題に對して、阿部が堀田を其の責任の衝に立たしめんとする爲めと云ふ說があつた。兎も角も此れが地震後一週間以内に行はれたることなれば、世間が地震と聯互して、之を考察したるも、無理ならぬことだ。

地震からひらくさくら（佐倉）の返りざき（堀田は佐倉の城主）

大地震古もつかうが用にたち（もつかうは堀田家の紋）

阿部の中から堀田さんが出たよ

此れは「飴の中からおたさんが出たよ」のもじりだ。

當世ちうばら

水戸もなくても堀田てがよい、瓦屋根は阿部ない。

尙ほ又た當時の政局に付て、一般の人氣を徵す可きは、左の「當世ちうばら」であらう。

西洋調練

コウどいつらもこいつらも、耳の穴を明て、能く聞やアがれ、勿體なくも忝くも、日光樣の掟を破り、此頃はとほうもねえ西洋調練なんぞで、神國に生れながら畜生國の眞似をいゝ事にしてしやアがると、夫を上にゐる馬鹿らがほめると、又いゝ事として大べらぼうめが、やみと畜生國と阿部こべになるも知らねえ。牧野（備前）が目から見ちやアほんの氣違の寄合よ。今にもほんとうの事が初まつたら、夫こそつらは丹波（鳥居）ほうづきのやうに、眞赤にして、けつばかり堀田（備中）で居るだらう。大きなつらをして居ても、内に居ちやア越中（本多）ふんどし。今に成つて大酒計り飲んで妾や手かけの久世（大和）つ計聞て、世間の事は、右京（酒井）てんになつて居やアがる。福山（阿部）だの丸山だのと、くそが安藝（本庄）れらア、伊勢（阿部）ひ計で、此廣い世の中が納るものか。西洋調練位では、但馬（遠藤）らねへ唐、ちつと氣のきいた事を初めさせるがいゝ。色々馬鹿な物入計させるから、御旗本がびんぼうして、此頃ぢやア内藤（紀伊）とふなす計喰ていらア、べらぼうめ、福山

馬鹿な物入

（阿部）ぢやアなくて、びんぼう山師が紀伊（内藤）であさられらア引。もしへ主やア大そふな腹を御立だねエ、なんざます、日光樣の掟を破つたとへ、そして畜生國の眞似をする人がありますとへ、わちきなんぞんの勤じやア耳がいとふおす。そして御老若（老中、若年寄）をわるくいゝなますが、老人計りわるいのじやアナイ、若い人もわるくいゝなました。夫じやア、軍ができまするねえ、まあわちきのいふ事をお聞、西洋新玉年立かえる始より、萬歳の舞振りも目出たい事の樣にいゝ習はしであります。其上さんげさんげの修驗者の經文にもねえ、奇妙調練さんげさんげ六根清淨といつて身を清める事がありますから、燒け原の稲荷樣ぢやアない。鳥居（丹波）があるから、何事も遠藤（但馬）の時節の末を待つと思ッてあきらめていなましよ。實〳〵うそでない。本多（越中）酒井（右京）夫だがね、素人の事だから本庄（安藝）にはならないだらう。此上に年寄ばかり稽古しても日數ばかり長岡（牧野）で、藝が村上（内藤）になつて、向から關宿（久世）とさたら、佐倉（堀田）のようにちりちり

何事もあきらめること

になつて、あわを福山（阿部）だらう。夫をつら〳〵考て見ると、わちきなんぞの身の上も同樣だ。切支丹ころび宗門で、つまらなく、金錢を費して、まご〳〵してゐる内に、傾城わけさ、夫だから地震と雷樣と調練は萬歲樂〳〵桑原〳〵」が、當時一般の人氣であつたと思はるゝ。

堀田正睦老中首座となる

十月九日堀田備中守殿（佐倉侯）再び加判の列の上座被二仰付一たり。此侯往年も閣老たりしが、天保の末年病氣により御辭退あつて、溜詰に居られしが、此度再勸にて剩へ上座を命ぜられたり。此事に付而は諸侯の申沙汰し給ふ處は、本文に御書通を擧て次々に記し侍ぬ。世評も亦區々なりしかど、侯の申させ玉ふ如く、福山侯の先知自ら其威勢の盛大なるを戒慎し玉ひ、良善にして事に害なき先輩を撰んで、首座に薦め、其權を分ち玉ふ智術に出たる事ぼ、福山侯の沒し玉ひし後の景況を以て知られたり。〔昨夢紀事〕

第十四章　阿部閣老に對する世評

【九〇】阿部正弘と落首（一）

阿部依然幕閣代表

如何に堀田に上席を讓りても、阿部の在職中は、幕閣の代表的人物は阿部であつた。從て天下亦た阿部を目標として、幕政の是非を批判した。されば權力も阿部に歸し、聲譽も阿部に歸し、而して衆難群謗も勢ひ亦た阿部に歸せざるを得なかつた。既記の如く、

古の蒙古の時と阿部こべに　波風たてぬ伊勢の神（守）風

古は伊勢を恐るゝ唐人も　今は阿部こべ伊勢が恐るゝ

是れ何れも阿部が對外和親的政策を批難したる文句だ。

三　國　拳

お前女のようでお伊勢さん、御加增（一萬石）がおすきでトツビキビイノビイ、

初手はもろこし交易で、天々天下の大騒ぎ、丸くおさまる隱居（水戸齊昭）さん、何のこつた和解〳〵、くるりと廻つて一戰しよ。

是れ亦た阿部が自から利し、水戸老公を籠絡し、和親交易を事として天下を誤るを諷譏したるもの。

嗤阿部朝臣歌

嗤ニ阿部朝臣ニ歌一首

阿部の朝臣はいづれの御代の人なる事を知らず。古記正史を閲するにいまだ是を詳にするよしなし。按ずるに此朝臣時の執政と覺ゆ。はた此朝臣執政の時異國船來れる事ありてよからざるはからひ有つるよし、是等をも其罪の内にかずまゝあざけりてよめるなめり。

人美奈雅憎之登增告隣阿部朝臣多布財伎加左奈經死禰可志

人みながはみな人といへるを、前後にいひめぐらしたる詞なり。にくしとぞへりのへりは、いへりをはぶきたる也。あそはあそむ也。たふさきは犢鼻褌をいへり。卽股塞の略也。此歌は阿部の朝臣は、いづれの御代なるにか、

阿部の政事玩弄

政事をとられ侍りつるに、政事をもて遊び、且えみしが船の來航して、強て交易のことを望むに、古來よりみだりにゆるせし事なかりしかども、異人の無禮尊大にして、動もすれば戰爭をなすべきけしきにいつはり見するにおぢて、おのが計ひもて、これをゆるせし事ならん。諸民擧げて是を憎み侍れども、公にはいまだ罪なひ給はぬ事實の寛仁にぞおはし給ふを、人々其刑を待かねて、にくみあざけりてよめる也。さて此人かく極惡の罪科あるもの、早く其罪を悔悟りて、武夫のならひにてあれば、腹かき破りて死すべからんものを、元より臆病なる人、腹きる事、えなしがたからむにぞ、いざわれわれが、ふどしかしまいらせんからに、とく〳〵首縊りてなりとも死し給へかしといへる心也。こは何人のよみたる歌にや、假初にも執政たる人をかくまでいひあなどるとは、いと〳〵かしこからずやは。

平たく云へば、おれが三尺の褌をかすから、それにて速に首を縊れと、阿部伊勢守に告げたのだ。

諷阿部朝臣歌

諷ニ阿部朝臣一歌一首

佐野乃子我田沼能安宗乎非世利恥負多迷資緒思邪汝毛施荷難牟

さのの子佐野某とて人の名なり。上古にも男女ともに子といへり。田沼のあそは、阿部のあそより遙に先の執政と覺ゆ。此田沼の朝臣の如く、政を亂して不忠不義なる人は見えたり。さるにぞ佐野某は、忠義無二の人にはべれば、おのれがうらみにかこつけて、田沼の朝臣の世子を殺して、苛政を除きたるよしいひ傳ふれど、上古の業にし侍れば、いづれの御時といふことを知らず、正史にも詳かならず。させりちふはさし殺したりといひ傳ふるといへる也。ためしをおもへやは其ためしをおもへや也。なれもしかなんは汝もその如くならんといへるなり。此歌の意は、昔し佐野が田沼の苛政をにくみて、其世子を殺したることのありといひ傳へたり。さればかゝるためしもあるに、からさ政を、今世とても、忠義の士の下にはあるは、汝もそのごとくにやあらんといへるなり。

阿部の最後を告ぐ

流石の阿部も、田沼に比較せられては心外千萬であらう。天明四年三月二十四日、佐野善左衛門政言若年寄田沼山城守意知を殿中に刺したる例を援き來りて、阿部よ汝も亦た此の通りの最後となるぞと、告げたるものだ。

善政猶苛政と見らる

【九一】 阿部正弘と落首 (二)

阿部執政の政策中、其の安政三年二月に蕃書調所や、講武所を設けたのは、其の善政の尤なる一とせねばならぬ。然るに世人は之を以て其の苛政の一に數へつゝある。政治家の苦心も亦た想ふ可しだ。

嗤ニ西洋銃陣一歌一首

阿部の朝臣苛政の一也。えびすの眞似を諸士に、皇國の政道を亂す。その有様を見てよめる也。

兒童良之戯舞鴨鼓擊左惠右江惡倒爲人

小供遊びのたはむれやうなる有樣を申となり。さればわらはらがたはれまひかもといふ也。つゝみうち左へ右へとは太鼓をうちてはやしながら左へすゝめ、右へすゝめなどいひて運轉するなり。惡なみなす人とは、足並するひとなり。終の句よりうち返してみればいと解し得やすし。この歌の意は、西洋流の銃陣を見るにことやうなる太鼓をならし筒袖衣角兵衞のやうなる袴うち著て、いと短き刀を、左りの腰の後ろへさし立、烏帽子に似たるものをかぶり、ゲベールてふ銃を擔て、左へ右へあゆめるは、みなえみしに何事も似せてせまほしとてあしたより夕迄、ぶら〳〵あゆみならすは、何のやくなきこと也。たとへ熟せしとも軍の用にはたゝず、げに童子の戯れにひとしく、たはれたる業にし侍るといへるなり。この軍士の衣服器械などは、皇國に用ゆべきことゝは思はれざれども、古き繪卷物に見えたることの侍れば、こゝにまして述侍りぬ。

保守的人士の人氣

以上の如きは、當時保守的人士一般の人氣であつたであらう。斯る世論の中に在りて革新の業を做すとは、決して容易ではない。政治家は、萬衆視聽の中心にあれば、其の一言一行も皆な細心の注意を要す。

阿部に對する世評囂々

左に記する所は皆な當時阿部執政の身上に就て世評の喧しかつた事を詠じたるもの。其の眞僞は姑く措いて。

嗤下阿部朝臣親出探二都下之美女一爲妾歌一首

此朝臣近臣兩三輩具して、俱に騎馬にてはせめぐりみめよき女を尋ね、卑賤の娘なりとも、妾にせり。みめよからずとも女ずきなれば見たるをめすといへるも一說なり。其身執政にありながら、かゝる振舞あるは似つかはしからぬこととてそしらぬ人はあらぬ也。それによつてよめるなり。

烏羽玉農黑駒並底妹乎思憎日二日出帝馳求可聞

うば玉のは冠辭なり。黑駒なめては黑駒にうち乘ならべてなり。いもをしぞ

は、妹をぞといふなり。しは助字也。ひに〳〵いでゝは毎日のやうに出る也。はせたづぬかもは馬にてはせめぐりて美女を尋ねありくなり。此意は阿部の朝臣の都の内を、黒駒に乗りてはせめぐり、日毎〳〵に美女を尋ね給ひ、妾になし玉ふといふ。くはしきことは今の世にも、此傳へあれば、知る人にとひしるべし。

尚ほ又た一首

詠二阿部朝臣淺草郷妓院門邊飲レ馬歌一首

淺草の郷は、いづれの處なるかいまだ考へず、武藏國豐島郡江戸にも淺草といへる地名はあれども、むかし淺草に遊女ありたることを聞かず。されば外國にやあらむ。

妓女能門二廻草藤毛馬駐底阿部朝臣我飲馬云

妓女は遊女なり。わざともはわざ〳〵と云へること也。駒とめては馬をとどめて也。みづかへるといふは馬に水をのませしといふといへる也。阿部の朝臣みづから妾を尋ね出給ふ程の人にしあれば、元より色にふけり玉ふさがにておはし玉ふならんか。さるにぞ是又執政にて、遊女の家の門に、わざ〳〵行て、馬に水かわし給ふは、遊女の中の、妾になさまほしく、ほりする女もあらんと尋ね給へるならんか。馬に水かふは、その心なくば、此處に限らざらまし。妾を求むる心とはいへども、彼もおしはかる事にこそ。

是等は固より眞面目に、其の事實の有無を吟味する必要はない。但だ如何に當時の世情が、執政者を取扱うてゐたかを知る可き資料として、茲に掲げたまでだ。

小笠原家炮碌調練

【九二】安政年間旗本の氣分

安政三年の頃、江戸麹町の續き馬場に於て、小笠原家の門人、馬術稽古の爲め、

炮碌調練と云ふ事を工夫し始めた。此れは差渡四寸許の土器を、頭上にいただき、劍術稽古の面を被り、馬上にて隊伍を定め打合ひ、土器のこはれしを負とし、全きを勝とす。見物多く出る。〔武江年表〕抑も斯る流行も、畢竟對外事件の頻發から促がされたことであらう。尚ほ當時の情況に付ては、左の一文を見よ。

無法がはやる

やんれ〳〵、無法がはやるせ、こまつた事だよ。聞てもくんねい、近頃世の中おらんだ所か、つまらんだらけで調練させたり、甲冑揃ひのなんのかのとて、諸人をこまらせ、中より以上は、目くら揃ひで、人氣をそこなひ、どふすることだよ。治世の世の中馬具も具足も持たぬが人並、もとよりないから、一家親類かりたりかしたり、損料なんぞで、どうやらかふやら、去年は濟んだが、夫から地震でふるひ崩され、大金つかつて、麁末にこしらへ、西洋鐵砲、これも當氣でやらかし〳〵。

總てあて氣

なんでもかんでも、させうとするのも、やつぱり當て氣で、おぼさん言をすめちらかし、世上の不服にちつともかまはず、知らぬ蘭學、知つたふりして、お鼻にぶらさげ、御威光かぶつて、たわ言云ふのは、たわけた事だよ。あちでもこちでも、合藥つゞかず、御筒は不足で、日向をから手で、歩行て仕舞と、ぶつ〳〵こごとを言へ共、しよことの無から、つゐでの事だと諸方を見合せ、おのれも當氣で一番やらふと、質ばち置つゝ、ためしも出來ない、ケエールを拵へ、萬藏仕立の具足をこはして、どふらん拵へ、出來る有樣つまらぬ世の中、朝から晩まで畜生のまねして、なんのこんだよ、あんまりべらぼふ、其上御見置裁付草鞋で、すた〳〵まごつき、輿の御人は油斷がならぬと、釘ぬき親子は、びく〳〵さつしやる。なんでもかんでも手筋がなければ、賢人君子も蚓も同前。あきれたこんだよ。部屋住番人臨時の仕事だ、吟味の有のは、いつもの事だよ。あんまりきまゝほうづがあります。つまらぬ時節だ、築地が評判、是又當氣で始た所が、稽古にやなるまい。劍術教授か、大馬鹿たはけめ、何にも知らずに、勝氣が十分、子供に目を見せ道具は

朝夕畜生の眞似

武術稽古罵倒

世上當氣驚ずる

づれを、うつたり、つゐたり、足からかけては、初心をころばし、怪我をさせても、平氣なつらつき、兄弟揃つてたわけを見なせい。稽古に教授だ、飯のさいにもならない惣ざい、頭取なんども居るではないかい。叱つてやらずば、御役がたつまい。尙又本所のぢいさん、師範の名目、何の事だよ、高祿いただき、だまつているのみ御役じやあるまい。能く〳〵氣を付、御弟子のやからが、どうけをするのも、しからざなるまい。お鎗の御師匠さん、けいはく當氣は、私事也。赤坂奴が御弟子の有樣、第一しかつて、風儀を直さず、其儘おゐては、役儀が立まい。外に氣をもむ御人がひとりで、ぐづ〳〵思といふとて、腹にこたへて、だんまり御幕も、引込思案が、はじまるさうだがなんでも世の中、當氣がこふじて、まつくらやみだよ。用心なされよ、鼻をつまゝれ、くらやみだとつて、邪宗になつたら、お罰が當るで、なんでもかんでも、西洋流行は、よくない事だよ。松にからんだ藤がはびこり、目玉飛出し、から口しやべれど、根〆が輕石、重しはふは〳〵、よしに西洋やめたら一の手、去年の地震や、諸國の變事も、神のおいかり、只ではないこと、畜生學びは、御承知あるまい。片意地はらずに、正路の事なし、お金が入つても、人氣が落付、蕃書調も無益の板面、神の祟が程なくあります。西洋太鼓はどふした事だよ。たまげた事哉。尙又世の中、おゝつけ替ろふ、まち高袴に木綿の紋付、上から下まで上下わからぬ、それもゆるんで絹ける賣ます、ケエールを懷て、假宅たたりも、ぶしやれの限りだ。咬れ返つて、我等の口には言もいはれず。それさへあるのに、端板の裏金かむつて、そぞるも、御役にかかわり、二度と再びよしにしなせい。毒害評判うそではないぞよ、行列揃た幽靈咄も、早速消たり、めつぽう過ると、不出來になります。裏金端反て、お妾さがしも、あきれた事だよ。假宅そそりは天下の評判、此頃西洋こつそりお止て、いゝ子の積りだ、だしに遣つた隱居は、さとつて、出なくなつたよ。當氣のやつらの面をはらぬと、天下の難澁、御油斷なさるな、うろ〳〵する場じやもふない。御時節替つて、中から下にはたりと落ます。

世上尙又變らん

當氣の人達天下の難澁

不用の騎戰調練

夫から又々どんなになるやら、むかしの掟も、なんにもならない、やめろふめつぽう騎戰の調練、不用の時節と、知らぬ大馬鹿、（ママ）靈の調練、炮碌たたきや、犬追物でも、不殘當氣で、困た世の中。眞事の時には、夫等たぐゐは、御役に立たない。晝寢が增しだよ。精氣を養ひ、くたびれもふけはよしにしなせい。くその役にも立ぬにさわぐな。當氣の中にも、いとどあはれは、金玉ぬかれて、死たる馬に、死ぬは片輪で、無益の殺生、こまつたたわけが、追々ふへるせ。

蘭學當氣

蘭學當氣も、見切て止めすば、お罰が當るぞ。よしにしなせい。なんでもかんでも、當氣をこらへて一言いわずに、だまつて居るのが、當時の一の手、御油斷なさるな。お尻がわれだし、ずどんとほうられ後悔しやんな。御爲になるべき仕方がありやす。武家を救ふが、なんでも肝要、能能氣を付、依怙の我ままおやめがよからふ、此上大變あらふも知らない。神さん祈つて、萬民たすけて、御國の固めを、專一要と、するこそよかめれ。近頃異國の取沙汰無けれど、御油斷なさるな、今日にも明日にも來るかも知れない、いざといつたら御氣に入たる當時の役人、けつをまくつて、逃るが第一、今より支度をそろ〳〵しなさゐ。おし付日を見て、目出度なりやす。ほうい〳〵。

以上は當時旗本の腹の底を言破したものであらう。斯る連中を賴みとして、德川幕府を、從來の儘に支持せんとするは、到底不可能の事だ。當時阿部執政等の苦心も亦た察せねばなるまい。

阿部正弘死す

【九三】蓋棺當時の阿部の評判

阿部正弘の死に付ては、別に記する場合があらう。今は唯だ如何に彼が如き賢明なる執政であるに拘らず、世間では唯だ彼の弱點のみを指摘しつゝあつたかを語るに止めるであらう。彼は安政四年五月以來病に罹り、閏五月九日より出

當時の世論

仕せず、六月十七日午時半遂に逝く。享年三十九、同二十七日喪を發し、七月三日、府下新堀端西福寺に葬つた。此日大雷雨であつたが、當時の世論は、此れを以て、一種天譴の徴とした。

伊勢慢氣膽價十萬石
朝間慢氣膽加增の一萬

第一胃腎（異人）を養ひ、體千情增するといへども、我が腹の痛む事なし。權威は益々強くなり、腹は日々に肥脾胃氣（御鼎負）を引入候て、邪魔を掃ひ、酒宴淫樂はほしひまゝになる也。遠馬の足を早くし、醐を能し、痰には朝夕新草（新姜）を用ひ、厄害（役替）昇進には、丸を用ひて、其功妙なり。上みにはいか程の變あるとも、少しも頭痛にやむことなし。下もいかほど痛むとも、更に構なし。酒の二日酔には、登城なし。其外目欠（妾）飯つかへ（召仕）の手筋を引づるには、功能ありてかぞへがたし。

加減

一、上氣仙（蒸氣船）には、石炭を用。
一、胃腎（異人）の渡來には、武士を粉にす。
一、脾胃氣（鼎負）の於尾には、黃金大盡。
一、水俯の婬虛（水戸の隱居卽ち水戸齊昭）には便舌（辯舌）を以て、かげんす。

禁物

右藥法は諸人の知る所なれども、別而一昨年來、地震大荒後御評判に預り、猶此上蝦夷地の果迄も、御吹聽奉願上候。以上。

日本御政事所
一家

無理非堂製　阿部

今茲に伊勢朝間慢氣膽とあるは、萬金丹をもじつたものだ。而して萬金丹は伊勢朝間が本場であつたから、その伊勢卽ち阿部伊勢守を、援き來つたものだ。尙ほ當時の童謠に曰く、

あの阿部さん、いひあべさん、ちいつと御趣意が和らかで秤にかけたら十萬

石

阿部氏菩提所焼亡

且又た阿部正弘を埋葬したる淺草西福寺が安政四年八月四日、其の庫裡より出火、本堂、方丈、盡く燒失するや。

西福寺炭團をいけて火事を出し

阿部家の紋所は、黒丸であるから斯く云うたのだ。

江戸風邪流行

安政四年二月、江戸には風邪が流行した。其の落書に曰く、

去々卯年(安政二年)大からくりにて、大地震取建入ニ御覽一候處、先々大當り之由、御評判被ニ成下一冥加至極難レ有仕合奉レ存候。付ては爲ニ冥加一往古より之掟之通、雷、火事、親父の内にて、工夫仕、入ニ御覽一可レ申と存候得共、餘り古めかしき間、新工夫仕、去辰年(安政三年)八月大仕掛大嵐奉レ入ニ御覽一候處、是又諸家様方御始、寺社東町とも、大當り之段、蒙ニ御評判一偏に、難レ有仕合奉レ存候。當春も何かと心組仕候へども先一寸手輕に風邪流行と、昨年荒殘りの風袋の底をたゝき、御吹聽申上候。

世上追々騒がし

よろしく御評判の程、偏に奉レ希候。

地震から、また大風と吹あらし、又ものこりて流行の風。

但だ、此の風邪は、安政五年夏から秋にかけてのコロリ(疫)程に、都下を惱ますなかつたであらう。されど安政二年の地震以來、兎角都下の人心は恟々として、動もすれば、何事か起りはせぬかと不安の念に襲はれつゝあつたことは之を察するに難くない。何れにしても世の中は、追々騒がしく成りつゝあつたことは、意識的であると無意識的であるとを問はず、概して一般庶民にも、感付かれつゝあつた。要するに德川の天下も、愈よ多事となつて來た。

阿部正弘を評す

弘化年間、老中水野越州の黜けらるゝや、堀大和守も亦獨り全きを得ず共に倒て、其後を承る老中は、福山侯阿部伊勢守なりしが、此人は年少より人物望ありて、此時未だ三十歳に滿たざれど、局量寛廣にして能く衆を納れ、才を愛する人なりければ、朝野共に欣戴する事、越州の威嚴長る可きに相反し、恰も宋の熙寧年間、王安石が新法の苛刻に愈りたる跡を繼で、司馬君實が寛厚長者を以

て之に代りたる如く、人々皆蘇生を得し心地せるは、實に此人の德なりと云はざるを得ず。去れば越州の後を承るに當り、若し又越州其人の如きを以てせば、諸司百官も何程謫罰せらるゝや測り知る可からざるも、幸に勢州なりしかば、唯太甚を去り、太甚を棄るに止まりて、上下皆安堵の思を爲せり。去り迚毫髮も好て譽を釣り、名を求むるの念に出るにあらで、眞に國を憂ひ、主に忠なる誠心に出たるは、天下皆信諒する所にてありき。因りて、米利堅伯理の始めて軍艦を率ひ渡來する に當り、驚天愕地無曾有の大事變に際して、惶遽匆忙を極ると雖も、赤舄凡々として格別の失措も無く、國體を維持して、幕府の世を終りしは、此人の功と云はざるを得ず。當時或は其長避卑弱を咎むる者鮮からざりしと雖も、今日に至り之を思へば、時勢を測らず無謀の擧を爲して、後の人を して、如何とも爲る能はざるに比すれば、其相距る雲泥霄壤と云ふ可し。〔匏菴遺稿〕

【九四】時務策ちよんがれぶし（一）

人心動搖底止せず

嘉永より安政へかけての世相を概觀するに、天下は頗る多事であり、且つ愈よ多事に趣きつゝあり。而して天下の人心は、動搖底止する所を知らず。而して所謂る旗本八萬騎と稱する者共は、二百五十餘年の泰平にて、殆んど全く其の彈力を失し、唯だ極めて少數者を除けば、自餘の者共は、皆な醉生夢死の有樣であつた。斯る廢頽氣分の漂うたる時代に於て、新たに發生しつゝある內外の政局に善處せんとするは、決して容易の業ではなかつた。

阿部就職前の凶變一二

時務策ちよんがれぶし

やれ〳〵抑々近年世上の有樣御存じなれ共、聞てもくんねへ、阿部が政事を行ふ間に、天下の凶變一二をあげれば、嘉永年中（三年）八月八日の大雷この方、西丸燒失、（嘉永五年五月二十二日）禁裏の炎上（安政元年四月六日）神代此方聞もおよばぬ亞墨利加大船、浦賀へ乘込、不幸があるやら、おろしや長崎からふと海岸臺場をつかれて、知らずにおつたか。近眼の阿部さん、遠目がきかぬで、困つたものだよ。また〳〵凶變幾らも有やす。寶藏火附に、金藏どろばふ（安政二年三月六日梅林門內の金藏へ、賊忍入三千兩盜取、後に賊富藏藤十郎召捕られ、安政四年五

寶藏火附金藏泥棒

月十三日、引廻しの上、磔刑に處せらる）　駿河が地震で、下田が津浪だ。十月二日（安政二年）はお江戸が地震で、間もなく大荒れ、大坂大雷、英吉利又來た。個様の事ども、あるのは尤、小人集り國家を治めりや、災害並んで至るといふ事、昔のお人が言たじやないかい。是れ〳〵阿部さん、天下を泰平國家を豐にするは目の前、ぞうさもない事。御存なければ敎へてあげやう。おまへの貰つた一萬石をば、お上に戻して、本郷の隱居の子供を貰つて、家督を讓つて、隱居をなされて、日光へ向つて、掟を破つたお詫を申して、お腹がいたけりや、首でも縊つて死だら、まだしも忠義じやなけれど、人間らしいぞ。

曲つた政事に我儘一杯

御上にあたまのおしてがないとて、曲つた政事に我儘一ぱい、譜代恩顧の御人の中には、頗るお方も澤山あるのに、夫をば見出さず、生れも素性も分らぬ百姓、浪人なんぞが、假親拵へ、御上へ僞り、御徒と出かけて、段々經上り、諸太夫なんぞに、なさるといふのは、たまげたこんだよ。鼻持ならねへ、元より是等は、御上をたばかる、大きな罪人、市中へ引出し、首切人物、箇様の小人、御上の御爲は、ちつとも構はず、諸人のなげきは、猶更かまはず、よくない事とは氣が付ながらも、老中へ向つて、一言なりとも、返答出來ぬは、無理でもねへのさ、元來賤い取立者故、己が寵のふへるが專一、心にかけるは、哀れなこんだよ。今の役人、上へよはくて、下へは强くて、小股をくゞつて、仁心なくつて、一同すくつて、了簡なくつて、異船にあはくつて、老中をしやくつて、御臺場作つて、鐵砲がなくつて、寺院をせびつて、半鐘をたくつて、大筒作つて、因果が廻つて、勇氣が無くつて、軍に弱くつて、おけつが輕くて、お馬が早くて、地の中もぐつて、お尻をまくつて、逃るであるだろ。

小人の政治

爲政家用意の要

元來天變地異などは、概して不可抗力の致すところ。固より當局執政者の責任ではない。されど如何なる時代でも、其の變災に遇ふ毎に、世間では之を當局の責任であるかの如く思ひなし言ひなし、而して判定しなす。但だ一萬石の加增は、阿部其人に取りては、其の功勞に對して、當然過ぎる程であつたが、

然もそれが世論の種となつた。されば當局者は、此邊の事に付ては、須らく細心の注意を要する。相當の事さへも、世間では之を手盛と邪猜する。況んや眞成の手盛に於てをやだ。

【九五】時務策ちよんがれぶし（二）

阿部人でなし

是れ〳〵阿部さんどうする積りだ、一體おまへは、人ではないぞへ、そうだ畜生のこまかに千代ぼくれ、なわむき野郎を、そろ〳〵引連、大宮八幡遠馬と出かけて、笠著たまんまで、參詣するから、社人が咎めりや、苦るしうないぞと、挨拶するとは魂げたこんだよ、弓矢の神なる八幡菩薩へ、無禮を働く畜生野郎め、今にもお罰が當るであるだろ。昔のお人は、出陣するにも、神前通るにや、下馬をば勿論、兜をぬがれて、御通りある事、知らぬか、たはけめ、あんまりあきれて、物も言れぬがり〳〵野郎め、諸人のそしりは、ちつともかまはず、遠馬は付たり、假宅そゝりに、嬉しさ半分、おたさんじやなけれど、にこ〳〵笑ふて、飛んで出るなぞとは、あきれたもんだよ。あげくの果には、遠馬で見初た、十五の小娘、妾におきこみ、ちん〳〵鴨やら、わん〳〵家鴨で、樂しむなぞとは、どうしたこんだよ。おまけに世界の木像野郎が、妾や女中の手づるを頼めば、役替昇進させるといふのは、馬鹿げたこんだよ。箇樣に政事が亂れているのも、七兩貳分にて、ゲベールを買ふよりや、間男するほがよつぽど增だよ。漸く出來たる和蘭製造、ゲベールは三千、お拂直段を下直に定めて、海防掛の役人初が、引取なぞとは、扨々さもしい心のやつらだ。箇樣のたわけが、西洋流にて、軍をする氣か、さつぱり分らぬ。なれども、諸組の與力や同心、黑鍬なんぞに、多分の御手當出した上にて、稽古させるはまだしもよけれど、御旗の本をば、固めるお人が、ゲベールをかついで、どうなるもんだよ。まだ〳〵分らぬ講武所調練、合藥

賄賂倖進
西洋調練
鳳凰

講武所調練

蘭學流行の果

費へな空砲はなして、音ばかりさせるで、掟が濟なら、芋でも澤山喰つて屁をひる稽古が、まだしも增だよ。計るに足らざる當氣の小人、能い子のふりして、牡丹をつけたる稽古著なんぞに、股引はき込、頭巾をかぶつて出掛るなどとはどうしたこんだよ。段々こうじて、今には殘らず、髭でも延して、飯を喰する三度のじきには、犬猫殺して、喰ふであるだろ。この頃專ら蘭學流行、一文不通の當氣のやつらが、ガランマチカ（文典）を一冊あげると、先生顏にて、蒼書の調の出版などとは、片腹いたいぞ。後には定めし聖堂潰して、畜生の祠を建てるであるだろ。嵐に付ては、百俵以下へは取越米にて、下さるなんぞと、皆米もどきの書付面にて、少しは御家人、息つく積りで、喜びかゝつて、間もなくお米が渡つて見たれば、こいつもやつぱり山師の細工で、諸人を一ばいおこはにかけたるお米に、上下を渡すといふのは、扨々きたない仕形じやないかい。箇樣の事では、人の心が、中々とれねへ、却て機嫌を損じる道理だ。是れとは違つて、今度の張紙相場のよいのは、まる損じやないかい、定めてこいつも、春屋がくしやめに吹飛ぶやうなるぼんぽち米をば、渡すであるだろ。命の元なる兵糧並に諸人を助ける籾藏なんぞは、こはれたまんまで自滅の本なる大船なんぞを造るといふのは、どうしたこんだよ。誠に困つたべらぼう野郎だ。己れが天下の政治が出來ぬで、諸人を賴んで時務策しろとは、あきれたこんだよ。左樣に政事が、眞闇やみなら、あかるい御方に、讓らじやなるまい、夫をも構はず、恥を恥とも思はぬ獸物、犬にもおとるせ。御役に立そな伊賀殿（松平伊賀守忠優安政二年八月四日老中を罷む）なんぞは、あきれをとゞめて、いひたい事をば、十分いはれて病氣と號して、引いたじやないかい。お蔭で土岐には、評判よくつて言甲斐ないのは、無理でもねへのさ（留守居跡部甲斐守、土岐丹波守、安政二年八月九日大目付に轉任）伊勢風吹せる但馬の老ぼれ（遠藤但馬守）阿房の河内のでこ助野郎（勘定奉行松平河内守）が、己が身上に、引別しやがつて、天下の長者の臺所つめるは、どうしたこんだよ。己が配下の勘定役にも、算盤玉より鐵砲玉とて、ゲベールかつがせ、異人の眞似

大船建造
松平忠優退職

して、眞黒仕立で、調練させるは、當氣のしれもの、同じく息子も、御見臺騒ぎに、薩摩の家中と口論始めて終には誤り、尻腰遣つて、逃出すなどとは比興の拔腰、やう〳〵諸人の恨が積つて、目玉が飛出し死だじやないかい。惡をも積ねば、其身を亡す迄には至らぬ、箇樣のやつらが、段々くたばりや、天下は泰平、國家は豐かになるのは目の前、今にも伊勢どん、今にも伊勢どん、並に天下の政事に預る小人、愚僧が寺中に古しく往たる狸じやなけれど、終には尻尾を出すで有だろ。ヤンレヤンレ

安政四年夏

上州館林在茂林寺客僧　鶴守　作

守株偸安の代表

以上は如何にも守株偸安の世情を代表したるものだ。之を一讀せば、當時世の中は姑息、因循、唯だ從來の陋習に安著したるを知るに餘りあらむ。斯る時勢に際して、革新の事業を企つるは、決して人望を博する所以ではない。阿部正弘の如き、穩當、練達、恒に妥協、調停を政治の眞諦としたる政治家さへも、此の如く衆難群謗の衝に立たねばならぬとすれば、其他は推して知る可きだ。要するに幕府及び幕府を支持する勢力は殆んど、根本から腐敗したと云ふも決して過言ではあるまい。

第十五章　有志者交遊の風起る

【九六】廣瀨旭莊の隨筆に現はれたる安政年間の世相

驕奢淫蕩の增長

都會は、嘉永、安政に於ても、依然大御所末期――文政より天保の初期――の驕靡淫蕩の風を一掃せざるのみならず、寧ろ之を增長しつゝあつた。水野の改革は、其の中間に於ける一時の出來事にして、其の失脚後は、やがて掌を反すが如く、其の舊態に復したことは、既記の通りだ。〔參照　五八〕

余が識る所の書林、十年前は多く唐本を賣せり。今は所謂人情本の類を賣せり。余其の故を問ふ。答て曰く、我は道を知らず、唯利を射る者なり、二十年前は唐本利多し、今は是を買ふ者少し、世俗一統に玩ぶ所は、春畫と繪本とのみ。其利は唐本に三倍す。故に已むを得ずかくせりと。余以て世道の變を觀る。

書生風の一變

此れは安政二年――四年の間に稿せる廣瀨旭莊の隨筆中の一節だ。

又た曰く、

我十三四の時と、今は僅に三十四五年なれども、書生の風など殊の外變せり。當時は大食するもの多く、今は大睡するもの多し。當時は鬪を好むもの多く、今は色を好むもの多し。當時は粗濶なるもの多く、今は密嗇なるもの多し。之を要するに當時は勇にして淺く、今は柔にして深し。夫子の先達、後進を取捨し玉ひし感なきに非ず。

是等は恐らくは未だ定論とす可きものではあるまい。見樣によりてはその觀察を平反することも出來るであらう。而して唐書を讀む者の減少したるが如きは、必らずしも春畫人情本を弄する者增加したるが爲めでなく、寧ろ和蘭學の流行が盛んになつた爲めとも云へよう。或は世の中の氣運が一變して、漢學の流行が全く廢せられざる迄も、下火となつたからとも云へよう。されど安政

年間に於て、都會の地が、概して頽廢氣分に支配せられたる模樣は、之を見ても想像するに難くはあるまい。

又た曰く、

三都人の比較

京の人は細なり、大坂の人は貪なり、江戸の人は夸なり。京の人は矜氣多く、大坂の人は殺氣多く、江戸の人は客氣多し。京の人は土地を尊ぶ、其意に曰く、江戸大坂といへども皆田舍なり、すむは都に如くはなしと。大坂の人は富を尊ぶ、其意に曰、公卿官祿高しと雖ども、貧きが故に、我等の商賈に手を下ぐるなり。世の中に富ほど尊き物はなしと。江戸の人は官爵を尊ぶ。其意に曰、諸侯さへも貧き時節なり、貧は愧づるに足らず、質を置いても立身するがよしと。是三都人氣の異なる所以なり。

又た曰く、

田舍人三都を見るの要

田舍人、一たびは三都を觀ざるべからず。京を見ざれば我邦の百王一姓、萬國より尊きを知らず。大坂を見ざれば、我邦產物多く、舟楫便利にして、萬國より富みたるを知らず。江戸を見ざれば我邦の人口衆く、諸侯輻湊し、萬國より繁華なるを知らず。

西洋書の研究

萬世一系の一事は、當然の事ながら、大坂を見て、日本が萬國より富むを知るとか、江戸を見て日本が萬國より繁華なるを知るなどゝは、全く世界を知らざる國自慢のみ。然れども廣瀨旭莊は當時に於て最も通儒と稱せられたる一人だ。彼にして此の如ければ其他は知る可きのみ。

又た曰く、

今外夷の砲術及び便利の器具を得んと欲せば、志ある者は、西洋の書を研究せざるべからず。唯彼が所謂道は、天主敎にて、器具の外は、取るに足ることなし。然るに横文字を讀むことを知れば、黃口の兒すら口を放つて、漢土の聖人は皆迂濶なり、我邦の神道は固陋なりと嘲笑す。今十年來のことなるに、猶此くの如くんば、今日より數十年の久しきを經ば、彼必ず我儒道神道に抗するために、其所謂天主敎なる者を口には唱へずして、心に信ずる者

出るべし。此事官の明斷にて、法禁を設くるにあらざれば、其害勝て言べからざるに至るべし。拙醫に治療を任するとは、是等の謂なり。

此れは固より、漢學者の立場から蘭學者を觀たるものなれば、固より偏黨の見を免かれざれども、然も是亦た當時の世相を卜するの一端なるに幾からん歟。

【九七】　大名相互間の交通

各大名間の聯絡禁止

德川幕府の仕組は、一切を幕府中心とした。天下の大名も、悉く幕府を中心として、其の統制の下に就くこととし、而して各大名の間には、何等の聯絡、若しくは結合をも容さなかつた。否な斯くす可き餘地なからしめた。乃ち各大名の間に於ける結婚なども、悉く幕府の允許を經るにあらざれば、之を行ふ能はざらしめた。

只簡單の交際のみ

固より千代田城に於て、互ひに顏を見合はする、同一階級の大名達の間には、自然に交際がある可きだ。且つ親類とか、緣者とか、若しくは役目柄の關係とか、或は趣味、趣向を一にする干係から、自然に交際が出來したこともあらう。されど別段それが政治的に、何等の意義もなかつた。

政治的色彩ある交遊

されど其の政治的に本來無意味のものが、嘉永、安政頃には、既に若干の政治的色彩を帶び來るに至つた。乃ち水戸齊昭を中心とする交遊圈、若しくは島津齊彬を中心とする交遊圈、若しくは阿部正弘を中心とする交遊圈などの如きは、其の著明なる例と云はねばならぬ。而して其の干係は、單に大名相互に止らず、或は大名と旗本、若しくは浪人の間に及び、更らに大名と公家との間にも及んだ。

大名の京都手入の禁弛む

元來大名が京都に手入をするは、家康以來の大禁物であつたが、此れも時と興に、其禁が弛んだ。元祿時代に於て、柳澤吉保が、京都にそれ〴〵手入をしたのは、或は將軍綱吉の命を承け、若しくは默許の下に於てゞあつたかも知れ

ない。新井白石などが、京都に典禮取調に出掛けたのは、全く將軍家宣の命を奉じての事だ。されど結婚其他の關係にて、大名と公卿の間には、自から一脈の氣息が、通じてゐた。而してそれが嘉永、安政頃に至りては、自然に政治的色彩を帶び來ることとなつた。例せば島津家と近衞家との關係、水戸齊昭と鷹司家との關係、若しくは井伊家と九條家との關係の如き、其の著明なる例とせねばならぬ。

漸次聯絡密となる

固より私かに徒黨を結ぶことは、德川幕府の最も嚴重に取締りたる所にして、如何に世が末期となつても、それを公然敢てする者はなかつた。されど親類、緣者とか、若しくは其他の歷史的の緣故を辿りて、それを互ひに凡有る方面に利用するは、幕府と雖も、之を如何ともする能はざる所だ。而してそれが遂ひに政治的色彩を帶び來るまでに至つたことは、周圍の形勢が、之を然らしめたる所と云ふも、過言ではあるまい。

諸大名氣息相通

幕府の末期には、幕府其物が其の中心點たる實力を失墜して、遂ひに、各大名をして、互ひに政治的同盟と云ふ程ではなかつたにせよ、政治的に氣息を通ずるに至らしめ、延いて其手を京都までも延ばすに至らしめた。此れも幕府の微力の致す所にして、今更ら如何ともす可き樣もなかつた。但だ阿部正弘の在世中は、彼が一面幕府の執政者であると同時に、自から賢明なる大名の一人として、恒に各大名、各雄藩主間の中心點となり、然らざる迄も、其の連鎖の役目を勤めた爲めに、此の大名相互間の交際が、幕府に取りて、大なる脅威ともならず、將た大なる邪魔物ともならなかつた。然も其の趨勢は、動もすれば發展して、諸侯會盟の狀を馴致せんとするものが無いでも無かつた。

諸大名自主的行動起る

要するに嘉永から安政にかけての世相の一として、最も著名なるは、各大名の間に於ける交通、往來、卽ち其の自主的行動であつた。若し島津齊彬にして、安政五年の夏に病死せざりしならんには、此の諸侯會盟の大勢は、恐らくは發現したかも知れない。但だ彼の死によりて、大名間に、其の統率者となる人が見出されず、その爲めに、折角の大勢も之を利導する者が無く、遂ひに幕府の

瓦解まで、大名相互間の交際は、離合聚散、時と與に變移して、幕府に取つて之に代る可きものは出來しなかつた。

【九八】士人相互間の交通

徒黨の禁

徒黨は德川幕府の最も禁物の一であつた。大名は勿論、普通士人に於ても、それは法度として嚴禁せられた。從て各藩に於ても、徒黨からして、改易などを惹起するに至つた事さへあつた。斯る次第であれば、士人相互間の交通なども、德川幕府に於ては、決して奬勵しなかつた。山鹿素行や、熊澤了介が、幕府から咎を被りたるも、其の門戸が餘りに繁昌したるが爲めであつた。

士人交遊頻繁

然るに幕府の末期と云はざるも、其の中期以降は、士人間の交通は自然に頻繁となりつゝあつた。特に高山正之の如きは、孤劍飄然天下を周遊し、東奥の端より、鎮西の極に至る迄、隨處に其の交遊を求め、隨所に其の地方の著名の人士と交驩した。されど高山は一個の浪人たるに過ぎなかつた。

士人の天下周遊

然るに嘉永、安政の頃に至りては、單に浪人ばかりでなく、各藩の士人中にて、天下を周遊する者が少くなかつた。武術家の武者修行、俳諧師の行脚、畫家文人の旅稼ぎなど以外に、眞に各藩の情勢を察し、交遊を天下に求むる者少くなかつた。而して中には一個人の資格でなく、其藩、若しくは藩主の命を奉じて、公然然かする者さへあつた程だ。

小楠松陰の例

例せば嘉永四年横井小楠が、肥後熊本より九州を經、中國筋より畿內、南紀に及び、更らに名古屋、北陸に及びたるが如き、若しくは吉田松陰が、嘉永五年に、肥後人士宮部鼎藏等と、江戸より水戸を經、白川、會津、新潟、佐渡、弘前、青森、盛岡、仙臺、米澤等を歷遊したるが如きは、其の一例だ。而して斯る例は、決して小楠や、松陰には限らなかつた。各藩の士人概ね此の通りであつた。少くとも何れの藩士中にも、其の若干は四方の志あり、四方の見聞あ

る者共があつた。

都會に於ける士人交遊

單に地方の周遊のみならず、都會は何れも各藩人士の交通所であつた。江戸や、京都や、大阪や、或程度に於て長崎やは、云はゞ、人間の手形交換所とも云ふ可き場所であつた。銘々其藩に還れば、何れも各藩割據の舊態を依然として持續しつゝあつたが、都會に於ては、藩と云ふよりも、寧ろ個人として互ひに交通した。

志士往來

從來の交通は、所謂る御留守居連中の會合などにて、唯だ酒肉徵逐有らん限りの贅澤と、狂態とを演ずるに過ぎなかつたが、外艱漸く逼り、内憂從て生せんとする嘉永安政の頃に至りては、御留守居役人共の莫迦遊びばかりでなく、眞に各藩志士の間に往來が頻繁となつて來た。乃ち彼等の君主たる藩主相互間の交通頻繁なるが如く、彼等の相互間の交通は、更らにより頻繁となつて來た。

藤田東湖

今ま試みに當時各藩人士中の最も目標的人物たる藤田東湖の交遊簿に於て、其の人名を檢するに、奥州人もあれば、九州人もある。旗本もあれば、浪人もある。武人もあれば文士もある。顯要の者あれば、微賤の者もある。當時天下の先見者と謳はれたる佐久間象山や、横井小楠なども、其中に記入してある。

信州松代　佐久間　啓之助

熊　本　横井平四郎（己亥六月來訪同十二月二日來る）

とある。己亥は天保十年にて、横井は江戸に藩より留學し、藤田は其主齊昭が、弘化失脚以前、即ち彼が第一期の江戸時代であつた。單に江戸ばかりでなく京都などに於ても、梅田雲濱や、梁川星巖の門には、四方の志士の訪問する者、決して少くなかつた。從來は詩人には詩を談じ、儒者には儒を說き、劍客には劍を語りたるも、今や彼等が互ひに談ずる所は、皆な國事のみであつた。

處士横議の始め

人或は處士横議を以て、安政末期以降の事と見做すも、其實は天保中期頃より此の風は、漸次行はれたるものだ。渡邊崋山などの蠻社の如きは、當時に於て、其の重なる一であつた。但だそれが餘りに著明であつた爲めに、遂ひに蠻社事

件を惹起するに至つたのだ。然も嘉永以降に至りては、流石の幕府も滔々たる大勢を支持すること能はず。遂ひに自然に放任するに至つた。此の如くして志士の交通は、一方に於ては天下有志士の糾合となり、他方に於ては各藩聯盟の端緒を來たすに至つた。

【九九】精神的展開

大名と士人との交通

交通は大名相互間、士人相互間に於けるのみでなく、又た大名と士人間にも行はれた。例せば甲藩の士が乙藩の主に知れ、乙藩の士が、丙藩の主に知れたるが如き例は少くなかつた。而して旗本や、浪人などの類も、亦た然りであつた。兎にも角にも、一方に於ては各藩割據の舊態は依然であつたが、此の如く帝國統一の業は、先づ人と人との交通から始つた。事此に至れば、徳川幕府は

對外關係の刺戟

最早徒黨などの名目もて、之を防止することは出來なくなつた。

對外關係は、各個人の間に、種々の精神的刺戟を與へた。彼等は最早日本一國を以て、一世界視する譯には參らなかつた。從來日本を一世界視し、各藩を列國視したる人心は、茲に日本を世界中の一國視せねばならぬことゝなつた。從て各藩を列國視したるものも、亦た世界中の一國たる日本國に於ける、一藩卽一部分たることを、自覺せねばならぬことゝなつて來た。

帝國統一の精神起る

對外關係は、自然に日本人をして帝國統一の精神情態に到らしめた。日本對世界の關係に於ては、最早旗本でもなく各藩士でもなく、唯だ日本たるを自覺し、日本人たるを自覺し、日本國民たるを自覺するの外はなかつた。而してそれは取りも直さず日本を精神的に統一することゝなつた。否な精神的に日本を統一することゝなつた。統一と云うたとて、全く統一し終つたとは云はない。

清國其他の影響

少くとも其の端緒が出來することゝなつた。

清國の亂に對しては、直ちに日本と清國との關係に就て、若しくは清國と列國

と而して日本との關係に就て、或は清國其物の事例に就ての考察を、日本人に促がし來つた。米國船が日本に來れば、日米の問題が國民の頭中に湧き、露船が來れば、日露の問題が、國民の頭中に湧く。其他英と云ひ、佛と云ひ、皆な然らざるはなし。而して其の結果は、臆病者にせよ、元氣者にせよ、強者にせよ、弱者にせよ、何れも皆な日本國を自覺し、日本國民を自覺するの外はなかつた。上方者に對してこそ、江戸兒と云うて威張るも、米國人や、露國人や、英人や、佛人に對しては、江戸兒も、上方者もあつたものではない。薩人も長人もあつた者ではない。

割據の風尚固し

されど二百幾十年來養成し來りたる、各藩割據の風は、必らずしも對外關係にて、一切打破し去るには餘りに其の根柢が深く且つ鞏くあつた。但だ此の割據心が依然存續したるに拘らず、更らに各個人の頭中に、日本人たる自覺と、日本國たる現象が生じ來りたるからには、國體の觀念は固より之に伴隨せねばならぬ。而して國體の觀念が之に伴隨する

必然的尊王愛國心

に際しては、愛國心と尊皇心とは、同時に發生す可きは、當然と云はんよりは、寧ろ必然であつた。

されば嘉永、安政時代に於ては、一通りの教養人士は、本來の愛藩心に加ふるに愛國心を以てし、本來の藩主若しくは將軍に對する忠義心の上に、更らに尊皇的忠義心を以てし、云はゞ彼等は各藩人であると同時に、日本人であり、各藩主の臣下であると同時に、天皇の臣民であることを自覺するに到つた。從て又た各藩士、相互の關係が、日本人たる同一の立場、天皇の臣民たる同一の立場に於て、互ひに協心戮力の動作を促成するに到つた。

外國渡來の影響

天明、寛政、文化の頃までは、如上の精神情態は、唯だ極めて少數なる先見卓識者の間に存した。されど米艦が江戸灣に乘り入りて以來は、苟も普通の教養ある者は、其の濃淡厚薄は姑らく措き、何れも皆な然らざるはなかつた。如何に日本を以て、一世界視せんとするも世界の列國が、日本に出掛けて、其の實物教育を日本に施し來るに於ては、日本も亦た世界列國の一たるに目を鎖ざ

す可くもなかつた。如何に藩主以外に君主あるを知らざる者とても、外國の君主若しくは大統領か、其の代表者を、日本に送り來るに於ては、日本の主權者を、識認せずして止む可きではない。

此の如くして、我が一般の精神情態は一變した。一變と云はんよりも寧ろ展開した。卽ち愛藩心の上に愛國心が生じ、忠藩主心の上に、忠天皇心が湧き出でた。

第十六章　私學勃興

【一〇〇】私塾と新運動

昭和四年一月一日、大森山王草堂に於て、玆に六十七齡を迎へ、前稿を續け成す。祈る所は、此書の明治天皇御宇史までの完成のみ。

＊　＊　＊　＊　＊

學校起る

嘉永、安政の世相は、一面既に江戸時代頽廢期の極度に達してゐる。されど舊制度既に分解し去れば、之に代る可きものゝ新たに發生せざるを得ない譯となる。而して此の新勢力は、何れの邊に頭を擡げんとする乎。そは云ふ迄もなく學校である。官學の本山たる昌平校及び諸藩の官學中にも、それぞれ其の徵候の認む可きもの自から出で來つた。

私塾の特長

然も其の最も著明なるは私學であつた。教育の普及は、日本全國隨處の私學を興隆せしめた。私學卽ち私塾は云はゞ青

年の寄合所であり、其の塾主は、青年團體の長とも云ふ可き資格を具へてゐた。彼等は固より讀書講學、若しくは武術練習を事としたが、周邊の形勢に刺戟せられ、尊皇攘夷、天下國家の問題に接觸し、互ひに相ひ砥礪し、やがては議論のみにて滿足せず、其の實行にさへ取り掛らんとする者を生ずるに至つた。

私塾と時勢との關係

固より私塾にも其類一ならず、中には時勢と沒交渉にて、唯だ舊來の常套を株守したるものもあつた。されど概括して云へば、其の漢學者であり、皇學者であり、蘭學者であり、或は醫學、或は兵學、或は武術、その他各種の專門の私塾、何れも周邊の大勢に感化せられ、やがては彼等亦た其の大勢を感化せずんば止まざらんとするものあるに至つた。

都鄙の有名塾主

孔夫子は、十室の邑、忠信丘が如きものあらんと云うたが、日本全國何れの地方にも、皆なそれ〳〵私塾の主として、若干の青年教育の業に從ふ者あつた。其の塾生の中には固より德川末期の頽廢氣分の產物たる可き者もあつたに相違あるまい。されど新らしき氣分は、自から此中より湧き出でた。都會は人文の焦點であれば、凡有る大家先生を求むるには、何れも都會に赴かざるを得ない。されば都會に於ける私塾、例せば大阪に於ける蘭學者の緒方洪庵、江戸に於ける漢學者の佐藤一齋、安積艮齋の如き、武術に於て、齋藤篤信齋の如き、其の著明なる例である。されど地方にも決して其人乏しくなかつた。水戸に於ける會澤憩齋の如き、大和五條に於ける森田節齋の如き、豐後日田に於ける廣瀨氏咸宜園の如き、肥後に於ける横井小楠の小楠堂の如き、斯る例は幾許にてもある。

輕蔑の擡頭

各藩私學の徒は、凡有る階級から出で來つた。されど概して云へば上士に少く中士以下に多かつた。否な何れの藩にても、私學に輻湊したる者は、士の下級にあらざれば、輕蔑鄕士の徒であつた。而して彼等は何れも德川幕府の階級制度に餘りに多く惠まれず、寧ろ風雲の會を待ちつゝある者共であつたから、彼等が周邊の變化に感染するの敏且つ快であつたことは、決して無理はなかつ

た。

新運動の起る所

勿論上士の中にも、皆無ではなかつた。各藩の中にも、それ〳〵有志者はあつた。肥後の長岡是容、薩摩の小松帶刀、長州の益田彈正の如きは、姑らく其の標本として數ふ可きであらう。然も其の主力とも云ふ可きは、固より中士以下の輕輩にあつた。草莽英雄起ると云へば、餘りに大袈裟であるが、新運動は、此の下士、輕輩、鄕士等の中より生じた。而して新運動の發電所とも云ふ可きは、概して私塾であつた。

模範的私塾

若し其の模範的私塾として、嘉永、安政の時代に於て、擧く可き一あらば、それは吉田松陰の松下村塾であらう。此の塾は、私塾中に於ても、最も眇乎たる一であつた。而して其の存立の年月も、極めて短少であつた。然も其の新運動に於ける効果は、最も偉大であつた。

廣瀨建咸宜園

塾主の行事及著書藏書　塾主廣瀨求馬幼年學に志し、家を弟某に讓り、筑後儒士松下某に從學し、十七歳、筑前の龜井道載久子に從ひ、一年にして歸鄕獨學廿四歳、瓊林莊學舍を市東に開き、童兒を數ゆ。生徒日に集る。乃遷て堀田村に居り、塾を開く。名て咸宜園と云ふ。生徒年を逐て益進む。毎年新に門に入るもの百人内外とす。（中略）

授業大概　生徒の階級を十級に分ち、最初等を無級とし、無級を除くの外、毎級上下二段に區別し、合計十九段とし、四級上以下を下等生とし、五級下以上を上等生とす。（上等生の内、七級下以上を上の上とし、六級以下を上の下とす）而して下等生は專ら輪讀、輪講、會講等に從事せしめ、毎會頭（上等生を以て之に充つ）を置き、其優劣を判し、之に相當の點を與へ、其點數に因て階級を進む。上等生は一月の内二日を書會とし、（楷書にて七行十六字太平廣記を寫さしむ）三日を句讀切とし、二日を詩會とし、二日を文會とす。名づけて試業と云ひ、香三線を限りて之をなさしむ。毎會監督あり（七級以上の生徒之に充る）之が取締をなし、師匠自ら其巧拙を評し、又相當の點を付し、其點數に因て昇級せしむ。而して上等生に限り、別に消權と云ふものあり。經書は講ぜしめ、歷史は暗記せしむ。各級豫定の書籍あり、尤も五級生は都講之を檢し、六級以上は師匠之が審査をなす。譬へば六級上より七級下に進むに、其進むべき相當の試業點あるも、該階級に當る書籍の講義、或は暗記を了せざれば之を權とす。故に其講義暗記をなすを以て、權を消すと云ふ。已に權七級下に進むも尙消權をなさずして、又七級上に至るときは、二權とし、又八級下に達するときは三權とす。三權以上は、試業即ち前の諸會に臨むを許さず。消權を專務とせしめ、其權を消却するの後、再び試業に臨ましむ。林外の晩年四級下より四級上に移るとき（下等生なれども）蒙求を暗記

するの一科を加へたりと云ふ。（日本教育資料）

【一〇一】松下村塾

私學の尤なるもの

嘉永、安政の間に於ける世相中にて、最も見逃し難き一は、日本全國に於ける私學であることは、既記の通りだ。（參照　一〇〇）而して若し其の時代に於ける私學の尤なるものを擧ぐれば、吉田松陰の松下村塾であらう。此れは私學として、其の物質的充實からではない、其の精神的効果の甚だ昭著なる點から見てである。

松下村塾起る

吉田松陰の安政元年三月廿七日、下田港に於て、彼理提督の船に乘り、外國に赴かんとしたる失敗に就ては、既記の通りだ。（參照　神奈川條約締結篇　五一―五八）爾來

彼は四月十五日下田より江戸傳馬町の獄に送られ、同年九月十八日罪案定まり、十月二十四日、其の本藩長門萩なる野山の獄に下り、安政二年十二月十五日出獄家に錮せられ、翌三年七月蟄居中、家學を授くるの許可を得、松下村塾に主となつた。同五年十二月五日、再び野山投獄の命に接する迄、其間二年半、前後を通算するも、三年内外であらう。

松下村塾の由來

元來松下村塾は、萩城の東方に位する城下つづきの郊邑にて、松陰の父の弟玉木文之進に創まり、玉木就官の後、松陰の外叔久保氏之を襲ひ、以て松陰に至つた。而して其の塾舍と稱す可きは、松陰の實家杉氏邸内の八疊一間、それに建て增したるものが、十疊半に過ぎなかつた。それは今日でも現存してゐるが、とても此れが天下に名ある松下村塾とは、想像もつかぬほど見すぼらしきものである。

松下村塾の偉大

併しながら物質的には如何に眇小でも、精神的には極めて偉大であつた。何となれば村塾に於て、始めて教育の主義と時代精神とが、相ひ契合したからだ。

即ち教育が徒らに因襲に囚れたる紋切形の空文でなく、舊き殼を破りて新たなる面目を打出せんとする氣運に照應したからだ。

松下村塾の記

松陰は安政三年丙辰九月松下村塾の記を作りて曰く、

余曰、學、學レ所ニ以爲ヲ人也。……抑人之所ニ最重一者君臣之義也。國之所ニ最大一者華夷之辨也。今天下何如時也。君臣之義不レ講六百餘年。至ニ近時一合ニ華夷之辨一而又失レ之。然而天下之人、方且安然爲レ得レ計。生ニ神州之地一、蒙ニ皇室之恩一、内失ニ君臣之義一、外遺ニ華夷之辨一、則學之所ニ以爲ヲ學、人之所ニ以爲ヲ人、其安在哉。

學問と實際との一致

讀んで此に至れば、學問と實際とが、殆んど全く一致したるを見る。即ち彼の教育は記誦詞章でもなく、性命理氣でもなく、全く尊皇攘夷であつた。君臣の義は尊皇であり、華夷の辨は攘夷である。而して彼は更らに其の記文の中に於て曰く、

長門雖ヲ僻在ニ西陬一、其奮ニ發天下一、而震ニ動四夷一、亦未レ可レ量也已。

一般世上と反對の場所

と。此れは彼の理想であつた。即ち彼は松下村塾に由りて、天下を動さんと欲し、而して遂ひに能く天下を動した。

江戸に於ては、旗本の子弟等は其の極めて少數者を除けば、空々寂々遊藝に耽り、駄洒落を事とし、徳川幕府が其の中心より既に腐敗し、自然の分解作用を始めつゝあるに氣付かず、醉生夢死しつゝあるに引き代へ、江戸風の吹き荒らさない長門の偏陬に於ては、却て尊攘の大義を大眼目として、子弟を教養するものがある。實に世は樣々である。而して此の樣々である所が則ち徳川幕府に於て仕組まれ、且つ支持せられたる諸藩割據の賜であつた。

封建制度の餘惠

勢極れば通ず。舊物の分解は、新物の組織となる。此の一點から見ても斯る教育主義が出で來る可きである。然もその發生を便ならしめたる理由の一は、實に所謂る封建制度の餘惠と云はねばならぬ。若し全國の武士をして、悉く旗本同樣の氣分たらしむるに於ては、松下村塾の如きものを見出すには頗る困難であつたと云はねばならぬ。されど江戸の腐敗は、幸にも江戸だけの腐敗

に止まり、全國に於ては必らずしも少しも其の影響を被らなかつたとは云はぬが、極めて僅少であつた爲めに、隨處に新興動力が擡頭し來つた。松下村塾の如きは、其の標本の一にして、且つ最も重なる一であつた。

【一〇二】松下村塾の教育法

攘夷論と眞甲振興し

凡有る學問研究の上、遂ひに尊皇攘夷の論に歸著するものと、尊皇攘夷を眞甲に翻して、之を以て自から振ひ、之を以て子弟を教養するとは、頗る趣を殊にしてゐる。松下村塾の教育は前者でなく、後者であつた。尊皇攘夷は、村塾教育の歸著點ではなく、發足點だ。行きつく先でなく、此からの踏み出しだ。既に此からの踏み出しとすれば、其の向ふ所は、尊皇攘夷の實行より他はあるまい。此の如くして松下村塾の教育は、正しく尊攘主義實行の學問となつた。

形式主義の幕府制度

而して既に實行となれば、それに相應する人物を養成せねばならぬ。卽ち此の人物養成が、松下村塾最後の目的と云ふ可きものであつた。

幕府の制度は、個人も、社會も、盡く鑄型の中に容れた。隨て世の中が形式的となり、その中に活動す可き各個人が、亦た形式的となつた。要するに幕府制度の極意は、社會を物體化するのみならず、社會人をも物體化せんとした。而して江戸の旗本から、諸藩の武士まで、正しく其の注文通りに出來上りつゝあつた。而してそれに對する反抗が松下村塾であつた。勿論その反抗は、隨處に露出した。然も其の最も痛快なる、而して鮮明なる標本は、實に松下村塾であつた。

その反抗者

村塾禮法を寛略にし、規則を擺落す。以て禽獸夷狄を學ぶに非らざる也。以て老莊竹林を慕ふに非らざる也。特に今世禮法末造、流れて虛僞刻薄と爲り、誠朴忠實以て之を矯揉せんと欲する已。新塾の初めて設くるや、諸生皆な此道に率ふて以て相交る。疾病艱難相ひ扶持す。力役事故相ひ勞役す。

手足の如く然り、骨肉の如く然り。增塾の役、多く工匠を煩はさずして、乃ち能く成る有るもの、職として是れ之に由る。〔原漢文〕

直ちに赤心相照

此れは松陰が自から記せる文の一節にして、正しく其通りであつた。要するに松下村塾の教育は、師弟相互間、赤裸々の接觸であつた。今日から見れば、未だ青年にも達せざる童子を相手として、天下國家を談ずるなど、如何にも調子外れたる樣であつたが、然も松陰は、直ちに己れの赤心もて、他の赤心と相照した。

岡田耕作に示す

正月二日（安政五年戊午）岡田耕作至る。余爲めに孟子を授け、公孫丑下篇を讀み訖る。村塾の第一義、閭里禮俗を一洗して戈を枕にし、槊を横ふるの風と爲すに在り。是を以て講習除夕を徹して、未だ嘗て放學せざる也。何如んぞ年一たび改まり、士氣頓に弛むや。三元の日來りて禮を修むる者あり、未だ來りて業を請ふ者を見ず。今ま羅使（米國ハリス）府に入り、義士獄に下る。

松陰と品川彌二郎との問柄

天下の事迫る矣。何んぞ除新有らむ。然り而して松下の士猶皆な此の如し。何を以て天下に唱へむ。耕作の至る、適ま群童の魁と爲す。群童に魁たるは、乃ち天下に魁たるの始め也。耕作年甫十齡、厚く自ら激厲せば、其の前途、寧ろ測る可ん哉。書して以て之を勵ます。

惟ふに十歲と云へば、今日の小學兒童だ。その者に向て、斯る激勵の辭を與ふるなどとは、現代の教育家は勿論、誰しも夢想だも及ばぬことであらう。然も松陰は眞面目に這般の教育を施した。此れは決して岡田耕作に對するばかりではなかつた。總ての塾生に對して、皆な同一の筆法を用ひた。

彌二（品川彌二郎）の才、得易からず矣。年稚と雖も、學幼と雖も、吾の相待つ則ち長者に異ならざる也。何如契濶乃ち爾り。時勢切迫、豈に內自ら懼るる者有る邪。抑〻も己れ自から立ち、吾の論に於て與せざる有る邪。逸遊敖戲、學業を荒廢す、則ち彌二の才、決して然らざる也。說有れば則ち已む、說無ければ則ち來れ。三日を過ぎて來らずんば、彌二は吾が友に非る也、去る者

は追はず、吾が志決す矣。

是等も前掲と同一の筆法だ。而して此れが松下村塾の教育法であつた。彼の教育は實學と云ふばかりでなく、實行學であつた。

【一〇三】松下村塾教育の効果

實行家養成

松下村塾の教育は、主として實行家を養成するにあつた。實行家とは其の理想を直ちに實行するもののことだ。松陰の赤穗義士を詠じたる歌に、

かくすればかくなるものとしりながらやむにやまれぬ大和魂

と、彼は「此のやむにやまれぬ大和魂」の教養を以て、其の子弟に對した。而して當時の時務に於て、寧ろ必須なるは、實に這般の人物であつた。されば松下村塾の教育法は、宛も此の必須なる人物を目的として養成するにあつたものと云はねばならぬ。

松陰教育の効果

松陰は決して職業的教育者ではなかつた。彼は唯だ自から期したる所を以て、子弟を期し、自から待ちたる所を以て、子弟を待ちたるまでであつた。而して其の効果は當人が時勢に魁たる一人物であつた如く、其の門生も亦た時勢の先驅者たる可きものを養成し來つた。敢て悉く是なりと云はぬが、其の二年半に足らざる短き歳月と、其の數十名と云はんよりも、寧ろ十數名と云ふ可き少人數の門生としては、實に非常なる好成績であつた。

松陰身邊の優秀

彼の教養は必らずしも鐵を點じて金となし、瓦を變じて珠となすものではなかつた。如何に他を感憤興起せしむる能力ありとて、とてもそれだけの事は出來なかつた。但だ彼の身邊には、少年氣鋭の秀才が群集した。久坂義助の如き、高杉晋作の如きは、其の標本であつた。而して彼は能く是等の秀才をして、啓發、長進せしめた。苗は固より善き苗であつた。されど之をして秀でしめたのは、實に彼の力であつた。

塾生の砥礪

江戸の眞中には、尙ほ德川幕府の舊習の汚濁雰圍氣中に醉生夢死する幾多の青年壯年もて充滿しつゝある際に、日本海に瀕する、中國の西端なる邊陬には、既に維新回天の氣分磅礴する少年子弟が、僅かに膝を容るゝ塾舍の中に於て、此の先生と頻りに講習討論してゐた。安政五年六月十九日附にて、松陰が、其の長防第一の秀才と目したる門人久坂義助の江戸に在るに與へて、近況を報じたる書に曰く、

伊佐塾にて頻に讀む樣子なり。茂十郎山口へ行留守中也。正亮九州より戻り大に叱る故、頗る憤勵の機あり。來原姪岡部は兄の品鑑の如し。福原一向不來、近來の勉强家は、岡部の外、有吉熊次郎、木梨平之允等也。中井の姪の由、天野清三郎中々奇物、他人未深取一、僕獨愛之。藝生富樫文周頻に讀むなり。此五生皆寄宿、提山坊主大に進む。利輔亦進む。中々周旋家になりさうな。南は館中にて勉强の由、山根も定めて勉强ならん、兄去後山根は兩三度來る。南は絶て不來。人各有志、兄決勿强人。……直入も折々塾に來て、飯を炊て宿する組の者中の奇男子也。可愛。

利輔亦進む

とある。此中「利輔亦進む、中々周旋家になりさうな」とあるは、正しく明治天皇御宇の元勳伊藤博文を斥す。又た同年同月二十八日久坂に與へたる書中に、

米春ながら會讀

病肺の事、最早昔話に御座候半。御案じ被下間布候。此節大暑中に候得共、甚壯なり。隔日左傳八家會讀、勿論塾中常居七つ過會讀終る。夫より畠又は米春、與在塾生同之、米春大得其妙一大抵兩三人同じく上り、會讀しながら春之。史記など二十四五葉讀む間に米精け畢る。亦一快なり。（原註）口羽に話候へば、をかしい事計りする男といふた。

村塾徹宵の談

とある。彼は又た安政六年三月、福原又四郎に野山の獄中より復する書中に、

實甫、無窮の輩、今叛き去矣と雖も、嘗て一たび之を叩け。蓋し未だ村塾爐を圍み、宵を徹するの談を忘れざるべき也。

と云うてゐる。此を以て見ても、村塾徹宵の談が、何事であつたかゞ想ひやらるゝ。宛も天下の大都會を不夜城たらしむる電光の原力が、深山幽谷の中よ

り出で來る如く、維新回天の動力も、亦た然りとする。豈に啻だ松下村塾のみならんや。唯だ其の重なる一個の標本として、此を擧げたるのみ。

昭和四年一月初八午前七時大森山王草堂に於て蘇峰六十七叟。時に予四十年來予の心身を投沒したる國民新聞を去らんとす。胸中頗る多事、筆意の如くならず。漸く力めて之を書き了る。而して自から小量に慚づ。

近世日本國民史 孝明天皇初期世相篇 終

孝明天皇初期世相篇 年表並人物概覽

其一 年表

明和七庚寅年 西暦1770年 支那乾隆卅五年

是歳 大久保今助江戸に出づ。【六】

安永五丙申年 西暦1776年 支那乾隆四十一年

二月 米澤藩興讓館成る。【一九】

五月 細井平洲上杉氏に聘せられ米澤に赴く。【一九】

安永七戊戌年 西暦1778年 支那乾隆四十三年

五月廿七日 上杉氏藩學興讓館生の申出により詩會に賜はる酒類を減じて月に一度とす。【一九】

天明元辛丑年 西暦1781年 支那乾隆四十六年

是歳 龜井道載肥後物語成る。【一八】

天明三癸卯年 西暦1783年 支那乾隆四十八年

正月 唐來參和通神孔釋三教色出づ。【四三】

是歳 桂川甫周萬國圖說、林子平三國通覽圖說成る。【二四】

天明六丙午年 西暦1786年 支那乾隆五十一年

是歳 林子平海國兵談、志筑忠次郎火器發法傳、朽木昌綱西洋錢譜、森島中良紅毛雜話成る。【二四】

天明八戊申年 西暦1788年 支那乾隆五十三年

二月　會津藩主松平容頌大に土工を起し、藩校を改築す。【二〇】

是歳　大槻玄澤蘭學階梯、蘭說弁惑成る。【二四】

寛政元己酉年　西暦1789年　支那乾隆五十四年

是歳　森島中良萬國新話成る。【二四】

寛政二庚戌年　西暦1790年　支那乾隆五十五年

九月　初代川柳翁柄井八右衛門死す。【五〇】

是歳　前野良澤和蘭築城書を譯述す。【二四】

寛政三辛亥年　西暦1791年　支那乾隆五十六年

正月二十日　肥後の人古屋重次郎會津藩に召されんとす。幕府の儒者岡田寒泉等之を阻止せんとして成らず。【二〇】

寛政五癸丑年　西暦1793年　支那乾隆五十八年

是歳　桂川甫周魯西亞誌、司馬江漢地球全圖略說成る。【二四】

寛政六甲寅年　西暦1794年　支那乾隆五十九年

閏十一月十一日　大槻玄澤等新元會を催す。【二四】

寛政七乙卯年　西暦1795年　支那乾隆六十年

是歳　司馬江漢の和蘭天說、本多利明の經世秘策成る。【二四】▲高橋東岡幕府天文方となる。【二五】

寛政八丙辰年　西暦1796年　支那嘉慶元年

是歳　稲村三伯彼留麻和解を作る。▲司馬江漢和蘭天地球圖を出版す。【二四】

寛政九丁巳年　西暦1797年　支那嘉慶二年

是歳　大槻玄澤磐水夜話、廣川龍淵長崎聞見錄、平野善兵衛西洋量地術和解、大原左金吾北地危言成る。【二四】▲廣重生る。【四九】

寛政十戊午年　西暦1798年　支那嘉慶三年

是歳　大槻玄澤重訂解體新書成る。【二五】

寛政十一己未年　西暦1799年　支那嘉慶四年

是歳　司馬江漢西洋畫談を著はす。また是歳の頃石井庄助遠西宜器考を譯述す。【二五】

寛政十二庚申年　西暦1800年　支那嘉慶五年

是歳　伊能忠敬全國測量を開始す。【二五】▲山東京傳口中の不蠱鏡甘哉名利研成る。【四一】

享和元辛酉年　西暦1801年　支那嘉慶六年

是歳　志筑忠雄鎖國論成る。【二五】

享和二壬戌年　西暦1802年　支那嘉慶七年

是歳　山村才助訂正增譯采覽異言成る。【二五】▲東海道膝栗毛初篇出づ。【四四】

享和三癸亥年　西暦1803年　支那嘉慶八年

是歳　會津藩日新館童子訓を著はす。【二〇】▲高橋東岡暦書管見成る。【二五】▲東海道膝栗毛後篇成る。【四四】

文化元甲子年　西暦1804年　支那嘉慶九年

是歳　島津氏の成形圖說農事、五穀、菜蔬の部刊行せらる。【二五】

文化二乙丑年　西暦1805年　支那嘉慶十年

是歳　宇田川玄眞醫範提綱成る。【二五】

文化三丙寅年　西暦1806年　支那嘉慶十一年

是歳　山村才助魯西亞國志成る。【二五】

文化四丁卯年　西暦1807年　支那嘉慶十二年

是歳　大槻玄澤等の環海異聞成る。【二五】▲幕府地誌御用局を設け高橋作左衛門に萬國全圖を作らしむ。【二五】

文化五戊辰年　西暦1808年　支那嘉慶十三年

是歳　大槻玄澤銃法起原考、扇馬譯說出版。佐藤淵信西洋列國史略、間宮林藏東韃紀行成る。醫範提綱附圖成る。【二五】

文化六己巳年　西暦1809年　支那嘉慶十四年

二月　幕府長崎通詞六人を擇び英語を學ばしむ。【二五】

十月　幕府通詞のものどもに英露國語兼修を命ず。【二五】

是歳　東海道膝栗毛八篇成る。【四四】

文化七庚午年　西暦1810年　支那嘉慶十五年

是歳　藤林泰助譯鑑、高橋作左衛門萬國全圖成る。【二五】▲金毘羅參詣續膝栗毛初篇成る。【四四】

文化八辛未年　西暦1811年　支那嘉慶十六年

五月　天文方に蠻書和解御用局を設け、馬場佐十郎、大槻玄澤を譯員とす。▲蘭人ツーフ等のハルマ字引和解成る。【二六】

九月　通詞本木莊左衛門、楢林榮左衛門、吉雄權之助等をして英吉利言語集成を譯述せしむ。【二六】

是歳　吉雄英和對譯辭書、本木諳厄利亞興學小筌等出で來る。【二六】▲廣重歌川豐廣の門に入る。【四九】

文化九壬申年　西暦1812年　支那嘉慶十七年

是歳　廣重始めて其師歌川豐廣より廣重の名を賜はる。【四九】

文化十癸酉年　西暦1813年　支那嘉慶十八年

是歳　幕府馬場佐十郎、足立佐内等を松前に遣り、俄囚露人ゴローウィンに就き露語を學ばしむ。【二六】

文化十一甲戌年　西暦1814年　支那嘉慶十九年

六月　是より先き本木、楢林等に命じ置きたる諳厄利亞語林集成成る。【二六】

文化十二乙亥年　西暦1815年　支那嘉慶二十年

是歳　杉田玄白蘭學事始を作る。【二六】

文化十三丙子年　西暦1816年　支那嘉慶二十一年

是歳　幕府ヅーフのハルマ辭書を呈進せしむ。【二六】▲大槻玄澤の接痘篇成る。【二六】

文政四辛巳年　西暦1821年　支那道光元年

七月　伊能忠敬大日本沿海實測地圖、同實測錄完成し幕府に獻ず。【二七】

文政五壬午年　西暦1822年　支那道光二年

是歳　上州草津道中續膝栗毛成る。【四四】

文政六癸未年　西暦1823年　支那道光三年

八月　シーボルト來朝す。【二七】

文政八乙酉年　西暦1825年　支那道光五年

五月　吉雄忠次郎諳厄利亞人性情志譯成る。【二七】

十月　遣厄日本記事成る。【二七】

十二月　青地林宗氣海觀瀾成る。【二七】

文政十一戊子年　西暦1828年　支那道光八年

十　二　月　シーボルト事件起る。【二七】

文政十二己丑**年**　西暦1829年　支那道光九年

是　歳　宇田川玄眞、大槻玄幹等厚生新編和解の經過を幕府に報告す。【二七】

天保元庚寅**年**　西暦1830年　支那道光十年

十一月十日　坪井信道大阪なる岡研介に書を與へ江戸洋學者の俗臭紛々たることを告ぐ。【二八】

天保二辛卯**年**　西暦1831年　支那道光十一年

是　歳　伊東玄朴肥前鍋島家醫員となる。【二八】

天保三壬辰**年**　西暦1832年　支那道光十二年

九　月　高野長英居家備用成る。【二八】

是　歳　爲永春水の梅暦成る。【四七】▲寺門靜軒江戸繁昌記初篇出版。【五二】

天保四癸巳**年**　西暦1833年　支那道光十三年

二　月　青地林宗死す。【二八】

三　月　水戸藩幡崎鼎を聘し鑄砲造船書の譯述に從事せしむ。【二八】

天保五甲午**年**　西暦1834年　支那道光十四年

是　歳　江戸繁昌記二篇三篇出版。【五二】

天保六乙未**年**　西暦1835年　支那道光十五年

是　歳　江戸繁昌記四篇出版。【五二】

天保七丙申**年**　西暦1836年　支那道光十六年

三月十三日　東海道川崎宿に於て一橋家の士鍋島氏の關札破棄の一件あり。【一二】

是　歳　帆足萬里窮理通を著す。【二九】▲江戸繁昌記五篇出版。【五二】

天保八丁酉**年**　西暦1837年　支那道光十七年

二　月　大鹽平八郎暴動一件起る。【二九】

是　歳　山路彌左衛門西暦新書譯成る。【二九】

天保九戊戌**年**　西暦1838年　支那道光十八年

是　歳　和蘭甲比丹英船モリソン號の來航を豫告す。【二九】

天保十己亥**年**　西暦1839年　支那道光十九年

十　二　月　幕府蘭法醫師に告諭し、奇異の說を唱ふるなからしむ。【二九】

是　歳　蠻社遭難事件起る。【二九】▲京都新宮涼亭順正書院を建つ。▲箕作阮甫天文臺譯員となる。【二九】

天保十一庚子**年**　西暦1840年　支那道光二十年

九　月　高嶋秋帆西洋砲術意見書を上る。【三〇】

十　一　月　澁川六藏英文鑑を譯述す。【三〇】

是　歳　杉田成卿天文臺譯員となる。【二九】▲萩藩醫員青木周弼建議して醫學所を設く。【三〇】

天保十二辛丑**年**　西暦1841年　支那道光二十一年

五　月　高嶋秋帆德丸原に於て西洋砲術操練を行ふ。【三〇】

十二月廿九日　是より先き中本作者爲永春水、板元丁子屋平兵衛等、町奉行所に出召され吟味せらる。今日右板木五車程差出さしめらる。【四七】

天保十三壬寅**年**　西暦1842年　支那道光二十二年

正　月　是月下旬中本作者春水等一件また吟味せらる。【四七】

二　月　五　日　右中本板元家主に預けられ、作者春水

手鎖命ぜらる。【四七】

三　月　諸所の岡場所茶屋新吉原に移轉を命ず。【五八】

四　月　中本板元預り御免。【四七】

六月十一日　中本一件落著。【四七】

是　歳　戸塚靜海島津氏の醫員となる。【三〇】▲青木周弼好生館を設く。【三〇】

天保十四癸卯年　西暦1843年　支那道光二十三年

七月六日　納戸頭羽倉外記大阪商人鴻池屋善右衛門、加島屋久兵衛等を召し御用金を命ず。▲十七日。今日また右商人等廿一人を召し用金額を指定す。【六四】▲廿二日。鴻池屋善右衛門、加島屋久右衛門、加島屋作兵衛等の用金額を定む。▲廿三日。鴻池屋市兵衛等の用金額を指定す。▲廿八日。播磨屋仁兵衛以下約百名の御用金額を指定す。【以上六四】

八月九日　大阪商人平野屋茂右衛門等百十一人の用金額を指定す。▲十六日。錢屋佐一郎等用金額を指定す。【以上六四】▲融通方大兩替請書提出、三井八郎右衛門、住友茂兵衛兩人は御用金を斷りて献納金とし、鴻池屋新十郎、近江屋休兵衛は御用金を免ぜられ差加金とす。是より請書提出者相接す。【六五】

九月十七日　御用金を賦課せられたる大阪商人一同西役所に召出され、請印帳に捺印。【六五】

閏九月十四日　大阪融通方、大兩替方十六名に臨時掛屋を命じ、御用金納入を扱はしむ。【六五】

十月上旬　大阪御用金差加金、献金年割額を江戸に納入す。【六五】

是　歳　佐藤泰然佐倉に順天堂を建て、象れて

蘭學を教授す。【三〇】

弘化元甲辰年　西暦1844年　支那道光二十四年

十二月廿四日　江戸中寄場勝手次第御免になり、忽ちにして數百軒の寄場出來す。【五九】

是　歳　和蘭國王の日本開國忠告書來る。【三〇】▲箕作省吾、坤輿圖識成る。【三〇】

弘化二乙巳年　西暦1845年　支那道光二十五年

三　月　江戸町奉行遠山景元問屋再興意見書提出。【六六】

四月廿三日　後藤三右衛門評定所に召出され、家財殘らず封印付となさる。【七】

十　月　二　日　すはり夜鷹と稱し切見世出すもの取拂ひ命ぜらる。【五八】▲三日。後藤三右衛門死刑の宣告を受く。【七】

弘化三丙午年　西暦1846年　支那道光二十六年

七　月　寄合筒井政憲書を阿部老中に呈し、江戸町人救助の意見を陳じ、問屋再興に及ぶ。遠山景元また意見を添へ、問屋再興を述ぶ。【六六】

是　歳　鈴木春山の三兵活法譯成る。▲池部啓太萬勳歸一成る。【三一】▲江戸市中寄場愈盛になる。【五九】

弘化四丁未年　西暦1847年　支那道光二十七年

是　歳　緒方洪菴病學通論、藤井三郎舶砲新編、杉田成卿煩瞰用法成る。【三一】▲江戸大火あり、春夏の間市人鳴物を慎む。秋に至り緩む。冬に入り歌舞妓芝居大形となる。【五九】

嘉永元戊申年　西暦1848年　支那道光二十八年

八月十九日　町女藝者御觸發布。是より世人藝者公許せられたりとて遊里演藝大に流行。

【五八】

九月十六日　是よりさき江戸中普曲盛に流行、今日歌舞妓役者璃鶴演藝中に捕へられ、席主と共に處罰せらる。【五九】

是歳　宇田川興齊和蘭律書、案罪斷罪成る。【三一】▲無是公子の洋外通覽、安積艮齋の洋外紀略、長山樗園の西洋小史、出て來る。▲川本幸民寫眞鏡用法を唱出し、本木昌造等鉛製活字板を和蘭より購入す。【三一】▲安房新砲臺成る。會津侯巡見。【六二】

嘉永二　己酉年　西暦1849年　支那道光二十九年

二月　幕府御用醫師に蘭法を禁止す。【三一】

七月　和蘭船牛痘苗を齎らし來る。【三一】

十月　肥後米俄に百目を超え小賣相場上る。【六七】

十二月　大坂堂島市場にて帳合米相場潰しを見る。【六七】

是歳　葛飾北齋死す。【四九】

嘉永三　庚戌年　西暦1850年　支那道光三十年

二月　大坂三郷町々惣代火消年番町より錢相場に就き嘆願書提出。仍つて柴田康直、中野長風連名にて、當分自然の相場にて賣買すべく、又前令同樣兩替屋以外に取引するを嚴禁せらる。【六七】

八月八日　今日大雹雨あり。【九四】▲此月米價大に騰る。【六七】

九月　幕府蘭書反譯取締令を出す。【三二】▲米價益騰貴す。無賴漢を使嗾し、相場を潰さんとするものあり。▲官府錢の買上をなす。【以上六七】

十月四日　大坂米市場騷動起る。▲廿二日。米價更に騰貴、上下大に苦しむ。【以上六七】

十一月　酒價騰貴。【六七】▲米價愈〻高し。【六八】▲この月十三日。窮民賑恤の爲大阪町人別調べをなす。【六八】

十二月　江戸錢拂底、疊表問屋等大阪より錢を購入し、貸下に著手す。▲中旬。大阪にて御拂下米麥廉價販賣開始、是より米價漸く下落す。【以上六八】

是歳　江川英龍反射爐を韮山に築く。▲鍋島直正同じく反射爐を佐賀に築く。▲箕作阮甫歐洲史會を起す。▲杉田玄端地學正宗、上田帶刀西洋砲術便覽、高野長英三兵答古知幾等成る。【以上三一】

嘉永四　辛亥年　西暦1851年　支那咸豐元年

三月九日　江戸問屋組合再興令を發す。▲廿一日。大阪問屋組合再興令を發す。【以上六六】▲二月下旬より今月にかけ米價漸次下落。【六八】

六月　川路聖謨大阪東町奉行となる。【六八】

八月　島津齊彬製煉所を鹿兒島に設け、化學應用の諸器を製造す。【三二】

九月　水戸齊昭藩醫柴田方庵に驗溫器を造らしむ。【三二】▲大阪米價逐次下落。【六八】

十月　大阪三郷町中總代、火消年番寄より西町奉行本多安英に上書し、去秋以來の勞を謝し、その永く在勤せんことを乞ふ。【六八】

十一月　東町奉行川路聖謨右願書を却下す。【六八】

是歳　横井小楠上國漫遊の途備前岡山藩の學校を觀る。【一七】▲佐久間象山江戸に於て新砲術一流を立つ。又其著蘭學圖編成る。▲手塚律藏海防火攻新覽、上田亮章鈐林必携、箕作阮甫八紘通誌、牧穆中風船問答、川本幸民氣海觀瀾廣

義等成る。▲浦賀奉行淺野長祚西洋式砲臺を築く。【以上三二】

嘉永五壬子年　西暦1852年　支那咸豐二年

五月二十二日　江戸城西丸燒く。【六九、九四】▲是月。幕府大森海岸に大砲演習場を設く。【三二】

七月下旬　近畿大風雨出水あり。米價また騰る。【六八】

十月　米價益々騰る。官府仲買者の多額の買注文引請と酒造家の一時買入とに注意を發す。【六八】

是歳　渡邊以親八圓儀を用ひて彈道測量法を唱說し、阿弧丹度用法圖說を著はす。又武田斐三郎用礮軌範、箕作阮甫、杉田成卿同譯の軍用火箭考、廣瀨元恭の理學提要等出で來る。【以上三二】

嘉永六癸丑年　西暦1853年　支那咸豐三年

六月　米使彼理來る。【三二】▲二十二日。將軍家慶薨ず。【七八】

七月二十二日　將軍家慶の喪を發す。【七八】

八月四日　家慶を芝增上寺に葬る。【七八】▲是月。高島秋帆赦免せらる。【三二】

九月　大船製造許可。【三二】

十月　和蘭甲比丹に軍艦兵書等の注文を出す。【三二】

十一月五日　大阪西町奉行石谷穆清三郷富商を召し上納金を諭示す。【六九】▲十七日。掛繦年寄薩摩屋仁兵衛、上納金納入に對し諭示す。▲惣年寄仁兵衛更に諭示を發す。【以上七〇】▲此月。土佐人中濱萬次郎を擧げて幕府の小吏とす。【三二】

十二月二日　大阪與力内山彦次郎上納金に就き嚴諭を發す。【七一】

是歳　箕作秋坪、市川齋宮等天文臺譯員に補せらる。【三二】▲通航一覽成る。▲村田恒光六分圓儀量地手引草、市川齋宮訳西式器略記、鶴峰戊申米利堅新誌、荒木寡之進暎咭利紀略出で來る。【以上三二】

安政元甲寅年　西暦1854年　支那咸豐四年

正月十四日　米使彼理再來。【七九】▲此月中旬。大阪與力内山彦次郎再び上納金指名者を集め諭告す。【七一】

二月上旬　上納金指名者屆書提出を終る。【七一】

三月廿七日　吉田松陰米艦に乘り米國に赴かんとして果さず。【一〇一】

四月六日　禁裏炎上。【一〇一】▲十五日。吉田松陰下田より江戸傳馬町の獄に送らる。【一〇一】

五月　浦賀にて製造したる鳳凰丸成る。【三三】

七月一日　大阪東西町奉行上納金指名者一同を召し、上金及追增金出精を嘉し、其納入方法につき諭示す。【七一】

九月十八日　吉田松陰罪案定まる。【一〇一】

十月廿四日　吉田松陰萩野山の獄に下さる。【一〇一】

十一月四日　伊豆下田大地震。【八四】▲露船下田に破船し、遂に戸田港に於て新船製造に着手す。【三三】

十二月八日　今日以後大阪上納金納入者納入手續を了る。【七一】

是歳　島津齊彬造船所を櫻島に設く。▲杉田成卿砲術訓蒙成る。▲松代藩醫村上英俊三語便覽を著はす。▲小關高彦合衆國小誌成る。【以上三三】▲木村軍太郎、柴田牧藏天文臺譯員に補せらる。【三

安政二乙卯年　西暦1855年　支那咸豐五年

正　月　幕府天文方蕃書和解御用局を獨立せしめ、九段坂下に洋學所を建つ。【三四】

二　月　幕府新に講武所を建て砲術を西洋流とす。【三四】

三月六日　幕府梅林門内金藏に盗あり、三千兩餘盗み去らる。【九四】▲是月。島津氏新造船昇平丸品川に入る。【三四】

六　月　和蘭より蒸氣船を贈進し、海軍傳習所を長崎に設く。【三四】

十月二日　江戸大地震。【八五】▲梵鐘を以て大砲を鑄造する件につき指令を發す。【八七】▲三日餘震頻々。【八六】

十二月十五日　吉田松陰出獄。家に錮せらる。【一〇一】

安政三丙辰年　西暦1856年　支那咸豐六年

二　月　幕府洋學所を改めて蕃書調所となす。【三四】

五　月　水戸藩の旭丸成る。【三四】

七　月　吉田松陰蟄居中家學を授くるを許され松下村塾主となる。【一〇一】

安政四丁巳年　西暦1857年　支那咸豐七年

正　月　蕃書調所開校式を擧ぐ。【三五】

三　月　和蘭献上の蒸氣船觀光丸江戸灣に入る。【三五】

四　月　海軍教授所を築地講武所内に新設す。【三五】

五月十三日　昨年三月幕府金藏に入れる盗を禁刑に處す。▲此月阿部正弘病む。【九三】

閏五月九日　阿部正弘今日以後出仕せず。【九三】

六月十七日　阿部正弘逝去。▲廿七日。阿部正弘の喪を發す。【以上九三】

七月三日　阿部正弘葬儀執行。【九三】

十　月　長崎奉行所に於て鉛製活字を用ひ横文諸書を印行す。【三五】

十二月　問屋組合冥加金銀上納に關する令を出す。【六六】

是　歳　蘭法醫伊東戸塚等相謀つて種痘館を神田お玉ケ池に建て、兼ねて蘭法醫學講習の場とす。▲大野藩士廣田憲寛の增補課鍵成る。▲昨年支那にて出版せられたる航海金針薩摩にて飜刻せらる。【以上三五】

安政五戊午年　西暦1858年　支那咸豐八年

七　月　將軍家定病む。伊東玄朴、戸塚靜海等幕府の侍醫となる。【三五】

八　月　越前大野藩の新造船大野丸品川に入る。【三五】

十二月五日　吉田松陰再び野山投獄の命に接す。【一〇一】

其二　人物概覽

【ア行】

ア

青木周弼　文政天保時代當揭出。【三〇】

青木文藏　名は敦書、字は厚甫、昆陽と號す。江戸日本橋小田原町に生る、やゝ長じて京都に至り、伊藤東涯に學び、經史に通じ、殊に實學を貴ぶ。嘗つて甘藷栽植の事を建言し、大岡忠相に知られ、元文四年遂に幕命を拜して典籍の事を掌る。屢〻旨を奉じて諸州に至り舊書の類を搜求す。延享中紅葉山火番に擧げられ、尋で評定所の儒者に轉じ、終に遷りて書物奉行となる。著書頗る多し。明和六年十月死。年七十二。【二四】

青地林宗　名は盈、字は子遠、芳洲と號す。松山侯の侍醫快庵の子。文化の初め蘭學に志し、馬場佐十郎に學び、遂に一家を成す。後輿地志六十五卷を草し、改めて七卷となし輿地志略と稱す。天保三年水戸に聘せられ、醫員兼西學都講となり、四年二月死す。年五十九。【二七、二八】

赤井嚴三　名は繩、字は士巽、小字秀之助、東海と號す。高松藩士十郎左衞門直道の子。長じて家を弟吉兵衞に讓り、古賀精里に昌平黌に學ぶ。力學五年病を得て咯血すと雖やめず。文化十年黌を辭し帷を垂れて諸生を教ふ。時に年二十七。文政十年藩侯の召に應じ十人扶持を賜はられ、世子に侍讀す。後遂に祿を加へ使番となり百俵を賜はる。文久二年十一月死。年七十六。谷中妙福寺に葬る。【二八】

秋山玉山　幕府分解接近時代當揭出。【一八】

安積艮齋　名は重信、又、信といひ、字は思順、通稱は祐介、岩代安積郡郡山八幡社祠官安藤親重の三男なり。少にして江戸に出で、佐藤一齋の塾に學び、次いで林述齋に從ふ。學成りて後江戸神田淡路坂上に帷を下して諸生を教授す。天保十四年二本松藩學の教授を兼ぬ。弘化二年將軍家慶に謁し、嘉永三年儒官となり、昌平黌官舍に移る。萬延元年十一月廿一日死。年七十。江戸本所番場町妙源寺に葬る。【一〇〇】

淺野長祚　幕府實力失墜時代、彼理來航以前の形勢、日露英蘭條約締結當揭出。【三二】

足立佐内　名は信頭、幕府に仕へ、屢〻海外人渡來の際出張して通辯の任に當る。明和六年生れ、弘化二年死す。【二六】

跡部甲斐守　跡部良弼に同じ。文政天保時代當揭出。【九五】

會澤憩齋　名は安、字は伯民、通稱は恒藏、正志齋と號す。幼より學を好み、彰考館寫字生となり、初め留守に班し、ついで步士となり、又諸公子に侍讀す。數年にして累遷して遺物番となり、藤田幽谷の後を受けて彰考館總裁となる。後病を得て職を辭、教授となる。更に郡奉行に擢でられ、小姓頭總教に轉ず。屢祿を增して二百五十石となさる。深く烈公に信賴せられ、建言啓沃するところ多し。烈公致仕するに及び、一たび謫を得て屏居せしが、烈公の再び出づるに及

び、また再び祿仕す。文久三年死。年八十二。著書中庸釋義、讀論日札等十數種あり。〔一〇〇〕

阿部伊勢守
阿部正弘　阿部正弘に同じ。〔九〇、九三〕天保改革、幕府分解接近時代、彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時、神奈川條約締結、日露英蘭條約締結篇掲出。〔六〇、七五、八一、八七、八九、九〇、九一、九三、九五〕

新井白石　幕府分解接近時代、幕府實力失墜時代篇掲出。〔一五、二四、二五、三九、九七〕

イ、キ

池田光政　利隆の子。初名幸隆、新太郎と稱す。慶長十四年備前岡山に生る。元和二年遺領を嗣ぐ。三年因幡鳥取三十二萬石に移る。九年從四位下侍從に叙任し、家光の諱字を賜ひ、名を光政と改む。寛永三年八月左少將となる。五年秀忠の孫女を娶る。九年岡山三十一萬五千石に移る。天和二年岡山に死す。年七十四、儒禮を以て和氣郡敦土山に葬る。〔一五、一七〕

池部啓太　名は春常、如泉と號す。熊本の人。年十五、伊能忠敬につき測量術を學び、十八歳長崎に遊學す。後父長十郎の跡を嗣ぎ。百石を食み天文曆算測量の師範となる。又西洋砲術を研究發明し、その師範をも兼ぬ。明治元年八月死。年七十一。飽託郡池田村妙敎寺に葬る。〔三一〕

伊澤美作守　神奈川條約締結篇、日露英蘭條約締結篇掲出。〔八〇〕

市川齋宮　後兼恭と改む。蘭學を修む。シーボルトの江戸に來るや、ついて質問せることあり。〔三二、三四〕

伊東貫齋　名は盛貞、字は文仲、武藏多摩郡府中驛の人、猿渡盛穗の第二子、長じて洋學を好み、江戸及び長崎に至り洋人につき醫を學ぶ。又京攝の間に留まり諸名醫に從遊す。ついで伊東玄朴の養子となる。安政二年紀伊侯洋學を藩に起すに及び、聘せられて祿百五十石を賜はる。安政五年正月米領事ハルリスの病むや、幕府の命を受け、行いて治療す。遂に幕府の侍醫となり、法印に叙す。明治三年徵されて大典醫となる。車駕に陪して各縣を巡る。七年臺灣の役軍に從ひ兵士の病を治す。十六年十一月致仕。爾來大磯にあり。二十六年七月死。年六十八。〔三四〕

伊東玄朴　文政天保時代篇掲出。〔三一、三五〕

伊藤仁齋　名は維楨、源佐と稱し、仁齋、古義堂、棠陰等と號す。寛永四年京都に生る。幼より穎悟、十一歳にして經義を悟り、詩文を作る。是より日夕性理學を研磨す。長じて古義を發揮せんことを志し、門を開いて徒を敎ゆ。門人頗る多し。三十六歳論語古義、孟子古義、中庸發揮等を草定す。是實に家學の根據なり。寶永二年三月死。年七十九。〔一五〕

井戸石見守
井戸對馬守　彼理來航及其當時篇掲出。〔八〇〕神奈川條約締結篇、日露英蘭條約締結篇掲出。〔七九〕

稲村三伯　因幡鳥取の人。名は簡、字は白羽、本姓松井、後藩醫稲村氏の後を嗣ぎ侍醫となる。若き時筑前龜井道戴の門に入る。道戴沒後長崎に至り、シーボルトに學ぶ。享和二年江戸に祗

役中實弟某破産の事に座し、麗町奉行所に召され、遂に脱藩して下總海上郡に至り居り海上隨鴎と號す。晩年京都に上り、蘭學を教授す。從學の徒頗る多し。文化八年正月死。年六十四。〔二四〕

文政天保時代篇掲出。〔二五、二七〕

伊能忠敬

名は勝以。荒木村重の末子なり。天正七年父死する時僅かに二歳。乳母に輔けられ、本願寺に隱れ、後外戚の姓によりて岩佐氏を名のる。長じて織田信雄に仕へ、信雄亡びて後越前福井に寓す。醫を土佐光則に學び、後遂に一家をなし、當世の風俗人物、遊女等を畫くに最も妙を得たり。晩年將軍德川家光に召され江戸に寓す。世に浮世又兵衛といふ。慶安三年死す。〔四八〕

岩佐又兵衛

岩瀨忠震

彼理來航以前の形勢篇掲出。〔二一、三五〕

ウ

宇田川玄眞

名は璘、榕齋と號す。伊勢の人。初め皇漢の醫學を修め、後江戸に出で、宇田川玄隨の說を聞き大に感動し、遂に其門に入る。ついで大槻玄澤、杉田玄白等に就き研究を遂め、名聲大に擧る。寛政九年の冬玄隨死するに及び、入りて其嗣となり、津山藩醫となさる。後致仕して江戸に住し業を開く。文化十四年幕府の天文臺譯員に補せらる。譯述の書頗る多く、遂に將軍に謁を賜はる。天保三年家を養子榕庵に讓り、五年十二月死す。年六十六。及門の士頗る多し。〔二五、二七〕

宇田川興齋

宇田川榕庵

內田彌太郎

榕庵の嗣子なり。〔三一、三四〕

文政天保時代篇掲出。〔一七、二九〕

名は恭、觀齋と號す。幕府の下吏日下五瀨に就き關流算術を修め、又和田圓象に圓理の新法を受け、後高野長英に從ひ蘭學を修む。文政十一年江戸に算數の學塾を開く。〔二八〕

內山隆佐

大野藩士、名は良齋、字は子正、貫齋と號す。若くして醫を大阪に學び、後江戸に出でゝ朝川善庵の門に學ぶ。又西洋の事情を究む。天保八年以來藩に在りて教育政務の要職に任じ、間もなく再び江戸に出で佐久間象山に兵學を習ふ。安政二年北地開拓の事に力を盡し、造船の事に與る。文久三年執政に擧げらる。元治元年六月死す。年五十三。〔三五〕

文政天保時代篇掲出。〔七一〕

內山彥次郎

鵜殿民部少輔　彼理來航及其當時、神奈川條約締結篇掲出。〔八〇〕

上杉鷹山

上杉治憲に同じ。田沼時代、雄藩篇掲出。〔一九〕

上田帶刀

尾張藩士、名は仲敏、吉雄南皐に學び、師意を承けて砲術を研究す。砲術語選、砲術便覽の著あり。藩侯後に私塾を收めて藩校とし、伊藤圭介をして助けしむ。是に於て諸藩の士來り學ぶもの頗る多し。〔三一〕

エ、エ

江川英龍

江川太郎左衛門

太郎左衛門に同じ。〔三一〕

天保改革、幕府實力失墜時代、彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時、神奈川條約締結、日露英蘭條約締結篇掲出。〔三二、八〇、八二〕

遠藤但馬守

文政天保時代篇掲出。〔三四、九五〕

オ、ヲ

岡研介　名は精、字は子究、周東また恥菲と號す。周防の人、岡泰純の第五子。寛政十一年生る。文化十一年郷里を去り、伊豫安藝等に行きて醫學を修め文政二年萩に出でゝ開業す。ついで豐後に行き廣瀬淡窓の門に入り、文政五年福岡に至り、龜井道載の塾に學ぶ。同七年長崎に至りシーボルトに學ぶ。十三年の頃大阪に出で業を開き、天保三年一旦歸國し、岩國侯御手廻役となる。四年また大阪に出で、七年十月また歸りて藩侯に仕ふ。九年十一月死す。年四十一。【二八】

岡田清助　岡田寒泉に同じ。松平定信時代篇掲出【二〇、二一】

緒方洪庵　名は章、字は公裁、華陰と號す。備中足守の人。十七歳大阪に出で中天游に入門し洋醫の事を學び、ついで江戸に出で坪井誠軒に從ひ、又宇田川榕齋に學ぶ。六年を經て長崎に下り研究し、天保九年大阪に出でゝ諸生を教ふ。文久二年八月召されて幕府の奥醫師となり法眼に叙せられ、かねて醫學所頭取となる。文久三年六月死す。年五十四。駒込高林寺に葬る。【二九、三一、一〇〇】

荻生觀　通稱惣七郎、名は觀、初名玄覽、實は叔達、北溪と號す。徂徠の弟なり。寶暦四年正月死。年八十二。著書七經孟子考文補遺、建州始末記等あり。【二三】

荻生徂徠　名は雙松、字は茂卿、通稱總右衛門、徂徠は其號なり。父方庵は幕府の醫官なりしが、事によりて上總に流され、從ひ行く。居ること十二年にして江戸に歸り、帷を芝浦に下し教授自ら給す。後柳澤吉保に登用せられ、累進して五百石を給せられ、番頭格に進む。名聲漸く高く、遂に復古學の一派を開く。五代將軍に經書を進講し、又八代將軍の命を受け、六論衍義を和譯す。享保十三年正月死。年六十三。或はいふ六十五と。江戸芝長松寺に葬る。【一五、二〇】

小關三英　天保改革篇掲出。【二八、二九】

奥平昌高　雄藩篇、文政天保時代篇掲出。【二七】

奥村政信　通稱源六、文角と稱し、芳月堂、丹鳥齋、觀妙梅翁等と號す。江戸通鹽町に住し、書肆を營む。浮世繪を能くし當時の名手なり。最も享保年中に流行す。明和五年二月死。年七十九。【四八】

小栗上野介　名は忠順、初め又一と稱し、又豐後守といふ。安政六年目付に任ず。新見正興等と米國に使し諸大夫に任ず。萬延元年外國奉行に任じ、對馬に赴き露船と折衝せしが、意見行はれず、辭職す。文久二年勘定奉行となり、又軍艦奉行、陸軍奉行並に轉ず。理財の事に通じ、横須賀灣に造船廠を設け、佛國人を聘して軍備を整へし如き功績多し。【四五】

大鹽平八郎　幕府分析接近時代、文政天保時代篇掲出。【一二】

太田道醇　太田資治に同じ。文政天保時代、天保改革篇掲出。【五四】

太田南畝　天保改革篇掲出。【四二】

大槻玄幹　玄澤の長子、名は茂楨、磐里と號す。醫業を嗣ぎ天方方の和解御用をも勤

大槻玄澤
大槻俊齋

む。天保八年死、年五十三。【二七】天保改革篇掲出。【二四、二五、二六】名は磐、字は伸敏、弘淵と號す。伊達氏の重臣片倉氏の臣なり。少壯江戸に出で足立長雋に學び、後長崎に遊び、シーボルトに從ひ、歸つて江戸に業を創む。安政の始め銃創瘡言を著はし、江川太郎左衛門の斡旋により漸く刊行するを得、名聲大に揚る。後幕府の醫官となり、西洋醫學所の督學となる。文久二年九月死。年五十七。【三四】

大槻磐水
大槻傳藏

玄澤に同じ。【二五】初名長玄、前田氏の微臣、十三歲、藩侯吉德に仕へ、侍醫となる。長ずるに及び聰敏にして寵あり。始め功を以て五百石を賜はり、後漸次增して三千五百石となり、また二千石を增され、內藏允と稱す。寶曆二年、大逆無道を以て竹鋸の刑に處せらる。時に年三十四。【四】

大村永敏

通稱は益次郎、初村田藏六と稱し、後大村と改む。周防吉敷郡鋳銭司村の人、幼にして廣瀨淡窓の門に學び、後大阪に出で緒方洪庵に就き洋學を修む。遂に藩校の教授となる。慶應二年幕府の兵の境に迫るにあひ迎戰皆克つ。戊辰の役各所に轉戰して功あり。遂に世襲祿千五百石を賜ひ、從四位兵部大輔に叙任す。明治二年九月刺客の兇刃に仆る。【三四】

【カ行】

カ

孝明天皇

幕府實力失墜時代、神奈川條約締結篇掲出。【六〇】

高良齋
勝海舟

文政天保時代篇掲出。【二九】天保改革、幕府實力失墜時代、彼理來航以前の形勢篇掲出。【三四、四五】

勝川春章

松平定信時代篇掲出。【四一、四八、四九】

桂川甫周
川路聖謨

田沼時代、雄藩篇掲出。【二四、二五】文政天保時代、幕府實力失墜時代、彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時、神奈川條約締結、日露英蘭條約締結篇掲出。【六八】

河村瑞賢

初名七兵衛、後十右衛門と改む。薩髮して瑞賢と號す。初め家貧、車力を業とし、明暦江戸大火により木材を買り巨利を博す。地理に明かにして大阪安治川を修理し、又淀、中津等川々の舟運を通じ、東海奥羽の航運をも開き功あり。元祿十三年六月死。年八十三。【七】

川村修就

川村對馬守に同じ。日露英蘭條約締結篇掲出。【七一】

川本幸民

裕軒と號す。攝津三田の人、幼時藩校に學び、二十歲江戸に出て足立長雋の門に入り、後坪井信道に蘭醫學を受け、緒方洪庵、青木周弼等と名を齊しうす。天保三年藩の侍醫となり、安政三年蕃書調所の教授手傳出役となり、六年七月教授となる。文久二年十二月幕士となる。明治四年死す。年六十二。著書氣海觀瀾廣義の外、遠西奇器述、螺旋汽機說、暴風說等少なからず。【三一、三二、三三、三四】

貝原益軒

通稱久兵衛、名は篤信。益軒又損軒と號す。筑前の人、世々福岡侯に仕ふ。父寬齋に從つて幼時より醫書を

讀む。明暦丁酉京都に出で、松永尺五、山崎闇齋、木下順庵に從つて學ぶ。居ること三年にして業大に進む。其著書皆國字を以て之を記し、俚耳に入り易からしむ。正德四年死。年八十五。著書百餘種皆世に行はる。〔一五〕

龜井道載　田沼時代掲出。〔一八〕

神田孝平　名は孟恪、又有不爲樓と號し、後淡蛭と改む。美濃竹中氏の臣。早く蘭學を修め、後兵庫縣令となる。ついで元老院議官に任ず。明治三十一年七月男爵を授けられ、ついで死す。年六十五。〔三四〕

キ

菊谷米藏　幡崎鼎に同じ。〔二八〕

北尾政演　山東京傳に同じ。〔四一〕

喜多川歌麿　松平定信時代篇掲出〔四三、四八〕

紀平洲　田沼時代篇掲出。〔一九〕

木村軍太郎　名は重周、字は士約、知能と號す。下總佐倉の藩士。長じて洋學に志し遂に一家をなす。安政元年幕府に徴されて天文臺に出仕し、同三年蕃書調所手傳となる。佐倉藩の爲に兵備改革の意見を陳べ、功少なからず。文久二年八月江戸羽根澤に死す。年三十六。著書砲術訓蒙八卷あり。〔三二、三四〕

曲亭馬琴　瀧澤馬琴に同じ。天保改革篇掲出。〔四二、四七〕

ク

久世大和守　彼理來航及其當時、神奈川條約締結篇掲出。〔八九〕

朽木昌綱　田沼時代・雄藩篇掲出〔二四、二七〕

熊澤了介　松平定信時代、幕府實力失墜時代篇掲出。〔一五〕

栗本鋤雲　文政天保時代篇掲出。〔五二〕

黑田長溥　彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時篇掲出。〔三三〕

菅茶山　松平定信時代、幕府分解接近時代篇掲出。〔一一〕

コ

小石元瑞　名は龍、樓園と號す。元俊の子。十六歲父に從つて江戸に出で杉田、宇田川、大槻等の士に蘭醫方を學ぶ。後西歸し父の跡を嗣ぎ、名聲頗る揚る。五十歲、家を讓りて閑居し、抽翁と號す。晩年中風に罹り、嘉永二年二月年六十六にして死す。京都紫野大德寺に葬る。〔二八〕

古賀謹一郎　彼理來航及其當時、神奈川條約締結、日露英蘭條約締結篇掲出。〔三三、三四〕

古賀精里　松平定信時代、幕府分解接近時代篇掲出。〔二一〕

古賀侗庵　彼理來航以前の形勢篇掲出。〔二九〕

古賀彌助　精里に同じ。〔二〇〕

後藤庄三郎　後藤光次に同じ。天保改革篇掲出。〔二一〕

近衛基熙　尙嗣の子。官太政大臣關白に至る。享保七年薙髮して悠山と號す。この年九月薨ず。年七十五。應圓滿院と號す。〔三九〕

戀川春町　本姓は倉橋氏、名は格、壽平と號す。狂歌俳句をよくす。戲號を酒上不埒又壽山人といふ。春町は戲作の號なり。松平丹後守の臣なり。寛政元年七月死。年四十六。〔四一〕

ゴローウイン　彼理來航及其當時篇掲出。〔二六、二七〕

【サ行】

サ

齋藤拙堂　名は正謙、字は有終、寛政九年江戸柳原津藩邸に生る。長じて昌平黌に入り、卓然頭角を顯はす。後藩の學職となり更に講官となる。ついで藩主高猷に侍讀し、弘化元年晉學となり、文武の學を總理す。當時津藩人材輩出大下第一と稱せらる。將軍德川家定微せども辭して就かず、藩主の下にあり、遂に祿三百石を與へらる。慶應元年七月死。年六十九。著書拙堂文話、同續篇、月瀨紀勝等十數種あり。〔八八〕

齋藤篤信齋　名は善道、字は忠卿、通稱は彌九郎。越中射水郡佛生寺村の人。長じて江戸に出で儒を古賀精里に、兵學を平山子龍に、劍法を岡田十松に學ぶ。後に十松沒後練武館を三番町に開きて諸生に教授す。從遊するもの數百人に至る。明治戊辰の際上野に集るの人々推して首領となさんとせしが敢へて應ぜず。後明治政府に仕へ會計官權判事より鑛山大佑に轉ず。四年十月死。年七十四。小石川昌林院に葬る。〔一〇〇〕

酒井雅樂頭　彼理來航及其當時篇掲出。〔八〇〕

佐久間啓之助　佐久間象山に同じ。〔九八〕

佐久間象山　天保改革、彼理來航以前の形勢、神奈川條約締結篇掲出。【三二】

佐々木顯發　佐々木信濃守に同じ。彼理來航以前の形勢、日露英蘭條約締結篇掲出。【六九、七一】

佐藤一齋　佐藤拾藏に同じ。天保改革篇掲出。【一五】

佐藤信淵　天保改革、幕府實力失墜時代篇掲出。【二五】

佐藤泰然　名は信圭、紅園と號す。出羽莊內秋川邑の豪族なり。出でゝ父に從ひ江戸に居り、足立長雋に蘭醫方を學び又高野長英に習ふ。後長崎に至り蘭人ニーマンに學ぶ。四年を經て江戸に歸り、天保十一年藥研堀に開業す。ついで下總佐倉に移り、病院を建て順天堂と名づく。晚年家を嗣子尙中に讓り、横濱に居り、明治五年四月死す。年六十九。大正四年從四位を贈らる。【三〇】

佐野善左衞門政言　田沼時代篇掲出。【九〇】

山東厖京傳　松平定信時代篇掲出。【四一、四二】

シ

自笑　安藤氏、京都麩屋町の書肆なり。八文字屋八左衞門と稱す。江島屋其磧に托して小說を著さしめ、己が名を署して出版す。然るに其書頗る好評なりしを以て其磧敢へて代作をなさず。自笑即ち多田南嶺に代りて作らしむ。延享二年十一月死。年八十。【四一】

司馬江漢　幕府分解接近時代篇掲出。【二四】

柴野栗山　柴栗山に同じ。彼理來航及其當時篇掲出。【二一】

澁川助左衞門　文政天保時代篇掲出。【三〇】

澁川六藏　天保改革篇掲出。【三〇】

鹽谷宕陰　名は世弘、字は毅侯。宕陰また九皇香園と號す。十六歲にして昌平黌に入り、二十一歲にして西國を遊歷す。後父の死にあひ、帷を下して諸生を教授す。松崎慊堂の薦により、

水野忠邦に擢でられ其文學となり、十五人扶持を賜はる。忠邦の老中となるや其顧問に加はり、獻替するところ頗る多し。忠邦退老するに及び、嗣忠精に仕へ、輔導切に至る。遂に二百石を賜はる。海外事多きに及び、數々書を作りて上司に上る。後幕府に仕へ、二百俵十五人扶持を賜はる。慶應三年九月死。年五十九。〔三四〕

文政天保時代、天保改革篇掲出。〔二七、二八〕

シーボルト

雄藩篇、文政天保時代、彼理來航及其當時篇掲出。〔二五、二七〕

島津重豪

雄藩篇、幕府實力失墜時代、彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時篇掲出。〔三二、三三、三四〕

島津齊彬

下曾根金三郎　名は信敎、桂園と號す。後甲斐守に任ぜられ步兵奉行となる。その家世々砲術を傳ふるを以て、骨つて高島秋帆の門に入り、西洋砲術を習ひ、譯述の書多し。

釋月性　字は知圓、清狂と號す。周防玖珂郡遠崎一向宗妙圓寺の僧、詩文を善くす。壯時豐肥の間に遊び、碩儒名僧に接し大に識見を廣くす。性慷慨にして酒を嗜む。吉田松陰等と交る。嘉永安政の際尊攘の大義を倡道し、各地に遊說す。安政三年十月本願寺に召され、東山別院に居る。當時、梁川、頼、梅田等の志士と交り、王政復古を念とす。後本山布敎の事を任ぜられ、北海諸州に赴かんとし暴かに病んで死す。時に安政五年五月。年四十二。〔八八〕

新宮凉亭　名は碩、驅竪齋又鬼國山人と號す。丹後の人。骨つて內科醫を讀み發憤して長崎に學び、甲比丹道富に見出され蘭館の醫となり、かれて蘭醫に就き業を研く。後歸つて京都に業を開き、名聲大に揚り、遂に順正書院を設け諸生を敎授す。嘉永七年正月死す。年六十八。〔二九〕

神保容助　名は綱忠、一名行簡、蘭室と號す。上杉氏の臣、十七歲召されて藩公世子治憲の學友となる。治憲家を繼ぐに及び紀平州の嚶鳴館に學び、安永二年興讓館提學となる。平洲國に下るに方り、助けて學政を定む。天明二年父の後百石を受け、國用乏しきにより減祿して五十騎隊に入る。寛政元年舊職に復し、澁戸善政の改革に參與し、町奉行席年寄に任じ、次で大目付上席に班す。文化十三年致仕。文政九年八月死。年八十四。宜雨堂集あり。〔一九〕

ス

杉田玄端　名は德太郎、字は充浦、泰祿と號す。尾張藩の醫師幡頭信珉の子。天保五年十七歲にして杉田立卿の門に蘭學醫術を學び、九年立卿の猶子、成卿の義弟となる。是より杉田玄端と稱す。弘化二年江戸大傳馬町に居り業を開く。三年八月宗家杉田玄白の嗣となる。安政五年蕃書調所出役敎授手傳となる。文久二年養父玄白老年に及ぶを以て其家督を嗣ぐ。この年召されて開成所敎授職御儒者格となる。慶應元年三月外國奉行支配譯御用頭取に任ず。維新の後駿河に移り、靜岡また沼津に居り病院を開

く。後分院を東京に設け、十一年十月遂に共立病院を建つ。二十二年十月死。年七十二。〔三一、三四〕

杉田玄伯　幕府實力失墜時代篇掲出。〔二四、二五〕

杉田成卿　名は信、梅里と號す。鵜齋の孫、立卿の子、幼にして家學を受け、二十歳に及び坪井信道の門に學ぶ。天保十二年天文臺譯員となり、嘉永七年辭して下谷御徒町に居り、後淺谷羽根澤に移る。安政三年蕃書調所教授となり、ついで之を辭し、安政六年死す。年四十三。〔二九、三〇、三一、三二、三三、三四〕

杉田立卿　名は豫、錦腸と號す。玄白の庶子、父の志を承け眼科の學を修め、拮据して眼科新書五卷を著はし、又徽毒新書五卷を述作す。後幕府の命を受け

青地林宗と共に馬場佐十郎の遺業遵厄日本紀事の繙譯を完成す。弘化二年十一月死。年六十。〔二七〕

鈴木春山　天保改革篇掲出。〔二八、三一〕

鈴木春信　通稱は又兵衛、長榮軒と號す。西村重長の門に學び、浮世繪を能くす。明治の始め吾妻錦繪を畫き出す。然れども歌舞伎役者の繪を畫くを好まず、常に曰く、我は大和畫師なり、何ぞ河原者の像を畫くに堪えんやと。明治七年六月死。年五十三。著作の畫本頗る多し。〔四八〕

セ

錢屋五兵衛　文政天保時代、神奈川條約締結篇掲出。〔八一〕

〔タ行〕

タ

高島秋帆　彼理來航及其當時篇掲出。〔三〇、三一、三四〕

高野長英　文政天保時代、天保改革、幕府實力失墜時代篇掲出。〔二八、二九、三一〕

高橋作左衛門　文政天保時代、天保改革、幕府實力失墜時代篇掲出。〔二五、二七〕

高橋東岡　作左衛門至時に同じ。雄藩篇、文政天保時代篇掲出。〔二五〕

多紀安元　名は元胤、字は紹翁、元簡の長子。文化八年三月父の後を嗣ぎ督醫學事となり、醫學館を總理し三十八人扶持を賜はる。文政五年法眼に叙せられ、六年六月病んで死す。弟元佶繼ぐ。〔三一〕

多紀元簡　字は廉夫、通稱安長、桂山、また樑窓と號す。幼にして文學を井上金峨

に受け、また家學を修め、寛政二年松平定信の爲擢でられて侍醫となり、法眼に叙せらる。十一年父の後を嗣ぎ侍醫兼督醫學事となる。享和元年事により侍直を罷め、外班に黜けらる。文化七年再び召されて後宮醫班に列す。この年十二月死。年五十六。〔三一〕

多紀元堅　通稱安叔、字は亦柔、元簡の第二子。天保六年内班に擧げられ、醫學館教授となる。翌年法眼に叙し、ついで法印となり、樂春院と號す。安政四年二月死。〔三一〕

多紀元德　元孝の子。安永五年擢でられて幕府の侍醫となり、法眼に叙せらる。天明八年侍藥に陞り、ついで法印に叙せらる。父元孝の代に起したる醫塾を改めて、幕府の醫學館とし多くの

醫生を教育養成し、又幕府に建言して製藥所を創始す。享和元年五月死。年七十。著書廣惠濟急方、醫家初訓、養生大意等あり。〔三一〕

高山正之　彼理來航以前の形勢篇掲出。〔九八〕

竹内玄洞　文政天保時代篇掲出。〔三四、三五〕

武田斐三郎　日露英蘭條約締結篇掲出。〔三二、三四〕

太宰純　幕府實力失墜時代篇掲出。〔二三〕

立原甚太郎　杏所に同じ。雄藩篇、天保改革篇掲出。〔二八〕

谷文晁　彼理來航以前の形勢篇掲出。〔四九〕

田沼意次　寶暦明和篇、田沼時代、松平定信時代篇掲出。〔一一、一九、二四、三七〕

田沼意知　田沼時代、雄藩篇掲出。〔九〇〕

田村元雄　田沼時代、雄藩篇掲出。〔二四〕

爲永春水　寛政二年江戸に生る。初め辨慶橋の側に住し、後牛島に移り、又下谷池の端に移る。書籍仲買を業とせしが、稗史小說を好み式亭三馬の門に入り狂訓亭三鶯と號し、獨立して人情本作者となる。其著阿古義物語後編が絶版を命ぜられて以來怏々として樂まず。日夜酒食にふけり、天保十三年七月病んで死す。年五十四。〔四四、四七〕

田安宗武　天保改革篇掲出。〔三七〕

ツ

調所笑左衞門　雄藩篇、幕府實力失墜時代篇掲出。〔四〕

津田重次郎　津田永忠に同じ。〔一七〕

津田眞一郎　美作津山の人。幼名喜久治、龜次郎と改め、ついで眞一郎と改む。後眞道と號す。家を弟鐵治郎に讓り、江戸に出で、箕作阮甫の門に學び、又

佐久間象山に兵法を習ふ。ついで津山藩の軍事方となり、藩籍を脫し江戸に出で、幕府に召され蕃書調所に出仕す。文久三年和蘭に航し法政學を修む。二年を經て歸朝し、開成所教授となる。明治元年靜岡藩大目付となる。ついで明治政府に仕へ、諸官に歷仕し、九年元老院議官に任ず。二十二年衆議院議員となり、副議長に任ず。二十九年貴族院議員となり、三十五年法學博士となり、又男爵を授けらる。三十六年九月死。年七十五。〔三四〕

津田永忠　備前岡山藩士津田永貞の子。初名文六、後八太夫、又は重次郎と稱す。寛永十七年生る。幼より光政に側仕し、後大横目評定席に列す。ついで光政の命を奉じ、閑谷校を營み、其學監となる。又國内の荒歉を救濟し、水利殖產の業を起し頗る功あり。遂に秩祿增して千五百石となりしが、寶永元年之を還し、新に七百石を與へられ、是より閑谷に住し、專ら校務を見る。四年二月死。年六十八。〔一五〕

筒井肥前守　文政天保時代、天保改革篇以下各篇掲出。〔八三〕

ツ　ー　フ

坪井信道　幕府分屬接近時代掲出。〔二六〕名は道、誠軒と號す。信道は其字なり。美濃池田の人。信之の第四子。幼にして孤となり、尾張の秦治浪及び江戸の倉成龍渚に就き漢籍を修め、後宇田川玄眞の門に學ぶ。ついで江戸深川に開業し、長州侯に知られ其侍醫となり、三百石を賜はる。嘉永元年十一月死。年五十四。〔二八、二九〕

鶴峰戊申　通稱彦一郎、字は世霊また季尼、中橋海四等と號す。天明八年豐後白杵に生る。八坂神社司大和守宣綱の子。性學を好み、和、漢、蘭、悉曇等の學に明に、又算數、究理に通ず。文政九年三十九歳にして父を喪ひ、家を弟宣定に讓り、諸國を遊歴す。ついで江戸に卜居し、諸生を教ふ。天保九年十二月水戸齊昭に謁し、編纂、校合、和歌侍講等の御用を承はり、年々白銀數十枚を賜はる。安政三年遂に藩士に列せらる。六年八月江戸駒込水戸藩邸に死す。年七十二。著書頗る多し。〔三二〕

テ

手塚律藏　名は謙、周防熊毛村の人、幼より學を好み、長崎に出で蘭英の語を學び、後江戸に出で門生を教授し、又牛痘を傳ふ。嘉永中佐倉侯に召され藩士に教授す。安政中幕府蕃書調所を建つるや入りて其教授となり、又前田、毛利兩藩士に教授す。後名を瀬脇壽人と改め、佐倉博文堂總務兼教授となり藩政改革に與りて功あり。明治四年十月政府に徴されて外務大錄となり、小書記官に進み、九年六月浦鹽斯德港駐在貿易事務官となる。十一年十一月病んで歸朝し、遂に途中に死す。年五十七。著書雞林事略、泰西史略、萬國圖誌、清英字典等少なからず。〔三二、三四〕

寺門靜軒　名は良、字は士温、靜軒は其號なり。通稱彌右衛門、江戸の人。性磊落、長じて書を讀み、四方に周遊す。文政年中江戸に歸り、雒を下して諸生を教授す。天保十三年江戸繁昌記を著はし、江戸を追はる。是に於て髮を削り、自稱して無用の人といふ。後遂に寛永寺に入り、史書を讀み、名聲都下に鳴る。明治元年八月廿四日死す。年七十三。著書新潟繁昌記。靜軒一家言、靜軒痴談、靜軒文鈔等あり。〔五二〕

寺島宗則　小字陶藏。鹿兒嶋藩支藩和泉鄕の臣。十六七歳の頃藩の蘭醫に就き蘭方醫學を修め、文久年間英艦薩摩に來るの時捕へられ英國に行き、居ること二年、かへりて松木弘安と稱し、幕府に仕へ、蕃書調所教授手傳及び開成所教授となり、幕使に隨ひ海外に航し、維新後明治政府に仕へ、全權公使、宮中顧問官、樞密院副議長となり、伯爵を授けらる。明治二十六年六月死。年六十一。〔三四〕

ト

土井利忠　土井能登守に同じ。文政天保時代篇揭出。〔三五〕

戸川中務少輔　戸川安鎭に同じ。彼理來航及其當時篇揭出。〔八〇〕

土岐丹波守　天保改革篇揭出。〔九五〕

德川家定　天保改革、幕府實力失墜時代、彼理來航及其當時、神奈川條約締結篇揭出。〔七九〕

德川家重　天保改革篇揭出。〔四〕

德川家綱　雄藩篇、天保改革篇揭出。〔二一〕

德川家齊　松平定信時代以下彼理來航及其當時迄各篇揭出。〔六、一二、一五、六〇〕

德川家宣　天保改革篇揭出。〔三九〕

德川家治　寶曆明和、田沼時代、雄藩篇、天保改革篇揭出。〔四〕

徳川家康　家康時代以下各篇掲出。〔二一、二三〕

徳川家慶　文政天保時代、天保改革、幕府實力失墜時代、彼理來航及其當時篇掲出。〔六〇〕

徳川綱吉　幕府分解接近時代、天保改革、幕府實力失墜時代篇掲出。〔四、一五、二三、九七〕

徳川吉宗　彼理來航以前の形勢篇掲出。〔二四〕

徳川義直　尾張義直に同じ。文政天保時代篇掲出。〔二一〕

戸田伊豆守　彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時、神奈川條約締結篇掲出。〔八〇〕

戸田忠太夫　戸田銀次郎に同じ。彼理來航以前の形勢篇掲出。〔八五〕

戸塚靜海　文政天保時代篇掲出。〔三五〕

鳥居甲斐守　鳥居忠耀に同じ。〔五二〕

鳥居忠耀　天保改革、幕府實力失墜時代篇掲出。〔六四〕

【ナ行】

ナ

内藤紀伊守　彼理來航及其當時、日露英蘭條約締結篇掲出。〔八九〕

中井竹山　松平定信時代、幕府實力失墜時代篇掲出。〔一五〕

長岡是容　初名源三郎。監物と稱す。本氏は米田、文政十二年六月見習となり、天保三年家督を嗣ぐ。父祖の後を嗣ぎて細川氏家老職たり。食祿一萬五千石。安政六年八月死。年四十七。竹部見性寺に葬る。〔九〕

中川淳庵　田沼時代篇掲出。〔二四〕

中濱萬次郎　神奈川條約締結篇掲出。〔三二〕

鍋島直正　鍋島齊正に同じ。幕府實力失墜時代、彼理來航以前の形勢、神奈川條約締結篇掲出。〔一二〕

楢林宗建　文政天保時代篇掲出。〔三一〕

ニ

西川如見　名は忠英、求林齋と號す。如見は字なり。長崎の人。少にして天文の學を好み、白髮に至りて廢せず、享保中幕府に召され、長崎の譯官となる。九年九月死。年七十七。著書頗る多し。〔二四〕

新田義貞　小字小太郎。朝氏の子。世々上野新田郡に住し豪族たり。元弘三年勤王の兵を起し、北條氏を鎌倉に討つて之を滅す。建武元年入朝して從四位下左兵衛督に叙任し、上野播磨二國の守護を兼ぬ。足利尊氏反するに及び屢々之と戰ひ、左近衛中將に叙す。延元三年越前藤島に戰死す。年三十八。後嗣を建て別格官幣社に列せらる。〔五〇〕

仁孝天皇　文政天保時代、幕府實力失墜時代、神奈川條約締結篇掲出。〔六〇〕

ノ

野呂元丈　名は實父、連山と號す。元丈また玄丈は其字なり。伊勢の人、元、高橋氏、二十歳の時叔父野呂三省の嗣となり、京都に遊び、山脇玄修の門に學ぶ。又稻生若水並河天民に從遊す。後幕府の命を受け、藥草を諸國に採る。嘗つて清國に赴かんとして果さず。是より怏々として樂まず。寶暦十年三月死。〔二四〕

【ハ行】

ハ

羽倉外記　天保改革、彼理來航以前の形勢、彼

幡崎　鼎　理來航及其當時篇掲出。〔六四、六五〕文政天保時代、天保改革篇掲出。〔二八〕

馬場佐十郎　雄藩篇、文政天保時代篇掲出。〔二六、二七〕

林　述齋　松平定信時代、雄藩篇掲出。〔一五〕

林　道春　松平定信時代篇掲出。〔三九〕

林　忠英　文政天保時代、天保改革篇掲出。〔五四〕

林　洞海　名は彊、字は健卿、豐前小倉の人。天保二年十九歳にして京坂、江戸、長崎に學ぶ。二十八歳長崎に再遊し、三十一歳江戸に出でゝ醫業を開く。嘉永三年小倉侯に出仕す。萬延元年幕府奥醫師となり、專ら二之丸製造所を主る。翌年侍醫となり、法眼に叙せらる。明治の初め靜岡病院副長となり、三年大學中博士に任じ、ついで大阪醫學校長となる。又この年十二月權大典醫に任じ皇太后附となる。九年四等侍醫となる。二十八年二月死。年八十三。〔三四〕

林　大學頭　名は韙、彼理來航及其當時、神奈川條約締結、日露英蘭條約締結篇掲出。〔三二〕

林　道春　松平定信時代篇掲出。〔三九〕

林　信篤　松平定信時代篇掲出。〔二一〕

林　羅山　道春に同じ。松平定信時代篇掲出。〔二一〕

ヒ

菱川師宣　通稱吉兵衛、友竹と號す。房州保田近邊の生れ。父は吉左衛門、世々縫箔師たり。若年の頃江戸に出で縫箔上畫の繪より始めて土佐の畫風を學び、又岩佐又兵衛の手法を慕ひ、頗る名手と稱せらる。正德年間死す。年七十。〔四八〕

尾藤二洲　松平定信時代篇掲出。〔二一〕

一橋治濟　彼理來航以前の形勢篇掲出。〔一二〕

廣瀨旭莊　豐後日田の人。淡窓の弟。字は吉甫、旭莊また秋村、梅墩と號す。幼より長兄の指導を受け、詩文に熟達す。遂に其塾頭となる。天保七年泉州堺に家塾を開き、後暫か大阪に下して諸生を教へ、傍ら天下の志士と交る。萬延元年北陸漫遊を了へ歸阪し、ついで日田に歸る。後また攝津池田に移り居る。文久三年五月大阪城代の召あれども辭して就かず。この年八月死。年五十七。〔九六〕

廣瀨元恭　名は簡、字は廉卿。豐後日田の人。幼より學を好み神童の稱あり。初め龜井南溟の塾に學び、後家にかへり家業を弟久兵衛に讓り、家塾を開き成宜園といふ。門人頗る多し。幕府其功を賞し世々苗字帶刀を許す。大村府内の二侯亦禮聘して教を乞ふといふ。安政三年十一月死。年七十五。〔一五、二八〕

廣瀨淡窓　新宮涼亭と拮抗せしといふ。〔三二〕幼字は簡、字は廉卿。豐後日田の人。幼より學を好み神童の稱あり。初め龜井南溟の塾に學び、後家にかへり家業を弟久兵衛に讓り、家塾を開き成宜園といふ。門人頗る多し。幕府其功を賞し世々苗字帶刀を許す。大村府内の二侯亦禮聘して教を乞ふといふ。安政三年十一月死。年七十五。〔一五、二八〕

フ

藤田東湖　彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時篇掲出。〔八五〕

藤田誠之進　東湖に同じ。〔八五〕

古屋重次郎　名は鳳、字は公款、昔陽と號す。肥後細川氏の臣。愛日齋の弟。明和七年三月離國、江戸に出で、帷を垂れ

諸生を教ふ。寛政五年會津松平氏に召されて會津に赴く。十年兄の病により歸國し、遂に其後を嗣ぎ百石を知行す。文化三年四月死。年七十三。〔二〇〕

ホ

細井甚三郎　紀平洲に同じ。【一九】

細川重賢　吉宗時代、田沼時代、松平定信時代、雄藩篇掲出。【一八】

堀田正睦　天保改革、彼理來航及其當時篇掲出。【八七、八九】

堀平太左衛門　堀勝名に同じ。田沼時代、幕府分解接近時代篇掲出。【一八】

堀大和守　天保改革、幕府分解接近時代篇掲出。【七】

本多利明　幕府分解接近時代篇掲出。【二四、二五】

【マ行】

マ

牧野備前守　文政天保時代篇掲出。【八九】

牧穆中　名は天穆、培蘭又寺山と號す。美作久世町の人。主計倚故の子。箕作阮甫の門に學ぶ。弘化二年水野忠邦に聘せられ、侍講兼西學都講となる。嘉永四年二月故ありて辭し、横濱に移り居る。文久三年死す。年五十五。著書蘭語通、風船問答等あり。【三二、三四】

松浦清　松浦靜山に同じ。田沼時代、文政天保時代篇掲出。【六】

松平越前守　彼理來航及其當時篇掲出。【七九】

松平河内守　彼理來航及其當時、神奈川條約締結日露英蘭條約締結篇掲出。【九五】

松平定信　松平定信時代、幕府分解接近時代、雄藩篇、文政天保時代、幕府實力失墜時代篇掲出。【六、二一、二三、二四、二五、三七、四二、四五、五〇】

松平誠丸　彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時篇掲出。【七九】

松平大膳大夫　毛利敬親に同じ。雄藩篇掲出。【七九】

松平忠優　伊賀守と稱す。彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時、神奈川條約締結篇掲出。【八七、九五】

松平乘全　松平和泉守に同じ。彼理來航及其當時、神奈川條約締結篇掲出。【八九】

松平肥前守　鍋島直正に同じ。【一二】

松平正之　保科正之に同じ。松平定信時代、幕府分解接近時代篇掲出。【二〇】

松平慶永　松平春嶽に同じ。幕府分解接近時代篇掲出。【八〇】

前野良澤　前野蘭化に同じ。吉宗時代、田沼時代篇掲出。【二四】

間宮林藏　幕府分解接近時代篇掲出。【二五】

松平慶永　松平春嶽に同じ。幕府分解接近時代、彼理來航以前の形勢篇掲出。【八八】

ミ

箕作阮甫　彼理來航及其當時篇掲出。【三〇、三一、三二、三四】

箕作秋坪　美作津山の人。幼字矩次郎。父は菊池士郎、津山藩儒員稻垣茂松に學び、後江戸に出で古賀侗庵の門に入る。ついで箕作氏に養はれ秋坪と稱し、大阪に赴き緒方洪庵の門に學ぶ。後江戸に歸り、蕃書調所教授手傳に任ぜられ、間もなく外國方勤務を命ぜらる。後二節に隨ひ兩度歐洲に赴く。明治維新の際三叉學舍を開き子弟を誘掖して功あり。其後東京師範

學校攝理、東京教育博物館長兼東京圖書館長となる。明治十九年十二月死。年六十二。〔三四〕

箕作省吾　陸中水澤の人、初名寛、字は玉海、少時江戸に出でまた京都に學び、摩島松南、仁科白谷等に學び、後江戸に歸り、箕作阮甫の門に入り蘭學醫方を授り遂に其養嗣となる。弘化三年十二月死。年僅かに二十六。〔三〇〕

水野忠邦　文政天保時代篇以下各篇掲出。〔七、三七、五三、五五、五六、六〇、六四〕

水野忠成　文政天保時代、天保改革篇掲出。〔三七、六〇〕

水野忠德　神奈川條約締結篇掲出。〔五四〕

水戸齊昭　幕府分解接近時代以下各篇掲出。〔三二、五四、七九、八一、八二、八三、八七〕

水戸齊修　彼理來航以前の形勢、彼理來航及其當時篇掲出。〔六〕

皆川淇園　松平定信時代篇掲出。〔一五〕

宮部鼎藏　名は增實。田城と號す。熊本藩士。伯父增美に從つて山鹿流の兵法を修め、遂に伯父の後を嗣ぐ。年三十擢でられて師職となる。然れども猶自ら以て足れりとせず、四方に周遊し吉田松陰等と最も善し。米艦の來るや攻守の議を建て屢々國老長岡是容に獻言す。是より藩國と京都の間を往來し周旋頗る功あり。元治元年六月京都に於て節に仆る。年四十五。京都三條細手三條寺に葬る。〔一〇〇〕

ム

村田藏六　大村永敏に同じ。〔三四〕

モ

本木莊左衞門　長崎の人。名は正榮、字は子美、蘭汀と號す。父仁太夫の後を嗣ぎ和蘭通詞となる。四十三歳、學習世話役となり、英佛語を學び、刻苦して英語辭典十卷を著し幕府に獻じ、更に命を奉じて別に辭書を編纂し文化十一年に成る。是れ我國英語辭書の始めなり。ついで佛語辭書を作る。在職中外艦に應接すること屢々あり。文政五年三月死。年五十六。〔二六〕

森田節齋　名は益、通稱謙藏。大和五條の人、醫師文庵の子。猪飼敬所及び頼山陽に學ぶ。頗る史學及び文章に長ず。常に尊攘を主唱す。安政中備中倉敷にありて子弟を教授す。久坂玄瑞、乾十郎等門下に出づ。慶應の初め幕府征長の師を起すや、禍の身に及ばんとするを憂ひ、避けて紀伊那賀郡荒見村に住し、育英に從ふ。明治元年七月死。年五十八。〔一〇〇〕

〔ヤ行〕

ヤ

柳澤吉保　幕府分解接近時代、雄藩篇掲出。〔四〕

矢部定謙　文政天保時代、天保改革、幕府實力失墜時代篇掲出。〔七、五四〕

山鹿素行　松平定信時代篇掲出。〔九八〕

山崎闇齋　松平定信時代、幕府實力失墜時代篇掲出。〔一五、二〇〕

山村才助　名は昌永。字は子明。常陸土浦藩士屋氏の世臣。幼時市河寛齋に學ぶ。長じて江戸に出で大槻磐水に洋學を習ひ、遂に增譯采覽異言を著はす。露國の東北邊に來るや、幕命を受け其國情を譯述し魯西亞國法八卷を上

る。幕府爲に召致せんとせしが偶病ありて果さず。文化四年九月死。年僅かに三十八。〔二五〕

松平定信時代篇掲出。〔一五〕

山本北山

ヨ

横井小楠

彼理來航及其當時篇掲出。〔一七、九八、一〇〇〕

小楠に同じ。〔九八〕

横井平四郎

名は永保、又尙貞、如淵と號す。幼字大二郎。永章妾腹の子。長じて志筑忠雄の門に入り和蘭學を修め、馬場佐十郎等と共に其四門下といはる。又英佛語にも通じ、蘭醫レッケに就き外科を修め特に之に通じたりといふ。天保二年五月死。年四十七。〔二六〕

吉雄忠次郎

文政天保時代篇掲出。〔二七〕

吉川惟足

初名元成、通稱五郎左衞門、觀吾堂、又湘山隱士と號す。長ずるに及び京都に赴き卜部氏に從ひ神道を學ぶ。東歸の後會津侯に知られ召されて神道を講說す。後遂に幕班に列す。從學の徒頗る多し。元祿七年十一月死。年七十九。〔二〇〕

神奈川條約締結篇掲出。〔九、一三、二一、八八、九八、一〇〇、一〇一〕

吉田松陰

名は世育、字は寅果、又矧字。通稱愿三郎、後立藏といふ。上總市原郡の人。長じて龜田綾瀨に學び、江戸淺草に居り子弟に教授す。二十五歲の時田中藩に出仕し儒官となる。藩主本多正訥を助け、治績頗る擧る。文久二年幕府の召に應じ、昌平黌儒員に列す。明治二年中博士となり、從六位に叙せらる。後能めて東京大

塚に居り、傍ら生徒を教ふ。明治十一年八月死。年七十七。〔八五〕

〔ラ行〕

ラ

賴山陽

松平定信時代、幕府分所接近時代、雄藩、文政天保時代、天保改革、幕府實力失墜時代篇掲出。〔一三、一五、二九〕

リ

柳亭種彥

高屋彥四郎と稱す。德川氏の世臣にして二百石を食む。本姓は横田氏。夙く畫を學び、また俳諧を詠じ、狂歌を好み、後戲著に從ひ黃表紙を作り洒落本を作り終に合卷物に盡力し名を著はす。其著作田舍源氏の事に

より罪を得んとし、分疏事なきを得たれども、しかも是より病を得て天保十三年七月死す。年六十。〔四七〕

田沼時代、松平定信時代、幕府實力失墜時代、彼理來航以前の形勢篇掲出。〔二四〕

林子平

〔ワ行〕

ワ

渡邊崋山

文政天保時代、天保改革、幕府實力失墜時代、彼理來航以前の形勢篇掲出。〔二九、三一〕

崋山に同じ。〔二八〕

渡邊登

索引

【ア行】

ア

秋月……一四〇
淺草……四三一
淺草阿部川町……二二三、二二六、二二九、二三二
淺草奥山……二八一
麻布……二八八
朝間……二四〇、四二一
亞細亞……一三二
熱田……二八七
東錦繪……二一四
アテナ……四九
阿波……四五
相生橋……九五
會津……四九、八七、八九、二八〇、二八四、四五三
會津程朱學……九〇
會津藩……九〇
天城炭……二七八
アメリカ……二六九
亞米利加……二二七、二二八、二二四、二二五
亞米利加船……二四七
荒井……二八七
青森……四五二
青山……二六一
諸厄利亞……一四四
安南……一四四

イ

池の端……二九八
石山寺……二二六
伊勢……一五九、二六〇、二八四
伊勢參宮……四三、一九八

浦賀……一四三、一四四、一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一
浦賀表……一六九
浦賀港……一四三
浦賀藩町……一四五
浦賀灣……六一

エ、エ

回向院開帳……一六一
越後騒擾……九、一四四
越前……一四四
越中……一四四

江戸……六、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九、一一〇、一一一、一一二、一一三、一一四、一一五、一一六、一一七、一一八、一一九、一二〇、一二一、一二二、一二三、一二四、一二五、一二六、一二七、一二八、一二九、一三〇、一三一、一三二、一三三、一三四、一三五、一三六、一三七、一三八、一三九、一四〇、一四一、一四二、一四三、一四四、一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、二四〇、二四一、二四二、二四三、二四四、二四五、二四六、二四七、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五三、二五四、二五五、二五六、二五七、二五八、二五九、二六〇、二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六六、二六七、二六八、二六九、二七〇、二七一、二七二、二七三、二七四、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、二八二、二八三、二八四、二八五、二八六、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五、二九六、二九七、二九八、二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一〇、三一一、三一二、三一三、三一四、三一五、三一六、三一七、三一八、三一九、三二〇、三二一、三二二、三二三、三二四、三二五、三二六、三二七、三二八、三二九、三三〇、三三一、三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五〇、三五一、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五一、四五二、四五三、四五四、四五五、四五六、四五七、四五八、四五九、四六〇、四六一、四六二、四六三、四六四、四六五、四六六、四六七、四六八、四六九、四七〇、四七一、四七二、四七三、四七四、四七五、四七六、四七七、四七八、四七九、四八〇、四八一、四八二、四八三、四八四、四八五、四八六、四八七、四八八、四八九、四九〇、四九一、四九二、四九三、四九四、四九五、四九六、四九七、四九八、四九九、五〇〇、五〇一、五〇二、五〇三、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、五一〇、五一一、五一二、五一三、五一四、五一五、五一六、五一七、五一八、五一九、五二〇、五二一、五二二、五二三、五二四、五二五、五二六、五二七、五二八、五二九、五三〇、五三一、五三二、五三三、五三四、五三五、五三六、五三七、五三八、五三九、五四〇、五四一、五四二、五四三、五四四、五四五、五四六、五四七、五四八、五四九、五五〇、五五一、五五二、五五三、五五四、五五五、五五六、五五七、五五八、五五九、五六〇、五六一、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七一、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、五八〇、五八一、五八二、五八三、五八四、五八五、五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九一、五九二、五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一一、六一二、六一三、六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、六二一、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、六二八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四一、六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、六六八、六六九、六七〇、六七一、六七二、六七三、六七四、六七五、六七六、六七七、六七八、六七九、六八〇、六八一、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、六九一、六九二、六九三、六九四、六九五、六九六、六九七、六九八、六九九、七〇〇、七〇一、七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、七〇九、七一〇、七一一、七一二、七一三、七一四、七一五、七一六、七一七、七一八、七一九、七二〇、七二一、七二二、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、七二八、七二九、七三〇、七三一、七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、七三九、七四〇、七四一、七四二、七四三、七四四、七四五、七四六、七四七、七四八、七四九、七五〇、七五一、七五二、七五三、七五四、七五五、七五六、七五七、七五八、七五九、七六〇、七六一、七六二、七六三、七六四、七六五、七六六、七六七、七六八、七六九、七七〇、七七一、七七二、七七三、七七四、七七五、七七六、七七七、七七八、七七九、七八〇、七八一、七八二、七八三、七八四、七八五、七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、七九一、七九二、七九三、七九四、七九五、七九六、七九七、七九八、七九九、八〇〇、八〇一、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、八〇六、八〇七、八〇八、八〇九、八一〇、八一一、八一二、八一三、八一四、八一五、八一六、八一七、八一八、八一九、八二〇、八二一、八二二、八二三、八二四、八二五、八二六、八二七、八二八、八二九、八三〇、八三一、八三二、八三三、八三四、八三五、八三六、八三七、八三八、八三九、八四〇、八四一、八四二、八四三、八四四、八四五、八四六、八四七、八四八、八四九、八五〇、八五一、八五二、八五三、八五四、八五五、八五六、八五七、八五八、八五九、八六〇、八六一、八六二、八六三、八六四、八六五、八六六、八六七、八六八、八六九、八七〇、八七一、八七二、八七三、八七四、八七五、八七六、八七七、八七八、八七九、八八〇、八八一、八八二、八八三、八八四、八八五、八八六、八八七、八八八、八八九、八九〇、八九一、八九二、八九三、八九四、八九五、八九六、八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇一、九〇二、九〇三、九〇四、九〇五、九〇六、九〇七、九〇八、九〇九、九一〇、九一一、九一二、九一三、九一四、九一五、九一六、九一七、九一八、九一九、九二〇、九二一、九二二、九二三、九二四、九二五、九二六、九二七、九二八、九二九、九三〇、九三一、九三二、九三三、九三四、九三五、九三六、九三七、九三八、九三九、九四〇、九四一、九四二、九四三、九四四、九四五、九四六、九四七、九四八、九四九、九五〇、九五一、九五二、九五三、九五四、九五五、九五六、九五七、九五八、九五九、九六〇、九六一、九六二、九六三、九六四、九六五、九六六、九六七、九六八、九六九、九七〇、九七一、九七二、九七三、九七四、九七五、九七六、九七七、九七八、九七九、九八〇、九八一、九八二、九八三、九八四、九八五、九八六、九八七、九八八、九八九、九九〇、九九一、九九二、九九三、九九四、九九五、九九六、九九七、九九八、九九九、一〇〇〇、一〇〇一、一〇〇二、一〇〇三、一〇〇四、一〇〇五、一〇〇六、一〇〇七、一〇〇八、一〇〇九、一〇一〇、一〇一一、一〇一二、一〇一三、一〇一四、一〇一五、一〇一六、一〇一七、一〇一八、一〇一九、一〇二〇、一〇二一、一〇二二、一〇二三、一〇二四、一〇二五、一〇二六、一〇二七、一〇二八、一〇二九、一〇三〇、一〇三一、一〇三二、一〇三三、一〇三四、一〇三五、一〇三六、一〇三七、一〇三八、一〇三九、一〇四〇、一〇四一、一〇四二、一〇四三、一〇四四、一〇四五、一〇四六、一〇四七、一〇四八、一〇四九、一〇五〇、一〇五一、一〇五二、一〇五三、一〇五四、一〇五五、一〇五六、一〇五七、一〇五八、一〇五九、一〇六〇、一〇六一、一〇六二、一〇六三、一〇六四、一〇六五、一〇六六、一〇六七、一〇六八、一〇六九、一〇七〇、一〇七一、一〇七二、一〇七三、一〇七四、一〇七五、一〇七六、一〇七七、一〇七八、一〇七九、一〇八〇、一〇八一、一〇八二、一〇八三、一〇八四、一〇八五、一〇八六、一〇八七、一〇八八、一〇八九、一〇九〇、一〇九一、一〇九二、一〇九三、一〇九四、一〇九五、一〇九六、一〇九七、一〇九八、一〇九九、一一〇〇、一一〇一、一一〇二、一一〇三、一一〇四、一一〇五、一一〇六、一一〇七、一一〇八、一一〇九、一一一〇、一一一一、一一一二、一一一三、一一一四、一一一五、一一一六、一一一七、一一一八、一一一九、一一二〇、一一二一、一一二二、一一二三、一一二四、一一二五、一一二六、一一二七、一一二八、一一二九、一一三〇、一一三一、一一三二、一一三三、一一三四、一一三五、一一三六、一一三七、一一三八、一一三九、一一四〇、一一四一、一一四二、一一四三、一一四四、一一四五、一一四六、一一四七、一一四八、一一四九、一一五〇、一一五一、一一五二、一一五三、一一五四、一一五五、一一五六、一一五七、一一五八、一一五九、一一六〇、一一六一、一一六二、一一六三、一一六四、一一六五、一一六六、一一六七、一一六八、一一六九、一一七〇、一一七一、一一七二、一一七三、一一七四、一一七五、一一七六、一一七七、一一七八、一一七九、一一八〇、一一八一、一一八二、一一八三、一一八四、一一八五、一一八六、一一八七、一一八八、一一八九、一一九〇、一一九一、一一九二、一一九三、一一九四、一一九五、一一九六、一一九七、一一九八、一一九九、一二〇〇、一二〇一、一二〇二、一二〇三、一二〇四、一二〇五、一二〇六、一二〇七、一二〇八、一二〇九、一二一〇、一二一一、一二一二、一二一三、一二一四、一二一五、一二一六、一二一七、一二一八、一二一九、一二二〇、一二二一、一二二二、一二二三、一二二四、一二二五、一二二六、一二二七、一二二八、一二二九、一二三〇、一二三一、一二三二、一二三三、一二三四、一二三五、一二三六、一二三七、一二三八、一二三九、一二四〇、一二四一、一二四二、一二四三、一二四四、一二四五、一二四六、一二四七、一二四八、一二四九、一二五〇、一二五一、一二五二、一二五三、一二五四、一二五五、一二五六、一二五七、一二五八、一二五九、一二六〇、一二六一、一二六二、一二六三、一二六四、一二六五、一二六六、一二六七、一二六八、一二六九、一二七〇、一二七一、一二七二、一二七三、一二七四、一二七五、一二七六、一二七七、一二七八、一二七九、一二八〇、一二八一、一二八二、一二八三、一二八四、一二八五、一二八六、一二八七、一二八八、一二八九、一二九〇、一二九一、一二九二、一二九三、一二九四、一二九五、一二九六、一二九七、一二九八、一二九九、一三〇〇、一三〇一、一三〇二、一三〇三、一三〇四、一三〇五、一三〇六、一三〇七、一三〇八、一三〇九、一三一〇、一三一一、一三一二、一三一三、一三一四、一三一五、一三一六、一三一七、一三一八、一三一九、一三二〇、一三二一、一三二二、一三二三、一三二四、一三二五、一三二六、一三二七、一三二八、一三二九、一三三〇、一三三一、一三三二、一三三三、一三三四、一三三五、一三三六、一三三七、一三三八、一三三九、一三四〇、一三四一、一三四二、一三四三、一三四四、一三四五、一三四六、一三四七、一三四八、一三四九、一三五〇、一三五一、一三五二、一三五三、一三五四、一三五五、一三五六、一三五七、一三五八、一三五九、一三六〇、一三六一、一三六二、一三六三、一三六四、一三六五、一三六六、一三六七、一三六八、一三六九、一三七〇、一三七一、一三七二、一三七三、一三七四、一三七五、一三七六、一三七七、一三七八、一三七九、一三八〇、一三八一、一三八二、一三八三、一三八四、一三八五、一三八六、一三八七、一三八八、一三八九、一三九〇、一三九一、一三九二、一三九三、一三九四、一三九五、一三九六、一三九七、一三九八、一三九九、一四〇〇、一四〇一、一四〇二、一四〇三、一四〇四、一四〇五、一四〇六、一四〇七、一四〇八、一四〇九、一四一〇、一四一一、一四一二、一四一三、一四一四、一四一五、一四一六、一四一七、一四一八、一四一九、一四二〇、一四二一、一四二二、一四二三、一四二四、一四二五、一四二六、一四二七、一四二八、一四二九、一四三〇、一四三一、一四三二、一四三三、一四三四、一四三五、一四三六、一四三七、一四三八、一四三九、一四四〇、一四四一、一四四二、一四四三、一四四四、一四四五、一四四六、一四四七、一四四八、一四四九、一四五〇、一四五一、一四五二、一四五三、一四五四、一四五五、一四五六、一四五七、一四五八、一四五九、一四六〇、一四六一、一四六二、一四六三、一四六四、一四六五、一四六六、一四六七、一四六八、一四六九、一四七〇、一四七一、一四七二、一四七三、一四七四、一四七五、一四七六、一四七七、一四七八、一四七九、一四八〇、一四八一、一四八二、一四八三、一四八四、一四八五、一四八六、一四八七、一四八八、一四八九、一四九〇、一四九一、一四九二、一四九三、一四九四、一四九五、一四九六、一四九七、一四九八、一四九九、一五〇〇、一五〇一、一五〇二、一五〇三、一五〇四、一五〇五、一五〇六、一五〇七、一五〇八、一五〇九、一五一〇、一五一一、一五一二、一五一三、一五一四、一五一五、一五一六、一五一七、一五一八、一五一九、一五二〇、一五二一、一五二二、一五二三、一五二四、一五二五、一五二六、一五二七、一五二八、一五二九、一五三〇、一五三一、一五三二、一五三三、一五三四、一五三五、一五三六、一五三七、一五三八、一五三九、一五四〇、一五四一、一五四二、一五四三、一五四四、一五四五、一五四六、一五四七、一五四八、一五四九、一五五〇、一五五一、一五五二、一五五三、一五五四、一五五五、一五五六、一五五七、一五五八、一五五九、一五六〇、一五六一、一五六二、一五六三、一五六四、一五六五、一五六六、一五六七、一五六八、一五六九、一五七〇、一五七一、一五七二、一五七三、一五七四、一五七五、一五七六、一五七七、一五七八、一五七九、一五八〇、一五八一、一五八二、一五八三、一五八四、一五八五、一五八六、一五八七、一五八八、一五八九、一五九〇、一五九一、一五九二、一五九三、一五九四、一五九五、一五九六、一五九七、一五九八、一五九九、一六〇〇、一六〇一、一六〇二、一六〇三、一六〇四、一六〇五、一六〇六、一六〇七、一六〇八、一六〇九、一六一〇、一六一一、一六一二、一六一三、一六一四、一六一五、一六一六、一六一七、一六一八、一六一九、一六二〇、一六二一、一六二二、一六二三、一六二四、一六二五、一六二六、一六二七、一六二八、一六二九、一六三〇、一六三一、一六三二、一六三三、一六三四、一六三五、一六三六、一六三七、一六三八、一六三九、一六四〇、一六四一、一六四二、一六四三、一六四四、一六四五、一六四六、一六四七、一六四八、一六四九、一六五〇、一六五一、一六五二、一六五三、一六五四、一六五五、一六五六、一六五七、一六五八、一六五九、一六六〇、一六六一、一六六二、一六六三、一六六四、一六六五、一六六六、一六六七、一六六八、一六六九、一六七〇、一六七一、一六七二、一六七三、一六七四、一六七五、一六七六、一六七七、一六七八、一六七九、一六八〇、一六八一、一六八二、一六八三、一六八四、一六八五、一六八六、一六八七、一六八八、一六八九、一六九〇、一六九一、一六九二、一六九三、一六九四、一六九五、一六九六、一六九七、一六九八、一六九九、一七〇〇、一七〇一、一七〇二、一七〇三、一七〇四、一七〇五、一七〇六、一七〇七、一七〇八、一七〇九、一七一〇、一七一一、一七一二、一七一三、一七一四、一七一五、一七一六、一七一七、一七一八、一七一九、一七二〇、一七二一、一七二二、一七二三、一七二四、一七二五、一七二六、一七二七、一七二八、一七二九、一七三〇、一七三一、一七三二、一七三三、一七三四、一七三五、一七三六、一七三七、一七三八、一七三九、一七四〇、一七四一、一七四二、一七四三、一七四四、一七四五、一七四六、一七四七、一七四八、一七四九、一七五〇、一七五一、一七五二、一七五三、一七五四、一七五五、一七五六、一七五七、一七五八、一七五九、一七六〇、一七六一、一七六二、一七六三、一七六四、一七六五、一七六六、一七六七、一七六八、一七六九、一七七〇、一七七一、一七七二、一七七三、一七七四、一七七五、一七七六、一七七七、一七七八、一七七九、一七八〇、一七八一、一七八二、一七八三、一七八四、一七八五、一七八六、一七八七、一七八八、一七八九、一七九〇、一七九一、一七九二、一七九三、一七九四、一七九五、一七九六、一七九七、一七九八、一七九九、一八〇〇、一八〇一、一八〇二、一八〇三、一八〇四、一八〇五、一八〇六、一八〇七、一八〇八、一八〇九、一八一〇、一八一一、一八一二、一八一三、一八一四、一八一五、一八一六、一八一七、一八一八、一八一九、一八二〇、一八二一、一八二二、一八二三、一八二四、一八二五、一八二六、一八二七、一八二八、一八二九、一八三〇、一八三一、一八三二、一八三三、一八三四、一八三五、一八三六、一八三七、一八三八、一八三九、一八四〇、一八四一、一八四二、一八四三、一八四四、一八四五、一八四六、一八四七、一八四八、一八四九、一八五〇、一八五一、一八五二、一八五三、一八五四、一八五五、一八五六、一八五七、一八五八、一八五九、一八六〇、一八六一、一八六二、一八六三、一八六四、一八六五、一八六六、一八六七、一八六八、一八六九、一八七〇、一八七一、一八七二、一八七三、一八七四、一八七五、一八七六、一八七七、一八七八、一八七九、一八八〇、一八八一、一八八二、一八八三、一八八四、一八八五、一八八六、一八八七、一八八八、一八八九、一八九〇、一八九一、一八九二、一八九三、一八九四、一八九五、一八九六、一八九七、一八九八、一八九九、一九〇〇、一九〇一、一九〇二、一九〇三、一九〇四、一九〇五、一九〇六、一九〇七、一九〇八、一九〇九、一九一〇、一九一一、一九一二、一九一三、一九一四、一九一五、一九一六、一九一七、一九一八、一九一九、一九二〇、一九二一、一九二二、一九二三、一九二四、一九二五、一九二六、一九二七、一九二八、一九二九、一九三〇、一九三一、一九三二、一九三三、一九三四、一九三五、一九三六、一九三七、一九三八、一九三九、一九四〇、一九四一、一九四二、一九四三、一九四四、一九四五、一九四六、一九四七、一九四八、一九四九、一九五〇、一九五一、一九五二、一九五三、一九五四、一九五五、一九五六、一九五七、一九五八、一九五九、一九六〇、一九六一、一九六二、一九六三、一九六四、一九六五、一九六六、一九六七、一九六八、一九六九、一九七〇、一九七一、一九七二、一九七三、一九七四、一九七五、一九七六、一九七七、一九七八、一九七九、一九八〇、一九八一、一九八二、一九八三、一九八四、一九八五、一九八六、一九八七、一九八八、一九八九、一九九〇、一九九一、一九九二、一九九三、一九九四、一九九五、一九九六、一九九七、一九九八、一九九九、二〇〇〇、二〇〇一、二〇〇二、二〇〇三、二〇〇四、二〇〇五、二〇〇六、二〇〇七、二〇〇八、二〇〇九、二〇一〇、二〇一一、二〇一二、二〇一三、二〇一四、二〇一五、二〇一六、二〇一七、二〇一八、二〇一九、二〇二〇、二〇二一、二〇二二、二〇二三、二〇二四、二〇二五、二〇二六、二〇二七、二〇二八、二〇二九、二〇三〇、二〇三一、二〇三二、二〇三三、二〇三四、二〇三五、二〇三六、二〇三七、二〇三八、二〇三九、二〇四〇、二〇四一、二〇四二、二〇四三、二〇四四、二〇四五、二〇四六、二〇四七、二〇四八、二〇四九、二〇五〇、二〇五一、二〇五二、二〇五三、二〇五四、二〇五五、二〇五六、二〇五七、二〇五八、二〇五九、二〇六〇、二〇六一、二〇六二、二〇六三、二〇六四、二〇六五、二〇六六、二〇六七、二〇六八、二〇六九、二〇七〇、二〇七一、二〇七二、二〇七三、二〇七四、二〇七五、二〇七六、二〇七七、二〇七八、二〇七九、二〇八〇、二〇八一、二〇八二、二〇八三、二〇八四、二〇八五、二〇八六、二〇八七、二〇八八、二〇八九、二〇九〇、二〇九一、二〇九二、二〇九三、二〇九四、二〇九五、二〇九六、二〇九七、二〇九八、二〇九九、二一〇〇、二一〇一、二一〇二、二一〇三、二一〇四、二一〇五、二一〇六、二一〇七、二一〇八、二一〇九、二一一〇、二一一一、二一一二、二一一三、二一一四、二一一五、二一一六、二一一七、二一一八、二一一九、二一二〇、二一二一、二一二二、二一二三、二一二四、二一二五、二一二六、二一二七、二一二八、二一二九、二一三〇、二一三一、二一三二、二一三三、二一三四、二一三五、二一三六、二一三七、二一三八、二一三九、二一四〇、二一四一、二一四二、二一四三、二一四四、二一四五、二一四六、二一四七、二一四八、二一四九、二一五〇、二一五一、二一五二、二一五三、二一五四、二一五五、二一五六、二一五七、二一五八、二一五九、二一六〇、二一六一、二一六二、二一六三、二一六四、二一六五、二一六六、二一六七、二一六八、二一六九、二一七〇、二一七一、二一七二、二一七三、二一七四、二一七五、二一七六、二一七七、二一七八、二一七九、二一八〇、二一八一、二一八二、二一八三、二一八四、二一八五、二一八六、二一八七、二一八八、二一八九、二一九〇、二一九一、二一九二、二一九三、二一九四、二一九五、二一九六、二一九七、二一九八、二一九九、二二〇〇、二二〇一、二二〇二、二二〇三、二二〇四、二二〇五、二二〇六、二二〇七、二二〇八、二二〇九、二二一〇、二二一一、二二一二、二二一三、二二一四、二二一五、二二一六、二二一七、二二一八、二二一九、二二二〇、二二二一、二二二二、二二二三、二二二四、二二二五、二二二六、二二二七、二二二八、二二二九、二二三〇、二二三一、二二三二、二二三三、二二三四、二二三五、二二三六、二二三七、二二三八、二二三九、二二四〇、二二四一、二二四二、二二四三、二二四四、二二四五、二二四六、二二四七、二二四八、二二四九、二二五〇、二二五一、二二五二、二二五三、二二五四、二二五五、二二五六、二二五七、二二五八、二二五九、二二六〇、二二六一、二二六二、二二六三、二二六四、二二六五、二二六六、二二六七、二二六八、二二六九、二二七〇、二二七一、二二七二、二二七三、二二七四、二二七五、二二七六、二二七七、二二七八、二二七九、二二八〇、二二八一、二二八二、二二八三、二二八四、二二八五、二二八六、二二八七、二二八八、二二八九、二二九〇、二二九一、二二九二、二二九三、二二九四、二二九五、二二九六、二二九七、二二九八、二二九九、二三〇〇、二三〇一、二三〇二、二三〇三、二三〇四、二三〇五、二三〇六、二三〇七、二三〇八、二三〇九、二三一〇、二三一一、二三一二、二三一三、二三一四、二三一五、二三一六、二三一七、二三一八、二三一九、二三二〇、二三二一、二三二二、二三二三、二三二四、二三二五、二三二六、二三二七、二三二八、二三二九、二三三〇、二三三一、二三三二、二三三三、二三三四、二三三五、二三三六、二三三七、二三三八、二三三九、二三四〇、二三四一、二三四二、二三四三、二三四四、二三四五、二三四六、二三四七、二三四八、二三四九、二三五〇、二三五一、二三五二、二三五三、二三五四、二三五五、二三五六、二三五七、二三五八、二三五九、二三六〇、二三六一、二三六二、二三六三、二三六四、二三六五、二三六六、二三六七、二三六八、二三六九、二三七〇、二三七一、二三七二、二三七三、二三七四、二三七五、二三七六、二三七七、二三七八、二三七九、二三八〇、二三八一、二三八二、二三八三、二三八四、二三八五、二三八六、二三八七、二三八八、二三八九、二三九〇、二三九一、二三九二、二三九三、二三九四、二三九五、二三九六、二三九七、二三九八、二三九九、二四〇〇、二四〇一、二四〇二、二四〇三、二四〇四、二四〇五、二四〇六、二四〇七、二四〇八、二四〇九、二四一〇、二四一一、二四一二、二四一三、二四一四、二四一五、二四一六、二四一七、二四一八、二四一九、二四二〇、二四二一、二四二二、二四二三、二四二四、二四二五、二四二六、二四二七、二四二八、二四二九、二四三〇、二四三一、二四三二、二四三三、二四三四、二四三五、二四三六、二四三七、二四三八、二四三九、二四四〇、二四四一、二四四二、二四四三、二四四四、二四四五、二四四六、二四四七、二四四八、二四四九、二四五〇、二四五一、二四五二、二四五三、二四五四、二四五五、二四五六、二四五七、二四五八、二四五九、二四六〇、二四六一、二四六二、二四六三、二四六四、二四六五、二四六六、二四六七、二四六八、二四六九、二四七〇、二四七一、二四七二、二四七三、二四七四、二四七五、二四七六、二四七七、二四七八、二四七九、二四八〇、二四八一、二四八二、二四八三、二四八四、二四八五、二四八六、二四八七、二四八八、二四八九、二四九〇、二四九一、二四九二、二四九三、二四九四、二四九五、二四九六、二四九七、二四九八、二四九九、二五〇〇、二五〇一、二五〇二、二五〇三、二五〇四、二五〇五、二五〇六、二五〇七、二五〇八、二五〇九、二五一〇、二五一一、二五一二、二五一三、二五一四、二五一五、二五一六、二五一七、二五一八、二五一九、二五二〇、二五二一、二五二二、二五二三、二五二四、二五二五、二五二六、二五二七、二五二八、二五二九、二五三〇、二五三一、二五三二、二五三三、二五三四、二五三五、二五三六、二五三七、二五三八、二五三九、二五四〇、二五四一、二五四二、二五四三、二五四四、二五四五、二五四六、二五四七、二五四八、二五四九、二五五〇、二五五一、二五五二、二五五三、二五五四、二五五五、二五五六、二五五七、二五五八、二五五九、二五六〇、二五六一、二五六二、二五六三、二五六四、二五六五、二五六六、二五六七、二五六八、二五六九、二五七〇、二五七一、二五七二、二五七三、二五七四、二五七五、二五七六、二五七七、二五七八、二五七九、二五八〇、二五八一、二五八二、二五八三、二五八四、二五八五、二五八六、二五八七、二五八八、二五八九、二五九〇、二五九一、二五九二、二五九三、二五九四、二五九五、二五九六、二五九七、二五九八、二五九九、二六〇〇、二六〇一、二六〇二、二六〇三、二六〇四、二六〇五、二六〇六、二六〇七、二六〇八、二六〇九、二六一〇、二六一一、二六一二、二六一三、二六一四、二六一五、二六一六、二六一七、二六一八、二六一九、二六二〇、二六二一、二六二二、二六二三、二六二四、二六二五、二六二六、二六二七、二六二八、二六二九、二六三〇、二六三一、二六三二、二六三三、二六三四、二六三五、二六三六、二六三七、二六三八、二六三九、二六四〇、二六四一、二六四二、二六四三、二六四四、二六四五、二六四六、二六四七、二六四八、二六四九、二六五〇、二六五一、二六五二、二六五三、二六五四、二六五五、二六五六、二六五七、二六五八、二六五九、二六六〇、二六六一、二六六二、二六六三、二六六四、二六六五、二六六六、二六六七、二六六八、二六六九、二六七〇、二六七一、二六七二、二六七三、二六七四、二六七五、二六七六、二六七七、二六七八、二六七九、二六八〇、二六八一、二六八二、二六八三、二六八四、二六八五、二六八六、二六八七、二六八八、二六八九、二六九〇、二六九一、二六九二、二六九三、二六九四、二六九五、二六九六、二六九七、二六九八、二六九九、二七〇〇、二七〇一、二七〇二、二七〇三、二七〇四、二七〇五、二七〇六、二七〇七、二七〇八、二七〇九、二七一〇、二七一一、二七一二、二七一三、二七一四、二七一五、二七一六、二七一七、二七一八、二七一九、二七二〇、二七二一、二七二二、二七二三、二七二四、二七二五、二七二六、二七二七、二七二八、二七二九、二七三〇、二七三一、二七三二、二七三三、二七三四、二七三五、二七三六、二七三七、二七三八、二七三九、二七四〇、二七四一、二七四二、二七四三、二七四四、二七四五、二七四六、二七四七、二七四八、二七四九、二七五〇、二七五一、二七五二、二七五三、二七五四、二七五五、二七五六、二七五七、二七五八、二七五九、二七六〇、二七六一、二七六二、二七六三、二七六四、二七六五、二七六六、二七六七、二七六八、二七六九、二七七〇、二七七一、二七七二、二七七三、二七七四、二七七五、二七七六、二七七七、二七七八、二七七九、二七八〇、二七八一、二七八二、二七八三、二七八四、二七八五、二七八六、二七八七、二七八八、二七八九、二七九〇、二七九一、二七九二、二七九三、二七九四、二七九五、二七九六、二七九七、二七九八、二七九九、二八〇〇、二八〇一、二八〇二、二八〇三、二八〇四、二八〇五、二八〇六、二八〇七、二八〇八、二八〇九、二八一〇、二八一一、二八一二、二八一三、二八一四、二八一五、二八一六、二八一七、二八一八、二八一九、二八二〇、二八二一、二八二二、二八二三、二八二四、二八二五、二八二六、二八二七、二八二八、二八二九、二八三〇、二八三一、二八三二、二八三三、二八三四、二八三五、二八三六、二八三七、二八三八、二八三九、二八四〇、二八四一、二八四二、二八四三、二八四四、二八四五、二八四六、二八四七、二八四八、二八四九、二八五〇、二八五一、二八五二、二八五三、二八五四、二八五五、二八五六、二八五七、二八五八、二八五九、二八六〇、二八六一、二八六二、二八六三、二八六四、二八六五、二八六六、二八六七、二八六八、二八六九、二八七〇、二八七一、二八七二、二八七三、二八七四、二八七五、二八七六、二八七七、二八七八、二八七九、二八八〇、二八八一、二八八二、二八八三、二八八四、二八八五、二八八六、二八八七、二八八八、二八八九、二八九〇、二八九一、二八九二、二八九三、二八九四、二八九五、二八九六、二八九七、二八九八、二八九九、二九〇〇、二九〇一、二九〇二、二九〇三、二九〇四、二九〇五、二九〇六、二九〇七、二九〇八、二九〇九、二九一〇、二九一一、二九一二、二九一三、二九一四、二九一五、二九一六、二九一七、二九一八、二九一九、二九二〇、二九二一、二九二二、二九二三、二九二四、二九二五、二九二六、二九二七、二九二八、二九二九、二九三〇、二九三一、二九三二、二九三三、二九三四、二九三五、二九三六、二九三七、二九三八、二九三九、二九四〇、二九四一、二九四二、二九四三、二九四四、二九四五、二九四六、二九四七、二九四八、二九四九、二九五〇、二九五一、二九五二、二九五三、二九五四、二九五五、二九五六、二九五七、二九五八、二九五九、二九六〇、二九六一、二九六二、二九六三、二九六四、二九六五、二九六六、二九六七、二九六八、二九六九、二九七〇、二九七一、二九七二、二九七三、二九七四、二九七五、二九七六、二九七七、二九七八、二九七九、二九八〇、二九八一、二九八二、二九八三、二九八四、二九八五、二九八六、二九八七、二九八八、二九八九、二九九〇、二九九一、二九九二、二九九三、二九九四、二九九五、二九九六、二九九七、二九九八、二九九九、三〇〇〇、三〇〇一、三〇〇二、三〇〇三、三〇〇四、三〇〇五、三〇〇六、三〇〇七、三〇〇八、三〇〇九、三〇一〇、三〇一一、三〇一二、三〇一三、三〇一四、三〇一五、三〇一六、三〇一七、三〇一八、三〇一九、三〇二〇、三〇二一、三〇二二、三〇二三、三〇二四、三〇二五、三〇二六、三〇二七、三〇二八、三〇二九、三〇三〇、三〇三一、三〇三二、三〇三三、三〇三四、三〇三五、三〇三六、三〇三七、三〇三八、三〇三九、三〇四〇、三〇四一、三〇四二、三〇四三、三〇四四、三〇四五、三〇四六、三〇四七、三〇四八、三〇四九、三〇五〇、三〇五一、三〇五二、三〇五三、三〇五四、三〇五五、三〇五六、三〇五七、三〇五八、三〇五九、三〇六〇、三〇六一、三〇六二、三〇六三、三〇六四、三〇六五、三〇六六、三〇六七、三〇六八、三〇六九、三〇七〇、三〇七一、三〇七二、三〇七三、三〇七四、三〇七五、三〇七六、三〇七七、三〇七八、三〇七九、三〇八〇、三〇八一、三〇八二、三〇八三、三〇八四、三〇八五、三〇八六、三〇八七、三〇八八、三〇八九、三〇九〇、三〇九一、三〇九二、三〇九三、三〇九四、三〇九五、三〇九六、三〇九七、三〇九八、三〇九九、三一〇〇、三一〇一、三一〇二、三一〇三、三一〇四、三一〇五、三一〇六、三一〇七、三一〇八、三一〇九、三一一〇、三一一一、三一一二、三一一三、三一一四、三一一五、三一一六、三一一七、三一一八、三一一九、三一二〇、三一二一、三一二二、三一二三、三一二四、三一二五、三一二六、三一二七、三一二八、三一二九、三一三〇、三一三一、三一三二、三一三三、三一三四、三一三五、三一三六、三一三七、三一三八、三一三九、三一四〇、三一四一、三一四二、三一四三、三一四四、三一四五、三一四六、三一四七、三一四八、三一四九、三一五〇、三一五一、三一五二、三一五三、三一五四、三一五五、三一五六、三一五七、三一五八、三一五九、三一六〇、三一六一、三一六二、三一六三、三一六四、三一六五、三一六六、三一六七、三一六八、三一六九、三一七〇、三一七一、三一七二、三一七三、三一七四、三一七五、三一七六、三一七七、三一七八、三一七九、三一八〇、三一八一、三一八二、三一八三、三一八四、三一八五、三一八六、三一八七、三一八八、三一八九、三一九〇、三一九一、三一九二、三一九三、三一九四、三一九五、三一九六、三一九七

大阪人……一二三
大阪町……二九〇
大津……三〇三、三六六
大野藩……一五三
大野丸……一五八
大村……三六〇
大森……三二七、三三三
大森海岸……一四三
阿蘭陀……一四四
ヲロシア……三六九

【カ行】

カ

杭州……一三九
江州商人……一七三
高野山……四三
加賀國……四五、四九
柿崎……三八五
掛川……三八六
金澤……三六三
金杉……三六五
金杉海手……三六五
金谷……三八六
川越……三六四
川崎……五一、五七
川崎驛……五一
河崎驛……五五
河內……三〇一、三〇三
樺太島……一五八
河原者……二四
甲斐……三八四
甲府……三七七
上方……一八六
上道郡花畑……七五
龜作村……二四

茅町……三九八
咸宜園……一二四
神田お玉が池……一五七
神田橋……三五六
蒲原……三八六
東埔寨……一四四

キ

喜瀬川……二四七
木曾街道……一九六
岐蘇道中……一九八
木曾路……一九六
北亞墨利加……一三三、一四四
木谷村……七五
畿內……三八八、四五三
京都……六八、六九、九一、一二八、一三八、一五〇、一五九、一七一、一七三、一七五、二七二、二八二、二八四、三八〇、三八七、四〇四、四四九
希臘……四七

ク

久慈郡……二四
九段坂下……一五四
久保町……三八八
熊本……七八、四五三、四五五
熊本城……一一
久良岐郡……九六
懷德書院……九一
觀光丸……一五七
關東……一五九

ケ

奚疑塾……九一
京阪……一七二

コ

興讓館……八四